
星の漣のむこうには

夕月琥珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の漣のむこうには

【Nコード】

N0352B

【作者名】

夕月琥珀

【あらすじ】

宇宙の果てのあの星へ行きたい！人は夢を叶える力を必ず持っている。三人の天才少年少女はやがて夢を叶えてゆくが愛と葛藤の渦へと巻き込まれてしまう……壮大な宇宙を舞台に繰りひろげられるラブサスペンス・ファンタジーが今始まる！

第一部 第二章（前書き）

登場人物

福本茉莉沙 この物語の主人公。ピアノが好きな女の子だが、

少し臆病な性格

一ノ原もな美 茉莉沙の同級生。やがて茉莉沙との絡みは激しいものに？

フレード・ナツザワ 宇宙の彼方の星の住人で、太陽たちの遠い子孫

デйм・ナツザワ フレードの息子。甘ったれだが、意外な性癖があるかも…

トピー・ミールズ コスモ・エクスプレスのCA。類稀なる美男子

松葉谷翠子 ピアノ発表会で茉莉沙に自信をつけさせる優しいお姉さん

夏沢太陽 茉莉沙の初恋の人。しかし微妙な関係

*この物語はフィクションであり、登場人物や団体・建物・一部の天体などは架空のものであります。また文中に不適切な表現があるかも知れませんが、登場人物の心情やストーリーを盛り上げる為ですのでご了承下さい。

第一部 第一章

宇宙の果てのあの星へ行きたい！

人は夢を叶える力を必ず持っている。

三人の天才少年少女はやがて夢を叶えてゆくが

愛と葛藤の渦へと巻き込まれてしまう……

壮大な宇宙を舞台に繰りひろげられる

ラブサスペンス・ファンタジーが今始まる！

登場人物

福本茉莉沙 この物語の主人公。ピアノが好きな女の子だが、

少し臆病な性格

一ノ原もな美 茉莉沙の同級生。やがて茉莉沙との絡みは激し

いものに？

フレード・ナツザワ 宇宙の彼方の星の住人で、太陽たちの遠

い子孫

デーム・ナツザワ フレードの息子。甘ったれだが、意外な性

癖があるかも…

トピー・ミールズ コスモ・エクスプレスのCA。類稀なる美

男子

松葉谷翠子 ピアノ発表会で茉莉沙に自信をつけさせる優しい

お姉さん

夏沢太陽 茉莉沙の初恋の人。しかし微妙な関係

*この物語はフィクションであり、登場人物や団体・建物・一部の天体などは架空のものであります。また文中に不適切な表現があるかも知れませんが、登場人物の心情やストーリーを盛り上げる為ですのでご了承下さい。

第一章

プロローグ・旅立ちの歌

「皆様、本日はコスモ・エクスプレスをご利用頂き誠にありがとうございます。当列車はトレインナンバー3846、急行・ロワンドテ・リヤ・ヤポーナコスモポート発 地球・イーストエイジアトキオシティ行きでございます。途中停車ステーションは惑星ミラージュ↓惑星ルミエール↓宇宙流通センター↓トロピカル・プラネット↓想い出のほろき星↓& a m p ;ブルースター↓コスモグランドコアステーション↓宇宙コロニー村↓天の川の橋↓海王星↓天王星↓土星↓木星↓火星↓月の順で停車いたします。終点のトキオシティには、地球時間でA・D・3025年8月10日14:30頃の到着となり、航行時間は15日と21時間30分を予定しております

……」

「ねえ、パパ、お腹すいてきちゃった」

フレードとデイムの父子は、列車のコパートメントにカートを置いてやっと一息ついたが、息子のデイムは立派な風貌の割に子供で、座ると早速わがママが始まってしまった。

父親のフレードは今乗り込んだ電鉄会社の会長をしており、今年はコスモ・エクスプレス創立千周年記念という事で、あちこちの惑星でイベントが催されていて、この二人は地球でのイベントに参加すべくこの列車に乗り込み、遙か彼方の星への旅立ちを今心待ちにしているところである。

「もう間もなく出発だ。そうになると、このロワンドテ・リヤ星の周

りを列車が大きくカーブする。そんな時は立ち歩いたりせずじっと座っているんだ。いいな？」

「ハイ……」

「離星の時と着星の時、或いはワープ空間点を通過するときは揺れるから危険だ。だから席に着くよう車掌さんも言っただよ。」

「パパ、ワープ空間点……って？」

「ああそれはな、近道のトンネルみたいなものだ。ロワンドテ・リヤと地球には、何万光年もの距離があるから、まともに行くと到着する前に私達は皆死んでいるよ。ははは……。だから途中にワープのトンネルをいくつも備えてある。気の遠くなる距離もあつという間さ」

「フーン……すごいなあ」

コンコンコン

コパートメントのドアを3回ノックする音が聞こえた。

「会長、失礼して宜しいでしょうか？」

「どうぞ入り給え」

ドアの向こう側にいたのは若いキャビンアテンダントで、瞬きを忘れてしまうほどの美男子である。

“目が醒めるような……” とはこの事で、デームは口をあぐりとだらしなくしまりのない顔になっていた。

「おしほりをどうぞ」

「ありがとうございます」

「はいお坊ちゃま、どうぞ」

「……………」

「ん？これ、デーム何とか言いなさい。君、本当に申し訳ない。不躰な息子で」

「いえいえ、とんでもございません。デーム様もお疲れの様子で……そろそろ昼食どきのようですので、安全圏内に入りましたら、すぐお持ち致します」

「いやいや、私達は食堂車ビュッフェに行くから。多忙な手をわずらわせる訳

に行きますまい。どうか業務に集中するように」

「いいえ、お食事のご用意などわけもない事です。どうぞ好きなものをお申しつけ下さい」

キラキラ潤んでいるその瞳に見つめられると誰もがお手上げになるだろう。美しく生まれつくのは得であり美しいとは罪な事……このキャビンアテンダントを見ているとこの世の不公平さについて深く考えさせられてしまう。

「そうか、じゃあ私はキールとグラム鳥のグリルを、マナもつけてデйм、お前は何かいい？」

「……何でも……」

「お前、どうかしたのか？」

フレードはデймの額に手を当てた。熱はないようだが、急に元気がなくなっただから後で医務室車両で診てもらった方がいいのかと心配になってくる。さっきまで「腹減った」と騒いでいたのに……

「……ファラディーヤ、食べたい。あとミュータとマナも……食後にはカーファとグラレーテ……」

「そ、そうか、分かった。あの、君。この子にはホスタ貝のファラディーヤとルージュヤミュータにマナを3つぐらいと。食後にはカーファとグラレーテ。私はカーファだけでいい」

「はい、かしこまりました。では点検確認等がありますので私はこれで……何かありましたら、すぐお知らせください」

「ありがとうございます。ところで君は地球の土地勘はいい方かね？」

「ええ、何度も行き来しておりますから。わが社の千年祭のイベントでしたらお任せください。手の空いている時はご案内致します。まあ、私が仮に乗務が多忙になりましても会長のお世話させて頂く者は沢山おりますのでどうぞご心配なさらないように……では失礼致します。ごゆっくりお寛ぎ下さい」

「ああどうも。よろしくね」

「……………」

デймはただボーっと口をあけたまま何も言わない。食欲は人一倍

ありそうだから腹の具合は悪くないようだが、何か別の病気なのかも……やはり後で診てもらった方がいいのだろうか？フレードはおかしくなってしまった息子を不憫に思った。

千年前に想いを馳せて

『皆様大変お待たせ致しました。間もなく出発致します。惑星を
離れる際揺れる事がございます。今しばらくお席にお着き下さいませ』

『1番線より列車が発車致します。ドアが閉まりますのでご注意ください』

? ♪ # ♪ ♪ ♪ # ♪ —

ホームで“さらば私の星よ”という曲の発車メロディーが流れている。

いよいよ出発かと思うと心躍り、曲に合わせて歌いたい気分になつてくるものだ。

さよなら さよなら いざ旅立ちへ 君たちのこと忘れはしま
まい

山も川も海も空も みんなみんな 美しいけれど

何かが背中を押している 振り返るなとたしなめている

さよなら さよなら 私の星よ きれいな想い出よ いざさら
ば

(こんな歌詞だったかな?)

二人とも声に出すのは気恥ずかしく心の中で歌ってみた。

そのうち、窓から見えるステーションの天井のドームが動き出し、ホームが滑り始めると、見送りの人々の泣き笑う顔が次から次へと

流れていく。

安全確認ロボットも手を振り、ディムは思わず手を振り返した。スピードがぐんぐん上がって行くのが分かる。

時速100キロは軽く超えただろうか。

プラットフォームが瞬く間に小さくなり、下方へ沈んでゆく。

そして、目の前にヤポーナの街が。

寺院は鐘を打つ頃で、シルバーの摩天楼が陽射しを反射して眩しい。

遙か向こうまで続くメガロポリス、むこうに霞む地平線が弧を描いてゆく。

地平線はどんどん丸くなっていき、やがて空は紫に藍色に移ろいながら、いくつものスパンコールを煌びやかに飾り始めた。

夕べの宴に酔いしれるように二人は溜息をついている。

「ああ……キレイだな」

「うむ、本物の天体ショーだからな」

痛い程、胸が鼓動を打つ、地上で見上げる夜空とは格段に違う世界があまりに素晴しくて、ディムの頬に涙の河がいつしか流れていた。

「……………」

言葉にならない、言葉に出来ない。

瞳から溢れる感動を払おうとしないで、ディムはただ窓にへばりついている。プラネタリウムにない、無限の広がりを感じながら……………」

『ご案内致します。当エクスプレスは只今惑星ロワンドテ・リヤを定刻どおり出発致しました。次のステーションは、惑星ミラージュ、惑星ミラージュでございます。この列車は引力制御装置が作動しており、車内は常に安定した重力を保っております。また特殊バリアチューブ内を運行しておりますので、流星雨や宇宙嵐の影響を受ける事なく安全で快適な宇宙の旅をお楽しみ頂けますが、カーブ

及びバリアチューブ切り替え点やワープ空間点の通過時並びに、事故防止のための急停車の際は揺れますのでご注意ください。間もなくバリアチューブ切り替え点に入ります。今しばらくお席にお着き下さいませ」

「パパ、質問なんですけど」

（ぶっ！（^^））

振り向いたデームは涙と鼻水がグショグショにまみれて我が子ながら可笑しい顔で、思わず声に出して大笑いしそうになったが、子供はつまらない事でも傷ついてしまうので、フレードは必死にこらえた。

「ひ、ひ、ひ、ひどい顔だな。じ、じっとしてな。さい、うぶっ」

（お、大人気無いかから笑ってはいけない。・・・でも、く、苦しい（^^））

顔筋と腹筋の痙攣と戦いながらも早く素に戻りたくてハンカチでデームの顔をきれいにしてやった。

人前で可笑しいな漫画を読んで笑いを堪えるのは辛いと聞いたが、フレードは今身をもって体験した気がする。

「バリアチューブ……ナントカつていうのは？」

「ああ、バリアチューブ切り替え点だね。惑星は自転しているから線路を同じ方向に伸ばすのは無理だ。だから惑星の周りで途切れる線路を沢山張り巡らせて、ステーションから伸びてくるチューブと繋がる仕組みになっている。列車の時刻表はチューブの継ぎ目がピッタリ合わさる時間に合わせているんだ」

デームはイメージした。

丸い星の周りに沢山の線……

惑星からの一本の線がその一つと繋がる、そして惑星が少し回るとその隣の別の線と繋がりそれを繰り返していく。

「あ、なあーんだ、そうゆう事かア」
ガクン！

車内に振動が走った。

「ほら、今バリアチューブ切り替え点を通過したよ。でも地球方面は今、反対方向にあるので大きくカーブしてから本線に入るんだ。他の星へ行く線もあるので、惑星の周りはバリアチューブが複雑に網の目になってるのさ」

「へえー」

惑星ロワンドテ・リヤのステーションは、列車が1日に2本程しかないローカル星とは違い、地球をはじめオリオン、アンドロメダ、スバル星雲、サザンクロス、北極星など各方面行きの列車が発車しており、特急も停車する大きなステーションだ。ディムの頭には毛細血管の様なチューブの網が張り巡らされ、何かの拍子でグシャグシャに絡まってしまふのではと心配になったが、実際には立体交差しているので絡まるのは有り得ない。

「さあ見えて来るぞ。私たちのロワンドテ・リヤだ」

大きい。

とても大きな青い星が迫力満点に控えて、ディムはまた口をぽかんと開け、ただ只圧倒されている。

青い海に緑の大陸、綿飾りの雲が取り巻く美しい星。

しかし光の強い恒星に照らされて眩しく、ずっと眺めていると目が疲れてしまう。

「この列車、ご先祖様たちが作つたんだよね。ご先祖様もこうして、ロワンドテ・リヤを見ていたのかなあ？」

ディムは眩しい星を見つめていた目を、掌の金星丘でこすりながら訪ねた。

「ああ、そうだとも。だがご先祖様は元々地球人だったんだ。といつても、ロワンドテ・リヤ人は地球の子孫だったりするんだがな」

「エ！？そうなの？知らなかったなあ」

「詳しいことが書いてある本がある。ディム、時間はたっぷりあるから読んでみるか？」

「うん、読む、読む」

「千年前、三人の天才達がいた。これはそのご先祖様の、波乱に満ちた物語だ。あとで感想文を書いてもらうぞ」

「エーッイヤだー」

「はは…冗談だよ。さあ読みなさい」

フレードが鞆の中を探ると1枚のディスクが出てきた。

分厚く重い本も今は昔、ペーパーレスのこの時代、どんなに長い物語だって持ち運びはとても便利になった。文明の進化は目覚しく、時に驚かされてしまう。

“星のさざ波の向こうには” — 夏沢茉莉沙 著 —

タイトルはこう記されている。

新しい服を着るときや、鼻屑のアーティストの新作に触れる時、そして面白そうな書物に触れる時は何故いつもこんなときめいてくるものだろう。

ディムも胸をおさえつつもどかし気にケースを開いて、自分のモバイルコンピュータにディスクを挿入した。

ディスプレイに移る文字達は躍りながら、子孫を著者の軌跡へ誘ってゆく。

ディムは今遙かな過去へ繋がる道を辿り始めた。

— 星のさざ波の向こうには —

夜の天を仰いだら そこに星を浮かべた海が広がっている
その海に船を滑らそうか それとも大きな橋を架けようか

広大無辺な夢は 走るのをやめようとし
ない
夜に天を仰いだら そこに星を浮かべた海が広がっている
星のさざ波の向こうには 終わらない明日がある
そんな気がしてならない――

これは私がとても好きな詩であり、私の夫”太陽“とそしてす
べての人の夢にささげたい ―― そう思っています。

夏沢茉莉沙

三人の出会い

「太陽君、今日休みだね」

「アラ、知らないの？昨夜外でずつ・・と星を見てたら熱出しちゃ
ったんですって」

「パトラちゃん、何でそんなこと知ってるの？」

「なあんでも知ってるのよ。ホーツホツホツ（^^）」

私・茉莉沙と太陽の出会いには小学校の時。入学式で同じ体育館に
居た筈なのに、そのときの彼は沢山の子供の中に紛れて印象という
ものが特に無かった。と言うより、ただ私が憶えていないだけかも
知れない。

でも高学年になって太陽と同じクラスになり、初めて言葉を交わ
すようになった。

この年頃には早い子ではもう大人の影がさし始める。
私の中の見えないところで月が満ちて来たのもこの頃だったと思
うが、それより太陽の声が周りの子供よりかすれてきているのを聞
く度、言葉に出来ないセックスアピールを私は感じていたのだ。

或る日、私達のクラスに転入生がやってきた。

「紹介します。一ノ原もな美さんです。皆さん仲良くして下さい」

「一ノ原もな美です。ワタシ外国にずっといたから早く日本に慣れて、クラスの人達とお友達になりたいです。よろしくお願いします」

「きれいなコね」

「うわービジンだなあ & a m p ; # 9 8 2 5 ;」

おかつぱの髪型にミステリアスな雰囲気……

それは絶世の美女“クレオパトラ”のようで、彼女のあだ名は“パトラ”に決定した。

「はい、静かに。一ノ原さん、席は福本さんの隣に座ってね」
もな美は私に近寄り微笑みかけた。

「福本サン、よろしくネ。いろいろ教えてちょうだい」

「あ……こ、こちらこそ」

頭の下さそうなもな美に勉強を教えてもらおうと、私は密かに期待していたものである。

私ともな美と太陽――

この三人が織りなす複雑な人間模様を知る由もなく、私達は星の下で巡り逢ってしまった……

放課後私ともな美は、休んでいる太陽が心配で様子を見に行くことにした。

ぐったりしていると思いきや、普通に笑ってお喋りなどやっている。

「あら太陽君、思ったより元気そうじゃない。ヨカッタ」

「星座の観察もいいケド、夜風は体に毒ヨ」

面目無さそうに照れ笑いの太陽の顔が可愛くて、私までつい笑顔になっていく。

「この間もらったお年玉が意外に多くて、天体望遠鏡買ったんだ。

ついうれしくてつい時間忘れて見てたらこうなっちゃった。デモ、星ってホントキレイだなー」

「私も見たーい。今度見せてえ」

「抜け駆けはダメよ。ワタシだって見たいわ」

「じゃ僕が元気になつたら、ネ」

「ヤッターうれしいー（^^）」

太陽の笑顔がとてもキュートだったのが印象的——と思ったのが私だけではないと、この時は知らずにいた。

もな美は何も言わないけれど……

そして、夢

「アラ、太陽君おはよう。もう具合イイの？」

二、三日して学校の靴箱の前で談笑していたもな美が、太陽の姿を見つけた。

口元からキラリ覗いている八重歯が私を捕らえて放さない。

実を言うとその口にキスをしてみたいと思っていて、自分はお早熟な子だと思いつつ想像を膨らませ、いつの間にか自分の口元もにやけてしまっている。

ここしばらくの間私には何かが足りない気がしていたが、久しぶりに彼の顔を見て分かった。それは、太陽が知らずに分けてくれる元気、太陽は私の“太陽”だと。

思春期の入り口にいて何も経験など無かったが、例えばビギナーでも恋の素晴らしさというものは確かに覚え始めて、大人への階段の初めの一段を踏み出していた。

「太陽君、今日の国語の時間に作文の宿題の発表があるんだケド、やってないよね？」

一昨日出された宿題を病欠の太陽が知る筈もないのに、私は先生に叱られると心配になってしまった。

「ああ、それならパトラが教えてくれたからやってきたヨ」

「太陽君の発表、楽しみー（^^）」

「よせよオ」

もな美は明るくて親切で、積極的な女の子。誰かに恋すれば開けっぴろげに言いそうだ。

それに引き換え、茉莉沙は引っ込み思案で駄目ネと、私は自分をいさめてしまう。

そして、国語の時間――

「次は一ノ原さん、発表して下さい」

「ハイ」

もな美は立ち上がり自分の作文を朗読し始めた。私はあがり症で、ドキドキしながら順番待ちをしていると言っのに、もな美ときたら、ずっと背筋の伸びたきれいな姿勢で、アナウンサーみたいな抑揚をつけて読んでいるのだ。

彼女のようになれたら――と私はもな美をつくづく羨ましく思ってしまう。

「ワタシの夢は、バレリーナで、憧れのプリマ・ドンナになることです。オペラハウスの舞台に立ち、七色のライトを浴びて思う存分踊りたい。そして世界中から喝采を受けて、誰もが知るモナミ・イチノハラ……そう、ワタシの名前はフランス語で“私の友達”という意味で、世界のあらゆる人と友達になれるようにとつけられた名前です。その名のとおり、いろんな国のたくさんの方の前で、踊り、ふれあい、そしてこの地球上をくまなく駆け巡る女神のような女性――そんな人になりたいです。」

パチパチパチ

「パトラちゃんすごいネー」

「単なる作文よ。大した事ないワ」

教室中に拍手が湧き上がり指笛を吹く男子までいる。

大人顔負けの文章に舌を巻いて、私はもな美を尊敬するしかなく、

他の言葉は見つからなかった。強いて言うと、願わくばその自信、半分でも私に分けて欲しい……

「これ、静かに。一ノ原さんよく書けていましたね。夢がかなうよう頑張ってください。では、次、夏沢君……は一昨日は休みだったわね」

「先生、宿題ならやってきました」

「あらそう、じゃ発表してください」

（太陽君、ガンバツテ）

まるで自分の事のように、私は力を込めて手を組んでいる。

太陽の顔がいつに無く神妙に見えて、いつしか私は祈るような気持ちになっていた。

「ボクの将来の夢、それは宇宙飛行士になって、月や火星、あと知らない星に行ってみたいです。宇宙探索機の“スペースレンジャ―”に乗るために、英語を覚えたり、訓練をいっぱいしなきゃいけないのですが、それでも宇宙から地球をながめてみたいので頑張つて特訓を受けたいと思います。月に行ったら、月の石を持って帰り好きな人にお土産であげたいです。おわり」

「キヤー」

「ヒューヒュー」

（それって誰？このクラスにいるの？）

私の胸のドキドキは発表前の緊張とは違う意味のドキドキに変わってきた。

「静かにしなさい。夏沢君素晴らしい夢ですね。宇宙に行くには算数と理科をがんばって勉強するといいでしょう。さあ次の人は……福本さん」

「は、ハイ！」

ついに来てしまった。

授業の時間が押して、私の番が来る前にチャイムが鳴ればいいのに——と言っ願いも空しく、時の螺子を司る妖精から「諦めろ」と

言われているようだ。

私は仕方なく、嫌がる体をなんとか椅子から起こした。

「私の……夢」

原稿用紙も声も震えてる。顔から火が出そうで何となくお腹も痛い。

いつそのことダッシュで逃亡しちゃえばどんなにスッキリ爽やかな事だろう。

でも全身が硬直して一歩も足を踏み出すなんてできない。私はまるで、囚われ人だ……

「わ、私は、ピアニストになりたい、です。今は……まだバイエルの上級ですが……“エディット・ピアフをたたえて”とか、ぴ、ピアノソナタ“熱情”とか、“幻想即興曲”“愛の夢”“別れの曲”などの素敵な曲を弾きこなせるように早くなりたいです……」

？

♪ # ♪ ♪ ♪ ♪ ———

ピアノの事を思うと、心の中にメロディーが流れ始めた。

そのめくるめく旋律たちは、手足に絡みつく目には見えない重い鎖を解き放って、私を自由に羽ばたかせてくれるようだ。

このとき気付いた事だが、心の鏡がどんなに暗く淀んだ色に曇ってたとしても、美しいものを想い、楽しい想像をする事で鏡には光がパアーツと差してくるのだ。

私を取り巻くイバラはすっかり枯れてしまい、掌に希望を握り締めた気持ちになっていた。すると、及び腰の体はまっすぐに立ち、原稿用紙は伏せてしまって、驚く事に腹の底からの声で自分自身を叫びだしたのだ。

「私はピアノが好きです。ピアノが私を呼んでいるのではなく、私がピアノに向かっていているのです！」

「……………」

教室は水を打ったようになってしまった。

（わ、どうしよう。みんな引いてる……）

私は何て事を言っただろうと後悔しながら口を押さえて気まずさに耐え、もう涙腺が切れてしまいそうになったが、やがて別の意味で泣きたい気持ちになっていった。

誰からともなく拍子が起こり、教室は喝采の渦へ――

（すごい、すごいわ！ステージで演奏したあとなつて、こんな感じなのかしら……）

感激するなんて生まれて初めての事で、照れくさいながらも本当に涙に咽んでいる自分がそこに立ち尽くしていた。

人生の中の忘れられないファイルのひとつは、快晴でスカイブルーが鮮やかな午後だった。

柔らかな陽射しが私の身も心も暖めていた――

勇気をだして

『皆様、当エクスプレスは只今安全圏内に入りました・食堂車や化粧室、視聴覚車両やライブラリー、売店、バーなどご利用のお客様はご自由に車内をご覧下さいませ……』

コンコンコン

またもやコパートメントにノックが響いた。

「会長、大変お待たせ致しました」

先程の美青年アテンダントが温冷ワゴンを引いてやって来た。

ゴブレットに痛いほど冷えたミネラルウォーターを注ぎ、フレードにはキール、デームにはアップルジュースをサービスしてワゴンの中から料理を取り出している。

無駄のない綺麗な動作に見とれ、デームはまた口をポカンと開いたままだ。

「ルージャミュータでございます」

二人の前に、トマトサラダが出された。

「マナを失礼します」

クラッシュアイスに乗せたバターと温かいパンが出てきた

「こちらはホスタ貝のフラディーヤと……あとこちらグラム鳥のグリルでございます。熱くなっておりますからお気をつけください」

デームにはシーフードのクリームパスタと、フレードにはソースがパチパチ弾ける鉄板が出された。

出来たての温度をそのままキープするので料理がまったく冷めていない。本当に不思議なワゴンだ、文明の利器って素晴らしい。

「それではまた後で参ります。どうぞごゆっくりお召し上がり下さい」

アテンダントがドアを閉めて行った後、デームはハアッと大きく溜息をついた。

「……ん？どうしたんだデーム、顔色が変だぞ、具合でも悪くなっただか？」

さっきまであんなに空腹を訴えてたのに、大好物を前にしてぼんやり空を見つめているので、フレードは心配になってきた。

「え？あ、ああ、大丈夫だよパパ。ん（モグモグ）おいしい、おいしいヨ。ああ、サイコー！」

何だかいつもと違うデームが心配で、地球に着いたら病院で診てもらった方がいいのでは……とフレードは本気で思い始めた。

暫くしてアテンダントがワゴンを持って再びやって来た。

「お食事はお済みになりましたでしょうか？器をお下げ致します。……会長、カーファでございます。お坊ちゃま、カーファとグラードでございます。どうぞ」

2人に食後のコーヒーが出され、デームの前には大きなアイスクリームが。

「ではごゆっくりお寛ぎになり、良い旅をお続け下さい。これで失礼致しますが、ご用の際はお呼びになって下さい。では……」

ディムは踵を返しかけたアテンダントの背中を掴むように口を開いた。

「し、し、失礼ですが、お、お名前は？」

「あ、あ、あ、あの、トピーさん。千年祭の地球大会ですケド、い、い、……一緒に……一緒に……一緒に行って頂いてもよろしいですかっ?!」

（うわあつ、言っちゃった。恥ずかしい！どうしよう、もう取り消せないし、あとの祭りだあ）

しかしトピーの潤んだサファイアの瞳は怪訝な曇りもなく、薄紅に染まるディムの顔を優しく見つめた。

(イヤッター!!!・!・!)

トピーの瞳は窓の外の大宇宙を映しているようで、キラキラ、キ

窓の外にも星達は渦を巻いていて、私達にいつも何かを語りかけ

ているのだろう。

それは幾千年の昔も今も変わらずにいる。
多分これからの永い未来も、ずっと、ずっと――

汚れなき約束

「アア寒い。でもキレイねえ」

「ホント、星が降るってこの事なのネ」

階段の上、街を見下ろす小高い丘で私ともな美は真冬の意地悪な冷え込みに縮こまっていたが、17時を過ぎるとすっかり夜の帳に覆われて、輝く都会が鏡に映るように、見上げれば奇跡の空が無限大に広がっている。

溜息が白い煙になって消えていき、ずうつと見てても飽きてこない。

見とれていたなら、そのうち自分達もいつしか星空の一部になって行くような、そんな気がしていた。

「おーい！」

「あ、太陽くん、こっちこっち」

誰かが呼びかけたと思ったら、天体望遠鏡を抱えた太陽がやって来た。

大きく手を振っている自慢したげな顔が街灯に照らされている。段々近づく屈託のない素敵な笑顔、私が一番好きな太陽の顔だ。

「ごめんね、待ったあ？」

「ううん、全然。私達も今来たトコ」

「スゴーイ、思ってたより大きいのネ。30センチくらいのもつとチツチャイのかと思ってた」

「今年のお年玉たくさんだったから、ちょっとフンパツしちゃったんだ。へへ」

太陽は何故か得意げになっても厭味がない。それが彼の魅力なのだろう。

早速天体望遠鏡をスタンバイすると、どうぞと手で合図をくれた。何気ない仕草に、この頃胸がキュンとする事がある。

よく分からなかったが、これが初恋のときめきだったのだろう。

「茉莉沙ちゃん、お先にどうぞ」

「私は次でいいワ。パトラちゃん先に見て」

「そうーお？じゃ私から。あ、まさかのぞくトコに墨なんかぬってパンダのイタズラしようとしてないでしょうねえ？」

「アハハ、大丈夫だヨ」

もな美は嬉しそうに望遠鏡を覗き込むと、溜息をつき、時々歓声を上げている。

何が見えるのだろう、宇宙にどんなものがあるのだろう……

何だかワクワクしてきた。

太陽の愛する宇宙を私も見てみたい。彼と同じ気持ちを私も楽しみたい……

「あースゴかった。凸凹までよく見えるのねえ。私、星がこんなふうになってるって知らなかったワ。あ、マリサちゃんごめんネ。お待たせー」

「ううん、いいの」

私の胸はいよいよ高鳴り、地震みたいな鼓動で体が揺れるのを感じている。

この天体望遠鏡の向こうに何があるのか、未知への期待を噛み締めながら、片目を閉じて宇宙の入り口へ瞳を近づけてみた。

「わあ——」

——黒いベルベットに 不思議なパンがいくつも浮かぶ

望遠鏡を動かせば パンが流れて行く 右へ 左へ

これは何？ 月と言う名のパン まあるいお山がいくつもあって

真ん中のくぼみは湖かしら？

湿りの海 虹の海 ためいきの入り江

陽が沈む頃はとてもきれいでしょね

紅い波のきらめきを受けて 私も航海に出てみたいわ

金色の飾りの ゴンドラに乗って

おしゃれな星たち 真つ赤なドレスの火星^{マース}

ボーダー柄がカラフルな木星^{ジュピター}

プロメテウスもスバルも スパンコールのコスチューム

どれも面白そうに笑って くるくる踊るのが私にはわかるわ

宇宙のリズムに乗って 規則正しく廻っているのが

私には見えるわ――

レンズの向こうの世界で遊ぶ私の心に、こんな詩が生まれた。

その夜忘れないうちにノートに書きとめ、後日この詩は学校の勧めで地域のコンクールに出展したら、何と金賞を受賞する事になる。彼が見せてくれたはじめての宇宙は、私の心に自信と喜びを育ててくれたのだ。

太陽ともな美と三人で星を見た帰り道、曇りのない澄んだ冬の夜空はいつまでも私達を魅了し続けていた。

その頃は三人共、この空のように天真爛漫で無垢でいられて、いつまでもこのままだと信じられたものだった。

「科学の本で見たケド、将来宇宙ステーションなんか出来て、宇宙旅行も気軽に行けるようになるんだってね」

「ソウソウ、他の星に植民地つくって地球から人が移住する事もできるんだッテ」

「じゃあ、そうなったら3人でちがう星へ行こうよ」

「うん、イイネ。私も行きたい。デモ、他の星ってタコみたいな変なのいたらイヤだなあ。気持ちワルイ」

「アッハハハ、大丈夫ヨ。食べられたりしないでしょ」

「デモお、人喰い生物だったら」

「バカねエ、そんなのありえないありえない。大体ねえタコみたいな宇宙人なんて地球の人の想像ヨ。実際いるわけないワ」

「そうかなあ」

「でもすごい事だよ。遠いところにある星に行けるようになったら 夢みたいだなあすばらしいよ」

「そうね、いつか遠くの星へ行きましょう。3人で」

「そうだね。行こう！この3人で」

もう一度見上げた空は十二等星までが鮮やかで、星の海からさざ波の囁きが聞こえてきそうだった。

子供の頃に三人で見た他愛もない夢――

まさか大人になってから嫌が上にも思い出させられるなんて、太陽にも、もな美にも、そして私にも誰も予想だに出来なかったのだ。

「あー寒い。はやく帰ろ」

「うち、今夜はビーフシチューよ。はやく食べたーい」

「あー、いいなー」

「アハハハ……」

魅惑の惑星

「しかし、あのトピーという青年には迷惑な話かも知れんが、いという事だから任せておくか……」

「パパあれは？」

「おお、次のステーションが見えて来たな。あんまりウロウロせずに着くまでは座っていなさい」

車窓の外には少し変わった輝きの星が、だんだん光を強めてこちらに近づいて来るのが分かる。

不規則に点滅しながら赤↓橙↓黄色↓黄緑↓緑↓青↓紫と色を変

え、虹色になり銀色になりオパールのように光ったりと、なんとも神秘的な雰囲気だ。

『間もなく惑星ミラージュ、惑星ミラージュに到着致します。プラネットに着星します際揺れますのでお立ち歩きのお客様はお席にお着き頂きますようお願い申し上げます。停車時間は10時間でございます。惑星観光をなさいますお客様は6 - αゲートよりミラージュ・サイトシーイングトレインにお乗換え下さいませ』

「わあ、キレイだな……」

デイムの瞳もクリスマスイルミネーションのように光り輝いている。

「ねえ、ママが言ってたケド、この星で愛の告白をすると相手は自分のとりこになって必ず恋が結ばれるって、ホントかな？」

「ああ、そんな言い伝えもあるが、それはこの星の話であって、一旦星の外に出たらそれは知らんぞ」

「じゃあ、星から出たら恋もいつぺんにさめちゃうの？」

「まあそういう事だろうな」

惑星ミラージュ――

それは魔力を秘めた不思議な屋気楼の星。

至る所に幻と、芳しい薫りと、心安らぐ音楽がある花園のような星で、人々を高揚させ、あまりの居心地良さに他の星が地獄に見えてしまい、そこを離れない人も多いという。

幻が全てを覆い隠して真実を見る事が出来ないある意味恐ろしい星だが、それでもいいから一生ここで暮らしたいなら、それはそれでひとつの人生なのだろう。

「失礼致します、宜しいですか？」

どうやらフレードとデイムの専属サービス係であるらしいトピーが、何やらキャンディーの様なものを手にしてやって来た。

「メンタルヒーリング・タブレットでございます。どうぞ」

「トピーさん、これはいったい何ですか？」

差し出されたキャンディーを、ディムはいぶかしげに見つめ、匂いを嗅いでいる。

「これは一種の精神安定剤です。惑星ミラージユは誘惑も多く、皆様の旅に支障が出てはいけませんので、到着前にこちらをサービュスさせて頂いております。これを噛まずにゆっくりお口に含みますと気持ちを冷静に保つ事ができ、幻惑に取り込まれる事なく次の目的地へとまた旅立てるのです」

「トピーさん、あなたはこれをなめなくて大丈夫なのですか？」

「大丈夫です。私達職員はホスピタルで予防接種を受けていて、もう免疫が出来ています。ですが免疫の無い方がこの星に来る時は、この予防薬を服用して頂かないと、列車が到着した後の事は保障できません。蜃気楼の美しさに憧れ過ぎて、連れ戻そうとする人を殺し、みずからも自害した、なんていう悲惨な事件もありましたからブルツ。

ディムの毛穴が冷水を浴びたように引き締まっていく。

美しい事は罪な事と言うけれど、美しさの裏側には危険が潜んでいるのかも知れない。

トピーからメンタルヒーリング・タブレットを受け取り、二人は口にしてみた。

「??」

味があるのか無いのか分からない微妙な感覚が舌を走る。

「パパ、これっておいしいの？何だかソースのかかってないフラーゴン（肉）みたいな……………ん？」

初め殆ど味が無かったのに、そのうち口の中に煎じ過ぎた漢方薬のような味が広がり始めた。

「ナニコレ！ま、マズーイ！！」

「ははは……………良薬は口に苦しと太古の昔から言っただよ。ディム我慢しなさい。それともお前ミラージユで一生さまよいたいか？」

こんな不味いものを舐めていてもシタリ顔で笑っているフレード

を見て、デームはとても不思議に思えてならなかった。

今すぐ吐き出してしまいたいけれど、幻の囚われ人になるのは勘弁して欲しいので、グツと我慢を決めた。

「24時間は効果が持続しますので発車には問題ないでしょう。その間惑星観光でもなさればいかがですか？……ほら近づいてきました。間もなく停車しますので私は失礼致します。では後ほど……」厄介な星ではする事が山ほどあるのか、トピーは忙しそうに去って行った。

窓の外には星を縁取る・金色の光。

そしてオーロラのカーテンの揺らめき。

虹のアーチ。

緑豊かで、花は咲き乱れ、鈴を転がした声で鳥は歌う——美の都惑星ミラージュ。

眼下に見える白亜の城に、デームは興味を覚えた。

「わあ、きれいな建物。冬のお祭りで見た雪の彫刻みたい。おひさまの光でキラキラしてるー」

「あれはステーションだよ。さあ、準備をしなさい。降りたらどこかでひと休みしよう」

デームは窓に張り付いたまま惑星ミラージュの風景に魅せられていた。

その傍らでは本が頁を進められず同じ文字を映し続けている。

『あー寒い。はやく帰ろ』

『うち、今夜はビーフシチューよ。はやく食べたーい』

『あー、いいなー』

『アハハハ……』

プチ恋煩い？

「ちょっとオ、聞いたわよ。茉莉沙ちゃん。今度のピアノの発表会出るんですって?!」

「ウ…ウン」

「じゃあ見に行かなくちゃ。ネエ、太陽君も行くでしょ?」

「そうだな……」

「何か用事でもあるの?!」

「あ……は、はい、行きマス」

「行ける子みんなに声かけて応援するからガンバツテネ」

「あ、アリガト……」

私は恥ずかしいから内緒にしてたのに、もな美はどこから情報を仕入れてきたのだろう。

応援なんていらぬのに集団で横断幕なんか引つ下げて“茉莉沙コール”なんてされた日には顔からどころか全身から火が出て焼け死んでしまいそうだ。

そうでなくてもステージに上がると思っただけで胃のあたりがキユツと苦しくなり心臓はバクバク……

ペダルなんてとても踏めそうにない。

そんな事だから出来れば発表会なんて出たくないのだが、周りに逆らえない私は、先生や親の勧めで半ば強引に出させられたという感じだ。

別にピアノが嫌いな訳ではないからいいけれど大勢の人前に出るくらいなら、針のムシロに座る方がマシかも知れない。

いやいや、そんなことより今はレッスんだ。

弾く事に集中すれば観客だってみんな力ボチャに見えてくるだろう。

(余計なことは考えない考えない……)

1日3時間はピアノと向き合い、両手の指に魂を染み込ませたい、作曲家の想いをピアノに宿す事が出来たらと、私の中の自然発生的に湧いてくる想いは、どうしても私をピアノに向かわずにいられない

くしてしまっ。

或る日ピアノ教室に行くと、先生が練習しているのをふと耳にした。

♪ ♪ ♪ . ♪ ♪ ♪ ———

踊るように弾んだりリズムが気に入って、私はこの曲が一篇に好きになってしまった。

「あら茉莉沙ちゃん今日は。発表会の曲どうするの？決めた？」

「先生、今弾いていらした曲、何ていうんですか？」

「アンダーサよ」

アンダーサ——

それはスペインの町アンダルシア風にという意味。

美しき踊り子たちがフリルをひらめかせて、板張りの床を踵で打ち鳴らす音が聞こえてきそう。

この曲の持つエネルギー漲る活気を、私も感じてみたくなった。

「私、この曲発表会で弾いてみたい」

「いいけど、ちょっと難しいわよ。でも茉莉沙ちゃんなら手も大きいし他の子より上手だし、憶えたら案外いけるかも。やってみる？そのかわり、キツイわよ」

「ハイ、がんばります」

この日から私とこの曲の奮闘が始まった。

練習のかたわらスペインの本を読んでみたり、午睡をとつたり、

シエスタ

食事はスペイン料理にするよう母に頼んだり、苛々しそうな時は「Que sera sera」と唱えてみたり、私は暫く日本人の気持ちを忘れて、気が長いけれど情熱的な国民の心を掴もうと努めてみた。

或る日TVの劇場中継でオペラ「カルメン」をオンエアするのを知り、DVD録画して繰り返し繰り返し観た。

魔性の女・カルメンの誘惑と裏切り。

カルメンを殺したい程愛してしまうドン・ホセ。

そしてミカエラとエスカミーリヨを交えての四角関係。

やはり忘れられないのは、カルメンが艶やかに「ハバネラ」を歌う場面だ。私は背中に戦慄が走った。

（これだ！）

恋する女性・カルメンの気持――

これこそがスペインの情熱だと私は思った。

（私がカルメンなら、ドン・ホセはいつたい……）

そのとき胸の中をよぎって行った優しげな影は、音楽室で歌ったリ笛を吹いたり、水飛沫あげて泳いだり、グラウンドを走り回っている太陽の姿だった。

人前に立った訳でもないのに、鼓動は激流を発生し、血潮が身体中を駆け巡っている。

（頬が熱いわ、なんだか苦しい。私、病気になっちゃったの？）

少女の私に、初恋が萌える。

もうすぐ淡雪が花の香りに変わる季節。

私も胸騒ぎ覚える春を迎えはじめていた――

極度の緊張

『まもなく開演になります。演奏者の方が見えましたら、拍手をもつてお迎え下さいませ』

「太陽君、いよいよ始まるネ。茉莉沙ちゃん何番目だったかなあ」

「24番目だよ」

「ウツソー最後じゃない。いいポジションねエ。じゃあがんば

って応援しなきゃ」

発表会当日、私達の街の区民ホールにはクラスメイトの顔が幾つか見えていて、その中にはやはり太陽ともな美の顔もあった。

みんなさぞかしワクワクしながら私の出番を待っている事だろう。舞台裏で、私がどんな気持ちでいるかも知らずに……

『皆様大変お待たせ致しました。これよりピアノ演奏発表会を開始致します。まずはじめに、エントリーNo.1番。泉麻美さんの演奏で、エステン作曲”お人形の夢と目覚め”です』

その頃、私は俯いてじつとしながら、緊張と戦っていた。

演奏する曲はかなり弾き込んでいて、もうすっかりつかんではいたのだが、ステージの上だと話は別だ。

沢山の人が聴くのかと思うと、何だかお腹がシクシクしてくる。

(どうしよう、具合が悪いという事で帰らせてもらおうかな)

こんな思いをするくらいなら、いつそ棄権する方向へと私は考え始めていた。

そんなとき――

「どうなさったのあなた。気分でも悪い？会場の人に言っただけで休ませて頂くようにしましょうか？」

ひとりの少女が冴えない顔の私を見て、大人の人を呼んで話しをつけてくれた。

その少女はベルベットのドレスがしつとりと似合って、綺麗な巻き髪で華やきのある優しい雰囲気の人だ。

周りが知らない子供だらけで不安を抱える中、この気遣いはとてもありがたかった。

ソファーのある部屋に連れて行かれ横にならせてもらうと、この静かな部屋の空気に緊張がほんの少し溶けてゆくような気がしてきた。

「そう、あなたグラナドスの曲が気に入って発表会で弾こうと思ったのですね。レッスン大変だったでしょう？ほんとお偉いわ……」

この少女は私の側で話をしてくれたりするお陰で、気持ちが随分ほぐれて何だか体がスーッと風船のように軽くなっていく感じがする。

「まあ、あなた順番が最後なの？じゃあ最後までずっと緊張しっぱなしですね。かわいそう。でも、やってみたら案外どうって事ないのよ。私も初めての発表会の時、倒れそうになってね、それでも無理して弾いたの。無我夢中でやったら終わった途端、スーッと楽になって元気になったわ。うふふ……」

癒し系とはこういう人を指す言葉なのだろう。

暖かな陽溜まりがそこに当たっているようで、私の緊張もどこかへ飛んで行ってしまったのかしらと思っていた。

「あら、松葉谷さん、ここだったの。もうすぐ出番だから準備お願いします」

「はい、只今参ります……では私は行きますので、あなたもお加減宜しいならがんばって」

「ありがとうございます」

“清楚”

“たおやか”

——そんな憶えたての言葉を思い出していた。

その少女はお嬢様と呼ぶにふさわしい立ち居振る舞いで、取り囲む空気を魔法のようにあやつり、私の身体を蝕んでいた不安を排除の溝へと導いていたようだ。

「福本さんももうすぐですから、そろそろ良いですか？具合は大丈夫かしら？」

「はい……大丈夫です」

「そう、じゃあステージの袖まで来て下さいね」

やっと落ち着いてきた私はソファから起き上がり、長い廊下を

渡って舞台の裏あたりまで来た。

微かに流れているピアノの音……ちょうど曲が終わったようで、演奏が止まると喝采が湧き起こりはじめた。

（この向こうに大勢の人が……）

沢山の顔、沢山の目。それを思い浮かべると、再び緊張の糸がぐーっと引つ張られ、拍手の波に吞まれ私は溺れてしまう気がした。

「あら、もう宜しくなったの？ 私は次が出番なので行ってきました。あなたもがんばって」

少女は私に微笑むとステージへと進んで行ってしまった。

（この次は私、ああどうしよう……）

振り向きざま見せたその微笑に心が少し和んだが、残された私は、やはり不安を拭い切れないままだった。

『野上美由紀さんの演奏でベートーベン作曲“月光”でした。続きまして、エントリー？ 23番、松葉谷翠子さんの演奏で、リスト作曲“愛の夢 第3番”です』

翠子というその少女はライトを浴びるとひととき美しく輝いて、身体の周りに虹色のオーラを纏っているようだ。

（きれい……）

区民ホールがまるでオペラハウスになったような錯覚に陥ってしまう。

そしてスツと細い白魚の指は、静かにキーの上に降りて行った。

（はあ、なんて上手……）

紡ぎ出された音が、私を夢想の世界へと誘っている。

あたたかな南風が美しい花をそつと揺らしてる庭園

薔薇色の花びらの舞い

鳥は囀り

蝶も踊る

むせるような薫りに抱かれていたいといひとを想うとき、

めくるめく甘い感情が胸のなかを満たしてゆく

愛の夢

愛の喜び

熱くいきづく愛の生命

翠子は白い手でピアノに生命を吹き込んで、私達に微笑み、語りかけている。

私はしばらくの間、何もかも忘れて彼女の奏でる世界に酔いしれていた。

そのひとは葡萄酒の華やかさに似て

「こちらにいらっしやい」と私を招く

この世の楽しさをひとところに集めたような

その花園で私は遊ぶ

水のようにしなやかに

風のように自由に

私の心は気球になって

どんどん雲へと近づいていく

あの飛行機にも負けない位もつと高く

さらに高く――

(はっ！)

やがて喝采の波が湧き起こった。

いきなりあらわれた現実が私を一気に地上へ墜落させ、腹黒く晒っている。

サーツと血の気が引いていくのを感じて、再び胃のあたりに不快感が蘇ってきた。

(とうとう、私の番だ……)

『松葉谷翠子さんの演奏で、リスト作曲“愛の夢 第3番”でした。それではいよいよ最後のプログラムとなります。エントリー？

24番。福本茉莉沙さんの演奏で、グラナドス作曲“アンダルーサ”です”

（やっぱりダメ！体調が優れないと言って帰らせてもらおう……）
舞台の袖からチラリと覗いてみると、会場は満席になっている。
あんなに沢山の人々の前で、指なんて動きそうにない。

動いたとしても全然違うキーに触れまくって、小さな子のピアノ遊びみたいにメチャクチャになるのが関の山だろう。

それ以前に頭がクラクラしてお腹も気持ちが悪くて吐きそうなほどだ。

係の人に訳を話して出場棄権を申し出ようと踵を返しかけたが、鈴を転がすような翠子の声が私の背中を引き止めた。

「さあ、あなたの番よ。緊張するのは始めだけ、弾いていると楽しくなるわ、行つてらっしゃい」

「はいーがんばって！」

係の人も元気づけようと肩をポンと叩いてくれたが、勢い余つて前にのめり、私の身体はそのまま舞台の端に飛び出してしまった。

（ああ駄目だ！もう後戻りできない。絶体絶命よあ）

わたしとあなたとアンダルーサ

「あつ見て！茉莉沙ちゃんよ。キャーマリサちゃん！ファイト、ファイト、オーッ！」

聞き慣れた声がしたと思ったら、もな美だ。

しかもあんなに大声で手を振って。本当に穴があつたら入りたい。奈落の底でもいいから……

そう思っていたら、もな美の隣にいる太陽と私の視線が絡み合った。

一瞬、あんなに満席だったホールから人がみんな消えてしまった

ように、見つめあうとこの目には太陽だけしか映らなくなってしまうのだ。

（茉莉沙がんばれ、ここで見てるからな）

（ウン、ありがとう太陽くん。私精一杯やるわ）

私たちはお互い頷きあい、瞳と瞳でこんな会話をしていたようだ。やはり私のドン・ホセは太陽なのだろうか？

はつきりと答えは分からなかったが、このとき私はカルメンに変身して、太陽の為に弾こう——そう決心したのだ。

（できる、出来るわ！今ならアンダルーサを表現できる。太陽君、聞いてね）

舞台の袖では、翠子が両手を組んで見守っている。

彼女にも大きく頷いて見せると、翠子は微笑を返してくれた。

私の顔にも笑みが戻ってきたら、自分の中で突然発生した自信が数秒の間に急成長し、さっきまでの重い気持ちや腹痛から嘘のように解放された気がする。

台風一過の青空が見えてきた気分だ。

私の背筋はいつしかピンと伸びていて、足取りも軽やかになり、そのままステージ中央のグランドピアノに向かって行った。

（もう、どんなに沢山の人が見ても恐くない）

写真でしか見たことのないアンダルシアの碧い空が、ホールの天井に広がっているのを感じながら私は演奏を始めた。

（あ、練習のときとまったく違う。この感じ、何なのかしら……）
右手は鍵盤の上でフィギアスケートを滑り、左手は鍵盤の床にタップのリズムを刻んでいる。魔法にかかったみたいに指がとても軽く、滑らかな動きでアンダルーサを表現できている。

私は、真紅のドレスを着て情熱的に踊るカルメン。

夢のように金色に輝きながら、客席で見ているドン・ホセの瞳に

移ることが出来たらと願いながら燃ゆる想いを送り続けている。

「みんなも上手だけど、茉莉沙ちゃんすごいわねえ。ナンカ迫力が違うわア。私何だかあのピアノで踊りたい気分になってきたわ」

「うん、すごいね……………」

私には分かる。

太陽は私のピアノの世界に引き込まれ、虜になっている。

もっと私を見て、フラメンコは踊れないけれど、私のピアノを聞いて欲しい。

（太陽くん……………）

そう、演奏していくうちはつきりと確信が持てていった。

私だけのドン・ホセは一体誰なのかを――

曲が終わった。

拍手が激しい嵐みたいに私を包み込む。

ほんの区民ホルの発表会なのに、世界の大舞台でのコンサートを終えたように、私は感激で涙まで溢れてきてしまった。

この日の私は、二つの生き甲斐を見つけたのだ。

ピアノと太陽。^{あなた}私の心のファイルに新しく夢が書き加えられたのだ。

「茉莉沙ちゃん、良かったわよ。はい、どうぞ花束よ」

「素晴らしい演奏でしたわ」

もな美も太陽も翠子もみんな私の演奏の成功を祝福してくれて、私の目は再び潤んできた。

「ありがとう……………」

（翠子さん、太陽くん、あなたたちのおかげよ）

自分に負けて放り出さなくて良かった。

あのまま帰っていたら、この喜びを味わう事もなかっただろう。

この時の気持ちたちが羅針盤になり、今後の私の人生の舵を取る事と

なつたのだ。

忘れることが出来ない春の日、あたたかな南風の囁きが聞こえ、桜の蕾も密かに綻び始めていた。

蜃気楼の幻惑

“ルルルルル……ラーララー……ドウドウルドウル
ダダダダー……”

不思議な歌が聞こえてくる。ハミングする鳥でもなく空耳のようにかすかな歌声。

霧が晴れたと思ったら魚の姿がよく見える清らかな湖が現れる。ほとりを渡る風がさざ波を生み、白樺の枝を揺さぶると、ハーブの優しい音楽が躍り出した。

回転木馬の遊園地、大きな観覧車は万華鏡、色と光がくるくる変化してとても綺麗。

万華鏡の“マ”はマウンテンの“マ”雪の冠をかぶってとても誇らしそう。

“マ”は万頭の“マ”美味しそう。しっとりとお茶室で過ごしましょうか。

“マ”はマイタイの“マ”。バーでお洒落にグラスを傾けたい。レストランではおいしいお肉、散歩に出るなら陽だまりの並木道、向こうのエメラルド色の海も見える。

茜雲、七色に変わる黄昏、鮮やかなイルミネーション、巨大な花火と舞い散る風花……

美しいものが入れ替わり立ち替わり変化している。

目を凝らしていると、ほらほら見えてくる。見たいもの、欲しいもの、会いたい人、恋しい人 e t c , e t c ……

「パパ、すごいね。この星は景色がキレイだし何でもあるよ、うらやましーなー。一生ここで暮らしたいキモチ、わかるなア」

「何を言ってるんだ、メンタル・ヒーリングタブレットのおかげで冷静かつ客観的でいられるんだぞ。そうでなければ今頃幻に取り込まれてとんでもないことになってるところだ。観光が終わったら早々に列車に戻るからな。全くお前ときたら、道草好きだから困るわい」

『間もなく、“水の丘”に到着いたします。こちららは想像上の動物達と触れ合えるエリアでございます。危険はございませんのでご安心くださいませ。なお、この丘に生えている植物にはお手を触れないようご注意くださいませ』

観光列車ビュートレインがカーブを曲がると小高い丘が現れ、その先の小さなステーションに着くと二人は、ターミナルすぐ側のカフェで一休みすることにした。

「私はメラタージュを」

「ボク、ソーブレロが食べたい」

二人はカフェテラスで紅茶とパフェを楽しみながら、風に揺れるたびに光る銀緑の草をながめ、動物達のたわむれに微笑んでいる。

「あ、あの動物、図鑑で見たコトある。確か……ドル何とかだったかな」

「あれはドラゴンと言ったよ」

「じゃあ、アレは？」

「麒麟だ。草むらに見えたのは一角ウサギ、その隣は魔女の縞馬と一緒に遊んでるのはユニコーンで向こうのはクリスタル・エレファントだ。みんな可愛いだろう？」

「何だかサファリパークにいるみたい。楽しいなあ（^^）あつ、ソコの猛獣みたいなの、こっちにらんだよっ」

「あははー、大丈夫だよ。もし噛まれても実体のないものだからケガなんてしないさ。……ちよつと私は、トイレに言ってくるから、動物を追いかけて遠くに行ったりするんじゃないぞ」

「ハ―イ」

フレードが席を外した後、デームはしばらく楽しげに動物たちを眺めていたが、ふと側にある木に何か光っているのを見つけた。

（何だろう？……何か実がなってるぞ！）

近づいてみると、それは銀色の林檎だ。

（わあ、大きな果物　どんな味だろ、毒にやられて死ぬーなんてコトないみたいだしちよつとだけ味見しちゃうおゝゝ）

デームは銀の林檎をひとつもぎ取り、かじってみた。

シャリッ。モグモグ――

（ん？味が……無い？やっぱり幻だから味なんてあるわけないか）
期待はずれの林檎を放り捨てるとカフェのテーブルに戻ろうとした。

その時、白い影が横切ったと思ったら影がこちらを振り向いて笑った。

それはコスモ・エクスプレスの列車にいる筈のトピーの姿だ。

（トピーさん？！どうして？地球に到着するまで列車で仕事があるって行ってたのに）

トピーはさらに笑いかけて近づいてくると、デームを強く抱きしめてしまった。

トピーの胸は大きく暖かくデームは思わず目を閉じて体中の力が抜けていくのを感じた。

二人は草の中に倒れこんで絡み合い、デームの意識は、睡眠薬を服用したようにぼんやりと遠のいてゆく。深い海の底へと、沈んでいくように……

「デーム、悪かったな。いやーすまんすまん、ところで……ん、デーム？」

カフェテラスのテーブルは誰もいなくて溶けかけたパフェだけが雫を垂らしている。

「ディム、どこだディム！」

フレードの顔はさーっと土色に変わり、姿なき息子を想うと切り裂かれるような痛みが心に走り、悶絶し始めた。

「ディム！ディム！ディ……」

ディムは木の下草むらに倒れ込んでいた。うつろな目で、何かを呟くように口元がパクパク動いている。

「ディム大丈夫か、しっかりしろ！」

「う……ん、トピーさ……ん？パパ？や、やめて、連れて行かないで！」

何だか様子がおかしい。

席を外している間に何かが起こったと直感してフレードはディムを揺さぶった。

「ディム、聞こえるか？気をしっかり持つんだ、ディム！」

フレードはふと側にある木に目をやると、銀の林檎が陽射しに煌めいているのが見えた。

「お前まさか、あのタムポムの実を食べたのか？！」

「味見しただけ……でも味なんかしなかった。それよりもパパ、

邪魔しないで。ボクは今幸せなんだから……」

「何言ってるんだ。あの木の実はな、幻に対する免疫を無効にしてしまう作用があるんだぞ！兎に角来い。ホスピタルに行くんだ！タクシーを呼ぶから、一緒に乗るんだぞ」

「イヤだ！」

ディムはフレードの手を振り払いそのまま駆け出して行ってしまった。

蜃気楼のふわふわ漂うこの星は重力が少しばかり軽くて、ディムはあつという間に遙か向こうへと遠くなってしまった。

「ディム！ディ……」

フレードはもう見えなくなった息子を追いかけられずに膝から崩れ落ち、暗雲のように垂れ込めてきた失望にすっかり包み込まれてしまった。

美しい景色も色を無くして、それはただの空虚な陽炎でしかない。
正気をなくしたデймはどうなるのだろうか？

エクスプレスが発車するまであと、八時間程――

フレードはデймを連れてこの惑星ミラージユから無事出発できるのだろうか？

（ああ、デйм……）

風はそよ風。暖かくそして空しく、フレードの髪を乱し通り過ぎて行った。

卒業、そして進学

「ねえパトラちゃん、この問題わかる？」

「ナニナニ…… A 駅から電車が発出して、途中で何度も減速したり、1分間の信号待ちがあったりしましたが、平均時速60キロで走っているとB駅には7分後に到着しました。A駅からB駅までの距離を求めなさい。ふーん、こんなのカンタンよ。電車が走った時間は信号待ちを引いて6分間、時速は平均で60キロだから時速を分速にして6をかければいいのヨ」

「デモ、途中でスピード落としたって書いてあるケド」

「平均だから遅いときと速いときの間よ。問題に惑わされちゃダメよ。全くマリサちゃんはこの手のひっかけサギ問題にヨワイんだから。それじゃ入試本番でどんなひねくれた性悪な問題が出るかわかんないからヤラレちゃうわヨ」

「ウン……」

「ところでさア、お犬様がナントカつていうの、アレ何だっけ？」

「生類憐みの令の事かしら？ 定めたのは徳川綱吉よ」

「じゃあ、世界4大文明は？」

「エジプト文明・黄河文明・インダス文明・メソポタミア文明」

「フランス革命が起きたのはいつ？」

「1789年7月14日」

「東ローマ帝国の首都は？」

「コンスタンチノーブル」

「はあ、スゴイ……私歴史弱いからソンケーしちゃう。茉莉沙ちゃん記憶力イイからきつと女優になれるわヨ。私は踊りしかダメだけど……アーなんか疲れてきちゃったネ。おやつ欲しいなあ。ママー、ママァー！」

「はいはい何ですか騒々しい」

もうすぐ中学入試が迫っていて、私ともな美は同じ私立の“フューゲンドリツヒ学園”を志望していた。

ヨーロッパにいくつも姉妹校があつて、高等部以上は文学科・美術科・音楽科・舞踊科を設けたアーティスト育成をコンセプトにした学校で、成績優秀者にはヨーロッパ校への留学制度もあるので、私達は是が非でも入学したいと日夜大奮闘している。

「あーグッドタイミング（＾＾）ママありがと、あと私がやるわ。茉莉沙ちゃん一息いれましょ、お茶が入ったわ」

カップの中で金色に波立つカモミールティーとシナモンドーナツに心和み、私達は微笑みあつた。

希望にふくらむ小さな二つの蕾は、この微笑がずっと永く続くものと思ひ込んでいたのだ。

やがて、暖かな陽差しに花が綻ぶ季節が巡り来る頃、私ともな美は抱き合つて涙にむせんた。

「あ、あつたよ。私達の番号、ちゃんと書いてある！」

「やったあ！これでこの学校に行けるのね。毎日しんどかったけど頑張つて良かった、ホントによかった……」

？仰げば尊しわが師の恩 教えの庭にも早幾とせ
思えばいととしこの年月 今こそ別れめ いざさらば

「パトラちゃん、みんなと離れるのさみしいネ」

「あら、私がいるじゃない。そんなに泣かないでよ」

「パトラちゃんこそ」

「茉莉沙、パトラ、僕たち別々になるけど、新しい学校でもガンバレよ」

「太陽クン……」

彼は公立中学へ、私達は私立の女子中へ。

この卒業式が今生の別れでもないというのに、涙が壊れた水門のように止められない。

太陽の顔みる事ができないと、やはり寂しくて胸が締めつけられるようだ。

「電話してネ、メールでもいいワ。時々会いましょう」

「……………」

私はもな美のようにお喋りする事がもう出来なかった。

自分の中で何かがつかえてて、苦しくて言葉など出てこない。

「じゃあ」

太陽は手を差し伸べて、私達に握手を求めてきた。

彼の手の温もりを感じて、二人とも更に激しくしゃくり上げていた。

いつまでも……………

憧れの制服に身を包んで迎えた春。

薄紅の花びらのシャワーを浴びて、私達の夢もどんどん育っていくようだ。

桜の園では、チャペルの鐘も祝福してくれている。

「あれが有名なフューゲンドリツヒの鐘なのね」

「……………きれいな音。心が洗われていくみたい」

黄金に輝く鐘は水晶のように透き通った声で『おめでとう』と語りかけ、迎えてくれているようだ。

眺めていても聴いていても美しいこの学園のチャペルの鐘は“時を告げる癒し”という称号も持っている。

人は皆、教会の鐘は時計の音みたいに聞いているようだが、私は目に映らないより高貴な存在の声のように感じてしまい、背筋が伸びずにはいられない。

「さ、急ぎましょ。遅れちゃうわ」

「ええ」

風は温み、草木は萌えてゆく。

この学びの園に渦巻いている夢膨らむ乙女達を、季節は目覚めさせている。

天使が鳴らす音を聴きながら、私はもな美と微笑みあつた。私達は永遠に微笑みあつていられるとそう信じながら――

第一部第二章

第二章

恋の解禁日

「もうすぐバレンタインねえ、マリサちゃん、チョコレート誰かにあげるの？」

「私は別に、パトラちゃんこそどうなの？」

「まあネ。義理チョコだけど」

フューゲンドリツヒ学園に入学して夢中で毎日を過ごしていると季節は何度も目まぐるしく変化していき、その年は全国的な大雪で私達も往生させられた。

舗道の根雪をサクサク踏みしめ、もな美と私は来たるべき恋の解禁日を想っていた。

風はまだ冷たくても、ハートの温度は真夏の炎天下。

女の子たちは色めき立ってソワソワし始めるこの季節、私も内心穏やかではいられない。周りには気付かれないようにしながらも、太陽の事をずっと忘れずに、想いをあたため続けてきた。

中学・高校と公立へ進学した彼は、小学校の時と違い身長も高く顔つきが大人びて来ていて、ときめくあまりに声もかけられず遠くで見ているだけの時があったりする。

（太陽くん、前よりステキになったわ。もうガールフレンドできたのかしら？まだだったら私の気持ち伝えたいな。手作りのチョコ

レートを持つて)

溢れてこぼれそうな想いを言葉にすると、また詩が出来た。今度作曲をして歌にしてみようかとも思ってみた。

あなたの瞳の中に 私はいるのでしょうか

私の目に映るのは あなた以外は誰もいないわ

雪が舞い踊っていても 花のつぼみが密かに育つように

想いは膨らんでゆくのよ

そして眩しい陽だまりの中 美しく咲かせられたら

あなたは振り返り 見つめてくれるのでしょうか

手にとつて 愛しんでもらえるでしょうか――

(チヨコレートを持つて、そして勇気を出して言うのよ)

「これ、良かったら受け取って下さい。あなたが好きです!」

「茉莉沙、具合でも悪い?大丈夫?」

「は?!おっお母さん……」

ひとり部屋で妄想に浸る私。

上演されているひとり芝居を見守っている母の目が、蒼ざめながら覗いていて、私もそのままフリーズして蒼くなってしまった。

そして、ドキドキの2月14日。

「チヨコレート……よし、忘れてない。あとは太陽クンが来たら勇気を持つのよ」

湯せんで溶かしたチヨコをハートの型に入れて、しかも“I love Taiyo”なんてトッピングつきで、あとから考えるとそういうベタなシロモノを渡そうだなんて恥ずかし過ぎる。

未熟な恋とは、まったく無敵なものである。

(ぶるるっ、風がつめたい。もう夕方ね、冷えてきたわ)

二月のつむじ風の意地悪を紛らす為、私は歌でも歌ってみた。

「夕暮れは淋しくて まちぶせにはちょっときびしい」それで

も笑顔見るまでは 帰れない帰れない」迷い込んだ袋小路から早く連れ出してね」泣きそうになっているのは 誰のせいかわかっているの」

そうしているうち枝からもうすぐ木の葉が芽吹きそうなプラタナスの並木道を、段々大きくなってくる影が見えてきた。

紺色の制服の男の子、それは私が待っている人に間違いない。

（あつ、太陽クンだ！来ちゃった、どうしよう。茉莉沙、落ち着くのよ。そうだ、深呼吸、そう深呼吸よ。吐いて、吸って……さあ落ち着いたかしら。うん、大丈夫ね。緊張したら彼が引いてしまうわ。いつものように自然に、自然にね）

顔が判る程、太陽が近くまで来た。出来る限り普段と変わらない私の顔で声をかけようと努めてみようとした。

「た………」

「太陽クン！」

（は………？）

言葉にならないで口を開けたまま呆然としてしまった。青天の霹靂とはこの事だろうか？

太陽を呼んだのは、プラタナスから湧いてきたように現れたもな美だったのだ！

「良かったーっ今日会えなかったらどうしようかと思っちゃった。はいコレ、プレゼントよー」

もな美が太陽に渡したのは、私のよりも素敵な包み……

言わなくても分かる。気合が入ってるもの、義理なんかじゃない事ぐらい――

あとが続かなくなった私の声、行き場を失った私のチョコレート、そしてなす術もなく立ち尽くす私。まるで出番を降ろされた役者のよう。

「ありがとう、パトラ」

「どういたしまして。受け取ってもらえて嬉しいワ、ふふ。ねえ、

腕組もうか」

「よせよ、ハハハ……」

楽しげに通り過ぎて行く二人に見つからないよう、プラタナスの陰にひそんでただ見送るしかできない……

このまま飛び出して『私もチョコあるのよ。しょうがないからあげるわ』なんて軽く渡してしまえばいいのに。

（意気地なしの茉莉沙、お前はなんでこうどうしようもないの？ 惨めね、こんな私、大嫌い！！）

樹の幹を叩いて暫く泣いていたと思うけれど、あとの事は記憶に無くてどうやって帰ったかも憶えていない。

気付けば、持っていたチョコレートはもうどこにも無くて、手に血が滲んだ跡がいくつもあり、それが痛くて心が切なくて、また涙が溢れてきた。

泣いても泣いても止まらない頬に流れる河は、体中の水分を出し尽くしてしまうかと思つた程だ。この夜、私は小さな決心をした。

（幼い頃からのこの髪がいけないんだわ。こんな短い髪ちつともきれいじゃない。伸ばそう。女らしく優しく見えたら、少しは私を好きになつてもらえるかしら……キレイになりたい。パトラちゃんよりもっと……私変わるわ、変身して後悔させてやるんだわ！）

デイルム失踪事件

「会長、どうかなさいましたか？お顔の色がすぐれないようですね」

「トピー君、悪いが私達は一旦このトレインを降ろさせてもらつよ。時間になつたら出発してくれ給え」

「何があつたのです？お差支えなければ話して頂けませんか？」

フレードは乾いた手で顔を覆い、深く溜息をついた。

これは只事ではない雰囲気だと直感的に察すると、トピーは業務を他の者に任せてしまい、フレード達のケアを集中的に務めようと決

めた。

が、しかしフレードは柔らかくそれを断ろうとしている。

「いや、いい。君は戻りなさい。地球なら後から来る列車でも行けるから、私達の事は構わなくて結構」

「しかし、そういう訳にはまいりません。デйм坊ちやまの姿が見えないようですが、もしかして何処かではぐれてしまったのですか？もしそうなら惑星中の人員をかき集めてでも搜索をさせましょう」

「ありがとう。実は私がほんの少し目を離れた際に、デймはタムポムの木の実を食べてしまったのだよ」

「なんて事でしよう！分かりました。お任せ下さい。ここではユビキタス・システムはあまり発達していませんが、総力を挙げてデйм様を必ず無事にこの星から出発して頂くように致します」

「そう言ってもらえて心強い、感謝するよ……」

航空搜索艇がいくつも空を切り裂いて、ポリスクラフト（警察組織が使用する水陸両用の乗り物）が野原を、道を、川を、湖を縦横無尽に走って行く。

惑星ミラージュはにわかに物々しくなったが、映画の舞台になったようである意味滅多に無い壮観な風景が見られた。

……いや、今はそんな事を言ってる場合ではない。

「マロンブロンドの髪に、ターコイズブルーのジャケットとハーフパンツを着用した十代後半の少年が精神安定解除植物を服用の為只今行方不明中。もし発見した際危害を加えず穏便に保護するように」

「了解！」

（大そうな騒ぎになってしまったわい。それにしてもデйм、お前は無事なのだろうか……有毒屋気楼にやられてはいないだろうか、苦しくはないか？怪我などないだろうか……）

フレードは惑星観光に降り立った事を後悔した。

いくらデймの頼みとはいえ、美しいこの星を見せたらその美しさ

の裏に潜む危険な淵へとデймを嵌まらせてしまった……

いや、いくら悔やんでも仕方が無い。ただデймが何事も無く自分の元に帰ってくればと、フレードは祈るばかりだ。

「ジグサスの森はどうだった?！」

「はい、隊長。風潰しにしましたが、手がかりありません」

「じゃあアドルナ海岸方面は?！」

「そこも駄目でした」

「ハア…… ったくどうしたものだ。こりゃ搜索が難航するぞ」

搜索隊長は額をかかえて溜息をつく。

それが伝染したようにフレードも頭を押さえ、失望の翳りが差してくるのを必死でこらえていた。

するとその時、

「隊長、どうやら発見した模様です！エストミンスクパーク付近のようです」

「よしわかった！我々もすぐそちらに駆けつける。決して手荒な真似はするんじゃないぞ、いいな?！」

「はいっ!」

「おい、いたぞーっ!」

公園の草むら辺りに、明るい茶髪と青い服がちらりと見えた。

間違いなくそれはデймのようだ。

搜索隊たちは逃げないように、ゆっくり注意深くデймを囲いこんでゆく。

「よしっ 麻酔銃だ。危険だから急所を外して狙え」

ドーン!

デймはバツタリ倒れるとすぐ何も考えられなくなり、シルクの感触の風になでられながら深く深く意識を沈めていった。

衣擦れのように履気楼の音が、遠く優しく響いている――

(トピーさん、しあわ…せ……)

それでも私は……

「茉莉沙ちゃん、今日もピアノのレッスン？私もこれからバレエだけ。」

「今度ねえ、なんとおデートなのよ。服何着て行こうかしら、あー悩んじゃう。やっぱこの前買った“アルファルファール”の上下がいいかな？私自慢じゃないけどピンクって似合うのよね。うん、そうしよつと。」

行き先は特に決めてないんだけど、水族館がイイかしらね。キレイな魚がいっぱい泳いでいて、なんかロマンチックじゃない？私いつぺんあのガラスのトンネルをくぐってみたいのよ。海の底にいるみたいでステキー

日が暮れたらタワーに登って、夜景がキラキラしてるのよ。そんな中で『もな美、好きだよ』なんて言われたらどうしよ。やっぱソレって恋の醍醐味ってヤツじゃない？きー楽しみ。それまでお肌と髪のお手入れちゃんとやっこーつと。」

ハッ、もしかして……勝負パンツもはいとした方がイイのかしら……ヤダーどうしましょ。そしたら薄くても破れにくくて安心のミチコさん印のコンドーサンがいるわね。備えあれば憂いなしよ。それとも、合わなかったらＬサイズかしら。ゴムで出来てる割に伸縮自在なワケじゃないっていうし……

あつゴメンネ、忙しいのに。お喋りばかりしてたわ。私も行かないや、マリサちゃんも頑張つて。じゃあ、明日ネ」

まるで立て板に水。

聞いていようがいまいがお構い無しに機関銃のようにひとり喋くりまくつて、もな美は去つていった。

普通なら腸が煮えくりかえる筈なのに、そんな事も通り越して、ただ呆然ととり残され突っ立っているだけの私……

（何てハイテンションなのかしら。恋はナントカっていうけど周

りがなんにも見えてないのね。私、あきれて一言もかえせなかったわ)

もな美は、私とは裏腹に毎日生き生きと輝いている。きっと恋が軌道に乗っていて、もともと美人の彼女をより美しく際立たせているのだろう。

私といえば、今は白い溜息の花を咲かせてるばかり。

意気地のなさを悔やんでも仕方が無いのは分かっているけれど、時々自分の中で切なさという獣が暴れだし、その度私の胸は悲鳴を上げている。

諦めて、違う恋をすればいいと人は言うでしょう。

でも私は、他の男の人を好きになりたいという気持ちにはなれない。

傷ついてもいいから太陽を愛したいと、そう思う。だから私は、待つ事にした。

やり切れない時はピアノに慰めてもらいながら――

ピアノは私の事をわかってくれる。鍵盤を叩いていると苦しみが音に変わって、心に羽が生えた気がしてくる。

(そうだ。私、理想的な女性になろう……)

自分の中で、密かに願望が芽吹き始めた。

夢を叶えて、綺麗になつて、誰よりも、夜空のどの星よりも輝く事ができたら、太陽だって私を見ってくれるかも知れない！

あの夜空のさざ波の向こうの星を目指すよりも、もっと簡単なこ

と――

それは信じる事。

信じれば私は必ず変わる。人生だって変える事ができる。

あの人だって、そんな私を見る目が変わってくる筈。

未来は、自分の筆で描いていくものだから――

諦めという足枷を捨ててしまい、私は自分の足で、今日もピアノ

の前まで歩いてゆく。

さよならミラージュ

『皆様お待たせ致しました。急行地球行きは間もなく発車致します』
「全くお前は人騒がせな奴だ。今度トピー君が来たらよく陳謝しなさい」

「ごめんなさい……」

デймは無事に保護され、ホスピタルで治療を受けたあと、トレインの出発には何とか間に合った。

理性を失っている間、デймは頭の中いっぱい靄がかかって何も分からなかったと言っている。やはり蜃気楼のまやかしは、見えない魔物のようなものなのだろうか？

美しいものに惹かれるのはごく自然な事だけれど、その陰には落とし穴があるのを、二人は改めて思い知らされたようだ。

「会長、宜しいですか？失礼致します」

「ああ、トピー君すまなかったねえ。この度は大変お世話になりました。こらデйм！お前も何とか言いなさい」

デймはスクッと立ち上がり、深々と頭を下げた。

「トピーさん、ご迷惑をおかけしました。申し訳ございませんでしたっ！お許し下さい、お願いしますっ！！」

雲のように飄々とした普段のデймとはガラリと変わって、潔い態度にトピーの唇は思わず緩んだ。

「いえ、どう致しまして。お怪我もなく無事でなによりでした。一時はどうなる事かと思いましたが、宜しゅうございました。まあこれから、お父様のおっしゃる事をよくお聞きになった方が宜しいと存じますよ」

「はい、反省してます」

「ふふっ（^^）」

今度は“青葉に塩”になったディムが何とも可愛くて、トピーはクスツと笑ってしまった。

「……あ、失礼しました。色々ありました、先はまだこれからです。道中お気をつけて引き続きよい旅をお楽しみ下さい。では離星となりますので私はこれで。お邪魔を致しました、失礼致します」

煌めく星、輝く星、瞬く星……宇宙に星は数々あれど、この惑星ミラージュほど美しく、そして空虚な星は他に見あたらないだろう。波が来ればたちまち崩れてしまう砂金でできた城……儚い美しさを湛えたこの星が鮮やかに色を変え、フラッシュしながらどんどん、どんどん遠くなって行く。

「パパ、僕達がこの星で見たものって何だろうね」

「それはきつと、後になってわかるさ」

美しさには限りがある。肉眼で見える美しさよりも、目には映らないものを大切にしろ――

この惑星は身を持って語りかけていると、ディムは言葉にはできないが、そんな気がした。

『皆様、只今惑星ミラージュを離星し、安全圏内に入りました。引き続き快適な宇宙の旅をお楽しみ下さいませ。次の停車ステーションは惑星ルミエール、惑星ルミエールでございます』

思いがけないターニング・ポイント

「先生、お話って何ですか？」

私は大学の音楽科、もな美は舞踊科へ進んでいた。彼女は相変らず太陽と宜しくやっているらしいが、そんな事はもうどうでもいい。ピアノという夢が私を変えつつあるから。

女性たちの胸を震わせる、あの恋の祭典の日に悔しい思いをした

のは、男の子みたいな髪のせいだと思い、鋏を入れるのをやめてしまったが、今は下ろすと背中まで届いている。

顔つきだって、少女の頃と違うようだ。

「アラ、キレイになったんじゃない？」と、この頃よく言われるが、子供の私を知ってる人は、『福本さんって、整形いじったんじゃない？』等と陰口をたたいてるらしい。

しかし私は何と言われても平気だ。

顔なんて直さなくても綺麗になれる。

“きれい”とは内側から照らされる光のようなもの。

その事に、とづくに気がついてるのだ。

及ばぬ鯉の滝昇りと知りながら、髪を毎日梳かし、お化粧だって覚えた。

泣いてばかりの女も、憎しみで般若の形相をした女も少しも美しくなどない。

それが分かるから、私は太陽のために変身すると誓ったのだ。

でもそんな私を一番変えた。ピアノの夢。

以前は知らなかった自分に邂逅であえた。

雨の日の私、憂鬱に沈む私、ジェットコースターに乗りたい私、歌が大好きな私、そして、愛に生きたい私、愛の悦びを感じていた私がいる。

ピアノは鏡のように教えてくれた。自分というものを、私に見せてくれた。

「今度ウイーンの姉妹校で、留学生を数名募集する事になりました。そこで私は、感性豊かな福本さんに是非行って頂きたいのですが、しかしその前にテストを受けなければなりません。あなたなら必ずパス出来る筈。いかが？やってみる気はない？」

願ってもないような話！

子供の頃からの夢に近づくチャンスだ。

しかし、是が非でも行きたい私と喜んで二つ返事出来かねる私が

いた。

「少し、考えさせて下さい。いいお話ですが、突然だったもので」
「そうね、急な話ですもの。心づもり宜しくお願いします。でも、レッスンは怠らないように」

「はい」

ギギイーと音をたて、運命の歯車が急速回転を始めた。

余程の事情がない限り、その回転を止める人など、まずいないだろう。でも私は、できるなら歯車を逆に回せたらと心のどこかで思っていた。

八重歯がこぼれる、屈託のない笑顔。見ているだけで幸せな気持ちになれたのに、それも叶わなくなるかも知れない。誰のものでもいいから、あなたには近くにいて欲しい……

（これが迷いのなの？）

太陽の顔を見られなくなるのは辛い。失恋よりも苦しい。お願い私を助けて。

『行くな』とひとこと言ってくれば、喜んであきらめるわ――

「エエーッホント?! すごいじゃない。さすがは茉莉沙ちゃんね。でも、実を言うと私もなの。テストに合格したら、フランスに留学よ!」

「そう、おめでとう……」

「アラ、何だか元気ないわね。自信ないの?」

「違うの、うれしいんだけど日本を離れるのが、ちょっと……」

「何言ってるの。外国なんてすぐ慣れるわよ。そりゃ、ホームシックになるかも知れないけど」

「そうじゃないのよ」

「じゃあナニ? あっわかった! 誰か好きな人いるんでしょ」

（ドキッ!）

一瞬もな美に心の中を見透かされたようで、冷や汗もすうーっと逆戻りしていく気がした。

「う、うん。実は、あの……そうなの」

「あーっわかるわかる。恋する乙女は、愛しい人と引き裂かれるのってとってもツライもののよ。アタシもそう！ああー太陽クン、離れても私の事忘れないでえー」

切ない気持ちを誰かに話せば、少しは気が紛れるかといわれているけれど、楽になるところか何だか馬鹿馬鹿しくなってしまうた。

「あ、ところで茉莉沙ちゃん、ジル・アンドローザって知ってる？」

「聞いた事あるわ。驚異的中率で有名な占い師でしょう？」

「今度、みてもらいに行かない？ 私達のこれからと、恋について」

「ハア？」

昔からそうだが、もな美はいきなり突拍子もない言動をとる癖がある。

私はガクツと力が抜けてしまい、カフェテリアのテーブルに突っ伏して頭を上げる気力も失った。

「きゃー大丈夫？！茉莉沙ちゃんしっかり！」

神秘へのいざない

「どうぞおかけになって下さい。こちらのシートにお名前と生年月日を西暦で、あと星座と血液型をご記入下さい。お客様方は375番でございますので、呼ばれるまでこの番号札をお持ちになってお待ち下さい」

「なんだか銀行の順番待ちみたいね」

「ウン……」

ついにジル・アンドローザの館まで、私達は来てしまった。

占いをみてもらうなんて初めてで、さっきから胸がうわずった拍子を刻みっ放しだ。

ここには日常とは違う時空が流れているよう。

不思議の国のアリスにでもなった気分がして辺りを見回してばかりいると、もな美はすでに記入を始めていて、私も慌ててペンを執った。

「えっと、一ノ原もな美…… 1987年4月16日 牡羊座O型つと、これでいいのかしら」

彼女は大人みたいに流れるような美しい字を綴っているのに、私ときたらイマドキの女の子がよく書いてる読みにくい字…… 何だか恥ずかしくなってしまう。

「あの、すみません」

「はい、書けましたでしょうか？」

「これ読めますか？」

自分の字がお粗末で情けなく、占い師の助手の人にまで、恐縮してしまった。

「福本茉莉沙さん、1988年3月5日魚座B型。大丈夫、読めますよ。はい、ありがとうございます。もう少々お待ち下さいませ」
流石この人、ギャル文字・マンガ文字・ヘタウマ文字などの様々な女文字を見慣れているようで、少し安心した。

「あゝでもなんか異次元の世界みたいな不思議な空間ね。BGMが眠気を誘うわ。壁のキラキラはオーストラリアの土ボタルみたいあの池みたいなのはイタリアの青の洞窟のイメージかしら？でもワタシ、なかなか好きだわ」

「そう？私ドキドキして落ち着かない」

落ち着かないのは占いの館の不思議なムードのせいだろうか？これから出る占いの結果が吉と出るか凶と出るか、今からおのっているのではないか……

「375番の方、どうぞお入り下さい」

「ハッ、きたわ。行くわよ」

「ウン」

いよいよ私の緊張は更に高まってきた。予防注射の順番が回って

きた子供みたいだ。

同時に好奇心もドライアイスのスモークのように湧いてきている。さあ、このむこうに何が待っているのか……

「ジルの館へようこそ、私はジル・アンドローザです。さあ、どうぞリラックスなさって。あなた方の悩みや問題を、ポジティブな方向へとお導き致しますわ……」

ここは本当に日本？

黒レースのカーテンの中は蝋燭の灯かりだけで、水晶玉が妖しい輝きを浮かべている。初めて間近で見る占い師のコスチュームと化粧に圧倒され、タイムスリップして中世の魔女に逢っている気がしてきた。

「ふふふっ……あ、コホンコホン。ごめんなさい、ちょっとノドが……（^^）」

（パトラちゃんったら、こんな時に。もう……）
私だってこんなケバい厚化粧を目の当たりにして、いい加減腹筋が苦しいのだ。

二の腕の内側をつねって、爆発しそうな可笑しさはなんとか消沈させる事はできた。

「それでは伺いますが、あなた方が思い悩む事とは何ですか？」

「あの、私バレリーナを目指していて、彼女もピアニストを志望しています。それで二人とも今度ヨーロッパに留学のチャンスが巡ってきて……それぞれの道での成功はあるのでしょうか？いえ、それだけではありません。私達好きな人がいます。恋の行方はどうなるでしょう……」

「ほほほ……分かりました。あなた方の夢と愛、このジルが灯かりをともししんぜましょう。では、ホロスコープ占星術からみて参りたいと存じます。一ノ原もな美さんはどちら？」

「はい、私です」

「バレリーナの方ね。あなたの性格は……勝気で活発な所がありますわね。でも内面はガラス細工のよう。何かのショックで傷ついて壊れやすいので注意が必要です」

「あ、当たってるかも。ワタシ意外と繊細だし」

「でも波に乗ると向かうところ敵なし！意思をしつかりと持てば、どこまでも昇って行く事ができます。でも恋は押してばかりは駄目なのです。猪突猛進になりがちなので時には引いて、駆け引きを楽しむ位の余裕を持ちたいところです」

「ああーそうなのネー」

「運勢ですが、上向きになる傾向にあります。ですから、あなたの夢はきつと叶うでしょう」

「ヤッター（^^）」

「ただし、20代半ば頃に急転直下の暗示があります。でも何が起ころうとも乗り切って行く勇氣とパワーに溢れているので、心配はいりません。その後はますます勢いを増して行くでしょう」

「はあーそうですか。ありがとうございます」

「それでは、福本茉莉沙さん」

「は、はい……」

「あなたは優しくて穏やかな人ですわね。争いを好まず、花や鳥や、四季の移ろいなど自然界の美しさに惹かれる傾向にあります。正に音楽を愛するに打ってつけの感受性を生まれながらに備えています。ですから、あなたの天性の才能を十分に生かすように心がければ、道は必ず開けます。ただあなたは大人しい方ですので、もう少し積極的に物事を推し進めれば、あなたを支持する人は引く手あまたになります。ここぞという時は思い切ってみましょう」

「はい……」

「沢山の異性との交流をさほど好まないあなたは、一人の人を大事に想うタイプです。ですから、思いやりを忘れずに愛情を大切に温め、そして決して諦めないこと。そうすれば、必ず愛は相手の方に届く筈です」

（そうか……）

想いが激しくなれば、燃え尽きてしまう。

そして嫉妬の炎に身を焦がすと滅びてしまう。

初恋のあの淡い気持ちのままでいれば、私の恋も花を咲かすことができる。ジル・アンドローザはそう教えてくれた気がした。

（太陽君。私何年かかってもいい、待っているわ）

彼が振り向かなくても、友達のままでも、あなたが好きだからそれで幸せ——私はやっと自分にそう言えるように思えてきた。

「しかし普段はおしとやかなあなた。その分何かの拍子に、大雨のあとのダムのように歯止めがきかなくなるかも知れません。時にはハッキリとした自己主張や、許される範囲のわがままも自分を保つ為には必要ですわ」

「はい、ありがとうございます」

「では、このクリスタルの中に、これからのあなた方を見い出したいと存じます。大変恐れ入りますがしばしの間、お静かに。エコ・アザラク、エコエコ・ザメラク……」

ジルは妙な呪文を呟きながら、瞑想へと入ってしまった。

焚き染めた紫壇の薫りと揺らめく炎が、沈黙の中を僅かに蠢いている。

私達は、黙祷を捧げる時のごとく、神妙に口を閉ざし、さっきはジルの厚化粧に『クスツ』と笑ったもな美でさえ唇をかみしめて俯いている。

5分もあるかないかの僅かな時間も、永遠のように思えてきてしまう。

「ハッ、これは——」

突然、ジルは息を呑んだ。

その顔色からして恐らく、私達には計り知れないとんでもない事が、水晶玉の中で繰り広げられているのだらう。

「ジル先生、どうしたんですか？」

「い、いえあの、何でも……あ、あなた方はこれから、とても、

す、素晴らしい人生を送る事が、出来ます、ね、ハイ……」
明らかにあやしい。

ジルの眼にはきつと、何か不吉なものが映った筈。
嘘がバレそうなイカサマ師みたいに急に挙動不審になって、ますますあやしい。

「先生……！」

「ハイ………」

先程までの凜とした“気”はどこへやら。

脂汗でファンデーションの壁も溶けて流れてしまいそうだ。

衝撃の予言

「ちょっとジル先生、いい加減な事言わないで！ワタシ達だって分かるわよ。インチキだったら鑑定料返してもらいますからね」

「ま、まあ、お怒りはごもっともですわ。……分かりました、真実を申しましょう。どうぞお静まりあそばせ」

ジルは深呼吸と咳払いをし、私達にというより自分に言いかけるように口火を切り出した。

「未来のあなた方は、他の誰よりも数奇な道を行くのが私には見えます。或る時は花園で戯れ、また或る時は茨の棘に傷ついたりする……これは何かの因縁のよう。“葛藤”という言葉の如く葛と藤の蔓がもつれ合い、絡みあい、望むと望まざるとに関わらず、愛憎劇の舞台へ立たされる事になるのです」

ゾクッ。

首筋に氷をあてがわれたように、私達は震えた。

ジルの目が妖しく見えたのは、どぎついアイラインのメイクでも蒼いカラーコンタクトが光ってるせいでもない。

「おや、怖くなってきましたか？私もあまり言いたくないので、もうおしまいに致しましょうか？」

「いいえ、続けて下さい」

「左様でございますか。ではアドバイスを致しましょう。あなた方は現実を超えた謎のベールに包まれた事件に巻き込まれてしまいます。それはあまりに神秘的で、あまりに抽象的な為、私の理解が及ばないので説明は出来かねますが、“運命の竜巻”と呼ばせて頂きましょう。その運命の竜巻は否応なしにあなた方を襲い、その身を翻弄しますが、決してそこで絶望してはなりません」

ジルは私達を見つめて、子供を諭す母親のように穏やかに、そして力強く語っている。

「嫉妬と憎悪を捨て、お互いを愛するのです。さもないとそれぞれ相手の刃に倒れる事になってしまいます……あなた方は二人ともやがて選ばれた人となるでしょう。それはこのクリスタルがはつきりと語りかけています。ですから、何が起きても自暴自棄にならずにご自分を信じて下さい。希望の光とは必ず、何よりの味方になってくれるものですわ」

「はい……」

もな美は抜け殻になったように虚ろな返事をしていたが、私はいつしか涙を止める術を失ってしまい、もう何も言えなくなっていた。（私達に過酷な未来が控えている……？どうすればいいの、私には分からない、何をどうすれば、幸せになれるの？……）

占いの部屋は淀んだ空気が渦巻いて、私達は気分がすぐれずに溜息を洩らすしかできなかった。

想い出はまぶしくて

『間もなく、惑星ルミエール、惑星ルミエールでございます。停車時間は16時間を予定しております』

「おいデйм、もうすぐステーションに着くぞ。支度しなさい」
「は？はい」

「何だ、さつきからそれを読んで溜息ばかりついてるじゃないか。そんなに面白いかな？」

「ウン、今ねとっても盛り上がってるトコ。茉莉沙ともな美っていう女の人たちが占い師のオバサンに自分達の未来を予言されてマツアオになってるんだヨ」

「何だ、まだそんな所を読んでるのか。半分もいつてないじゃないか」

「ボクは読むのが遅いつてみんなから言われるんだヨ」

「まあいい、旅はまだまだ長いからじっくり読みなさい。地球に着くころには多分読破できるだろう。ほら、見てごらん。次の星だ」

レモンイエロー、アイボリー。

そのどちらでもない淡く優しい光が輝いている。

地球に暮らす人々なら、そのきれいな光にノスタルジイを感じる事だろう。

「惑星ミラージュもよかったケド、この星もなかなかキレイだね」「そうだろう。地球の近くには月という星があつて、それに似てるから“ワンダルキア”という呼び名もある。意味はルミエール語で“もうひとつの月”というんだそうだ」

「へえー」

ワンダルキアこと惑星ルミエールがどんどん膨らんでいき、列車が光に包まれてゆく。

あたたかな色はやはり地球人でなくとも安らぎという心地よさを感じさせてくれるものだ。ディムは、昔からこれとよく似た光を浴びていたかのように想いを馳せていた。

（茉莉沙という人も、もな美という人も月の光を見て何を考えていたんだろう。こんなきれいな星なら、きつと楽しい話をしながら笑っていたんだろうな……）

列車はゆるやかにスピードを落としていると、やがてステーションが近づいて来た。

「あ、すごい——」

銀色に輝くステーション。

この星の白い土の反射を浴びて、自らが発光しているみたいだ。
このステーションのビルの曇りのない冴えた輝きは旅行者に人気
が高く、“コスモエクスプレス百景”の中にも選ばれている。

「この鉄道の数ある路線の中でも、ロワンドテリヤ 地球間
とりわけ美しい星やステーションビルが多くあるんだ。“ゴールド
ン・スプラッシュ・レールウェイ”といわれるこの路線は、それこ
そ金のはじけて飛び散るみたいに、この先も次から次へと驚かされ
るぞ」

列車は鏡でできたようなステーションに滑り込んでいき、フレ
ードとディムは光の乱反射に包まれ、まばゆい世界へと迷い込んだ。

「おお、そうだ。さっき借りたこれをつけないと」

光から眼を守る特製ゴーグルを二人は装着した。

「パパ、カッコイイよ」

「こら、からかうのはよしなさい！」

フレードは照れ笑いをして、むかし妻とハネムーンでリゾートプ
ラネットに行った時、同じような科白を言われたのを思い出した。

七色の珊瑚礁の海にラピスラズリの青い空。

鮮やかな花咲き乱れる常夏の星で、痛いほど強い陽射しの中若い
ふたりは笑いあっている。

『アハハハ… カメリア、早くおいでよ』

『待つてよーっもう。あ、フレード見て。パール貝がいるわ！な
んてきれいな……』

パール貝は真珠をたくさん抱いているが、貝殻までが真珠色をし
た不思議な貝だ。

『海でこの貝を見つけると幸せになれるって聞いたわ。私達、き
つと幸せになるわね。フレード、愛しているわ……』

二人にはやがて玉のような三人の天使が授けられ、妻のカメリア

は一番あとの天使をディムと名づけた。

悪戯好きなディムにはよく困らせられたが、それでもカメリアは満足だった。

『私は、どこの星のどの女性よりも幸せよ』

口癖のように言っていたこの言葉も、或る時を境に聞く事ができなくなってしまった。

『もうすぐあなたの誕生日ね。私プレゼントを買ってきます』

フレードの為に、デパートへ買い物に行く事にしたカメリアは、いつものように家族に微笑みを投げかけていた。

『では行つてまいります。遅くならないうちに帰るわね』

この言葉が、彼女の最後の言葉になるとは、フレードもディムも露ほども知らないでいた。

『ママおそいね』

『うん、何をしているんだろうな』

フレードと三人の息子たちは、ナツザワ家の紅一点の花がなかなか戻らないので退屈になり、気をもみ始めた。

すると、テレビが気になる事を話はじめたのだ。

『番組の途中ですが、ここでニュースをお伝えします。先程、ヤポーナ・グランドデパートにて火災が発生し、買い物客が逃げようとして数百名もの人々が将棋倒しになる等の大惨事が起きました』

『パパ、ここママが行ったデパートだよ!』

『カメリア! カメリア!』

矢も盾もたまらず、家族たちは急いでゆく。

『お気の毒ですが、煙をたくさん吸っていたうえに将棋倒しに巻き込まれて、ホスピタルに搬送されるころにはもう……ご愁傷様です』

誕生日のプレゼントなんてどうでもよかった。

ただ妻が元気でいてくれればそれだけでいいのに。

フレードは自分のせいなんだと、今でも時々胸を痛める事がある。

「?……どしたのパパ、さつきからボーっとして。おい聞こえるかー!着いたよー」

「……はっ!あ、ああすまん、ちょっと考え事をしていた。さあ行こう、この星もいい星だぞ!」

トレインのドアが開くと、まばゆい光が溢れて、そこには光の海が広がる世界があつた。

運命の鐘がなる

『パキン!』

空気がそんな音を立てそうな程張りつめている講堂。

私はまた不安の淵へと沈んでいこうとしている。

幼い頃、初めての発表会で緊張のあまり倒れそうになったあの感覚が甦ってくるようだ。でも私は自分の為にやらなければならない。そんな思いに支えられてるので、今は逃げ出したいと思わない。

私は自分を鍵盤の上で表現したい、その為に生きてると思うから

「26番、福本茉莉沙さん」

「はい」

私はステージ上のピアノの前に座り、深呼吸をして一瞬、すべての考えを冥^とじてみた。するとパーッと心の中に宇宙が広がって、星が笑いかけながら味方になってくれる気がした。

(きらめく星たちは皆、それぞれ意味があるのね。私がこの世に生まれてここにいて、今こうしているのもやっぱり意味がある事なんだわ)

あの発表会で太陽に見守られていたのと同じく、緊張も不安も恐怖も、煙のように消えて行き、嘘のように心が晴れて行く。

霧に包まれた神秘の湖が、その姿を露わにしていく如く、私は何かが見えてきた気がした。そしてテストの課題曲“ラ・カンパネツ

ラ”のイントロダクションを弾き始めた。

最初この曲を弾いた時は手が筋肉痛になりそうで、作曲家リストの嫌がらせかと思った。

でも今では魔法使いになったよう。

誰も触れなければもの言わぬピアノを、笑ったり泣いたり怒りを覚えたりと、キチンとした感情のある生き物に変えられる。

私はこの曲のモチーフとなっている鐘の音をよく聴いていた。

チャペルに立ち寄っては祈りを繰り返す毎日。

《私は渾身の想いをこめピアノを弾く事で、沢山の人々が心を動かし、私のピアノを求めてやまなくなります事をいつも望んでいます……》

“ラ・カンパネツラ”を奏でると甦ってくる。

時を告げる鐘、祭壇の十字架、薔薇窓の複雑な光の彩り、チャペルの椅子の座り心地、心の中で湧き起こるアンコールの喝采、そして愛する人への秘められた変わらぬ想い――

今はヨーロッパの事よりも、自分をピアノに投影する事が出来たら私のピアノは成功すると、それだけを考えていた。

ただ無心に、ただひたすらに……

コーダを終えて我に返つてみると、爽やかな気持ちに満たされている自分がいた。

例えお固い先生方に理解されなくても構わない。

私は自分の想いを詰め込んだ私にしか弾けないピアノを演奏出来れば、それでいいと涼やかな顔で立ち上がった。

テストの前はあんなに強張っていた空気が、私のまわりでフンワリとゆるく、心地のよいものになっている。

「ありがとうございます！」

ステージを去る自分の足は軽くなり、ツーステップを踏みたいと言っている。

あとは野となれ山となれ。結果はどうなるうともう後悔はない。

クロスロード

『皆様にお知らせ致します。館内で不審な荷物などを見かけましたら、お手を触れずにお近くの係員までお知らせ下さい』

「パトラ遅いわね、何やってるのかしら？」

「さつきケータイ架かってきたけど、道路大渋滞なんだって」

「マアお車？さすがお嬢様は違うわネ」

成田国際空港のロビーでは様々な人が行きかっっていて、時間を持て余していたらマンウォッチングをするにはいいかも知れない。

業務に入るキャビンアテンダント達のいくつものグループが行ったり、グランドスタッフが忙しそうに駆け抜けて行ったり、ブロンド美人が長い髪をかき上げ、ダンサーみたいな男の腕を取って甘えていたり、新婚カップルらしき人々も沢山いて、中には季節外れのリゾートウエアが到着を待ちきれないようで可愛かったりする。ダラダラしていて先生に叱られる修学旅行生も、遠くで見てると微笑ましい。

それらの渦の中私達もいる。

これから慣れない国でしばらく暮らすのは不安な事だけれど、留学生たちはみんな眩しく光を放っている。

そして、一層輝く顔が急いで私達のもとへとやって来た。

「ごめーん！！遅くなっちゃったあ。みんなもう手続き済ませた？」

「そんなのとつくの唐変木よ」

「キヤー大変！アタシちよつと行ってくる」

疾風のように現れ、疾風のようにまた行ってしまった。

昔から人気者のもな美は、何をしてもやはり憎めない。たとえ彼氏が誰であつても……

（あ——）

向こうから手を振ってやってくるのは、太陽だった。

私はウイーンへ行く事を彼に知らせていなかったから、きつともな美を見送りに来たのだらう。何だかばつが悪くて同級生たちの後ろに隠れようかと思つてしまった。

「茉莉沙、君も行くんだ。どうして言ってくれなかったんだよ、ひどいなあ」

「だつて私べつに……」

「べつに？」

「あなたの彼女じゃないし」

「そんなの、一言知らせてくれたらよかったのに、幼なじみなんだから」

（幼なじみか——なんてフクザツな言葉なのかしら）

太陽の言葉に少し引っかけたけれど、本当の事だから仕方がない。

「ええ、ごめんなさい。忙しくてなかなか会う事もなかったけど、電話でもすればよかったわ」

「そういえば最近、君の夢をよく見るんだよ。君が世界の大舞台でピアノを弾いて、拍手喝采を浴びている。そして白いウエディングドレスを着ているんだ。きれいだったなあ。そんな君が僕の隣にいるんだよ。妙な夢だなあ」

太陽が私の夢を見てくれている。

私だつて負けない位何度も見た。

ウエディングドレスを纏っている夢。隣にいるのはいつも太陽……

……あなただった。

（こんな偶然、あるのかしら。うれしい……正夢であつてほしい。ハッ、もしかして今この場面も夢の中の出来事？）

太陽の恋人はもな美。

でもその太陽が意識の下で自分と繋がっているなんて、それこそ夢のよう。

頬をつねってみるのは恥ずかしいから、そっとお尻をつねってみた。

「痛っ！」

（やはり現実なのね。太陽君、ありがとう……）

私の心は喜びのあまり、フツと張りがなくなって体の力が抜けてしまった。

「あっ、大丈夫?!」

（ハッ!）

倒れかけた私を、太陽の腕がしっかりと抱きとめている。

こんな近くに彼の顔が……

至近距離で視線が合った時の恥ずかしさつたらない。私を見つめる澄んだ瞳が狂おしく潤んで、心の中をかき乱している。

この力ない体を平気で支える力強さ、そしてかすかに漂う男の人のにおい……

太陽に“オス”を感じ、胸はギュツと締めつけられ、鼓動が自分の耳に響く程、速い。

（心臓の音、聞かれてるかしら。ああ恥ずかしい! 顔から火が出そうだわ）

「大丈夫。ホントご免なさい」

このまま腕の中で身を任せていたいとも思っただけれど、人の視線を感じながら私は太陽から離れた。

「頑張れよ。夢をきつと叶えるんだ。辛くても負けるな」

「ありがとう、自分を信じて精一杯やってみるわ」

太陽の大きな手が、私の白く細い手と握手してくれた。次にこの手を握りしめられるのはいつの日の事かと思いつながら。

「太陽クーン!」

手続きを済ませたもな美の声が聞こえてくる。これ以上太陽と一

緒にいてはいけない気がして、私は少し早めに搭乗準備をしようと決めた。

『全日本航空591便・東京成田発ウィーン行きにご搭乗のお客様は、18番ゲートよりお入り下さいませ……』

「じゃ、私行くわね」

「体に気をつけて、元気でな」

「あら茉莉沙ちゃん、もう時間なの？」

私は、少し息の上がったもな美にも手を差し出し、固く握手した。
「必ず手紙書くわ。時々あなたの近況を教えて。パリは日本より寒いから風邪ひかないようにね」

「ありがと茉莉沙ちゃん。あなたも元気でガンバッテ」

「パトラ……」

「茉莉沙……」

私ともな美は抱き合つと、お互い銀の糸を睫毛から頬へと伝わらせている。

幼い頃から仲が良かった私たち三人。今、交差点に立って、それぞれ別の方向へと歩み出さなくてはならない時が来た。

「二人とも、元気でね。また逢いましょう、三人で」

「ええ、きつと」

「茉莉沙、しっかりやって来いよ」

「ありがとう……ありがとう、行つてきます！」

私はありつたけの想いを込めて、大きく大きく手を振った。

さよなら、青春の光に彩られた思い出たち。あなた達と過ごしたすばらしき日々――

ゲートへ向かうエスカレーターでもう一度振り返ると、ふたりは寄り添って私を見送り続けていた。

（これでいい、これで……）

『皆様、間もなく離陸致します。お座席のベルトを今一度お確かめ下さいませ』

翼は私を連れて、北を目指しながら旋回していく。

けれど、心だけ置いてきぼりにしてきたような、そんな気がする。それでも否応なしに、身体はどんどん太陽から遠ざかってしまう。私が生まれて育った国が、小さく小さくなって雲の下へと消えて行く。

（私きつと戻ってくるわ。今よりもつと輝いて……）

「茉莉沙ちゃん、行っちゃったわねえ」

「うん」

「さあ、私もそろそろ行かないとね」

展望デッキの風は秋の薫り。

私達をほどけたネックレスにした午後、淡い陽だまりの中で薄の穂も遠くから手を振っている。

私を乗せた翼はもう音も聞こえず、あのひとの瞳から消えてしまった。

白金色の海で

「パパ、この星の海って、まるで魚のウロコみたいだね」

「そうだな。ロワンドテリヤも地球も海は青いもののに、この海はプラチナ色をしている。グルセチウムという金属の成分が溶け出してこんな色になってるのだが、実に不思議だ」

フレードとディムは遊覧船の甲板に出てみると、潮風が心地よく、白金細工の波の煌めきに目を奪われていた。

ディムは、泳ぐ魚もプラチナ色なのかと思ひ眼を凝らして見ていたら、突然キラキラと飛沫をあげて、若草色をしたイルカが跳ね上がった。

「わあ！」

『ご案内致します。只今グリーンドルフィンが当クルーザー付近

まで来ております。5回に一度逢えるか逢えないかのチャンスです
ので、展望ウィンドウかまたはデッキよりご覧下さい」

「ここに来てこんなキレイなイルカさんにあえるなんて、スゴイ
なあ。何かいい事あるかも（^^）」

「グリーンドルフィンはずかしくりだから、普通人間の前には
あまり出てこないものだが、これは沢山いるぞ。珍しいな」

おびただしい数のグリーンドルフィンが、プラチナの波間から何
度も弧を描いている。圧巻の水上シヨウに、乗客たちは歓声をあげ、
デジタルムービー撮影をする者も沢山いた。

「カワイイ」

「ブラボー！」

「すごい、すてきー。パチパチパチ」

フレードもドルフィンの姿をカメラに収めていたが、そのうち何
か不審に思うところがあるのに気付き始めた。

「ギヤー！ギヤー！ギヤー！」

「……………」

「パパ、どうかしたの？」

「しっ！よく聞いてみなさい。ドルフィンの鳴き声がおかしくな
いか？」

ディムは耳をすませてみた。

言われてみればドルフィンたちは、興奮しているようにも聞こえ
る。

気のせいかも知れないが、自分達に向かって何か言いたい事があ
るようにも見えてしまう。

群れの中の一頭が鳴きながら近づいてきて、勢い余り船体にゴン
！とぶつかってしまった。

「おおー」

「ヤダーかわいそう」

「パパあどうしたんだろうね。イルカさんたちやっぱり変だよ」

デームも何だか不安にかられてきた。

しかしもつと不安をかきたてられる、この耳を疑いたいような話を、船内のスピーカーたちが喋りはじめたのだ。

『乗客の皆様、お楽しみのところ大変恐れ入ります。緊急事態が発生しました為、当クルーザーは急遽港へと引き返させていただきます。』

只今入りました情報によりますと、先ほどマグニチュード6程度の地震が発生し、震源地はこの付近の沖合という事で、津波のおそれがあります。

皆様落ち着いて下さい。津波到達まで1時間以上かかります。只今全速力にて港へ向かっておりますので30分程で帰港致します。港に着きましたら係員の指示に従い、速やかに避難していただきますようお願い申し上げます。

皆様大丈夫です。時間はありますのでくれぐれもパニックをおこさないよう落ち着いて行動して下さい』

「キャアー！」

「うつそー！」

「ヤダーこわいよー」

「助けてくれー！」

「もうおしまいだ、ああ神様！」

「皆さん落ち着いて！我々クルーを信じて下さい」

誰もが悲鳴を上げ、泣き叫び、中には海に飛び込もうとする者もいて、船上は大騒ぎになって収拾のつかない地獄へと化してしまっ

た。

「パパア、僕たちも死んじゃうの？いやだよ、ウワンー！」

「しっかりしなさい！男の子だろう？係の人が言った通り港にはすぐ戻れるからお前も落ち着くんだ」

「ワーン、×♪ ♪」

「あっ、こらデーム！」

デームは泣きじゃくり過ぎて何を言ってるか訳がわからず、そのまま甲板から船内へ走り出して行った。

あちこち走り回っていると、いつの間にかコックピットへとたどり着いてしまった。

船長らしき人が険しく海を睨みつけ、デームが迷い込んだ事にも気づいていない。

そこへ、やはりデームを気にも留めずにクルーがひとり、血相を変えて飛び込んできた。

「キャプテン大変です！原因は今解明中ですが、エンジンにトラブルが発生して、このままでは船が停まってしまうかも知れません！」

「何だと！よし分かった。君達は早急に復旧できるよう最善を尽くしてくれ。私は事と次第によつてはすぐ救護を頼むから、心配せずに宜しくな」

「はいっ！」

（えつつっ?!）

あまりの驚きにデームは声も出せず、屍のようにそのまま固まってしまった。

船が、停まってしまふ。

もうすぐ津波がやって来るのに――

今度は絶体絶命の窮地に立たされたデームたち。

彼らの運命は、風前の灯なのだろうか？

プラチナの波は何も言わず、不気味に風いているだけだった……

……

第一部第三章

登場人物

福本茉莉沙　太陽を一途に想い、ピアノに情熱を傾けてゆくが、やがて……

一ノ原もな美　茉莉沙と同じように太陽とバレエを愛する女性
フレード・ナツザワ　地球に向かう旅の途中、絶体絶命の窮地に。

デйм・ナツザワ　フレードとともに死活に直面するが、隠された何かが……
トピー・ミールズ　フレードとデймの旅を、陰で支えている。

ローラ・ツヴァイシュタイン　ウイーンでの茉莉沙のよき理解者

アリーソン　惑星ルミエールの海を航海する船長
シュドルフ　著名な指揮者。何故か茉莉沙の学園に
松葉谷翠子　子供の頃の発表会以来、偶然に再会。
夏沢太陽　茉莉沙ともな美同様、夢を叶えようと……

第三章

異国の迷路

「あらマリサ、ここにいたの。手紙来てるわよ」

「ありがとうローラ、今日は暖かくて気持ちいいわね。こんな日をニッポンでは“コハルビヨリ”っていうのよ。意味は“春のような陽気”なの」

「まあそうなの。でも“貴婦人の夏”というもつと洒落た表現もあるわ。ね、ところでそれ、ラブレター？」

「そんなじゃないわよ」

ウイーンの学校の寄宿舎の庭は、私のお気に入りの場所だ。

ここのテラスのテーブルでお茶を飲んだり、考え事をしたりするのは私にとって贅沢なひととき。

ヨーロッパは木立ひとつや枯葉の一枚をとってみても、絵画的でロマンティックな感じがする。そんな一枚の絵のような風景を眺めてぼんやりしてるのは、私を良家のお嬢様に変えてくれる大切な時間である。

「ところでね、ちょっと小耳にはさんだ噂があるんだけど」

級友のローラは、少し声をひそめて言った。

ちょうど風が私達の内緒話をうまく誤魔化すようにざわめき、気を利かせてくれたように思えた。

「今度、シュドルフが学校に来るかも知れないのよ」

「えっ?!あの有名な指揮者のシュドルフ?一体どうして?」

「次の芸術祭でコンチエルトをやるでしょう?それを見に来るらしいの」

「それ、本当なの?」

「たまたま先生達の話を持ち聞きしてしまったの。だから、確かよ」

ヒュルル……

少し肌寒い風は、木の葉と一緒に私の胸まで騒がせているよう。聞かなかった方が良かったかも知れない。

私も芸術祭ではピアノ・ソロを弾く事になっている。そんな世界的に有名な人の前で演奏するなんて、考えただけで震えが来てしま

う。

「私、演奏はずしてもらおうかしら？」

「何を言ってるの！これは滅多にないチャンスなのよ。シュドルフに演奏を聴いてもらえるなんて、とても名誉な事じゃない」

確かにそうだとは思っけれど、私にはそこまでの自信がない。

会場にクラシック界の巨匠がいると思うだけできつとミスタッチングの連続で、初心者ピアノ遊びも真っ青のシロモノを披露してしまうだろう。

そうならもう、ウィーンには恥ずかしくて居られない。

いつその事日本へ帰ってしまおうか？

逃げ出したと言われても、構わない。自分はそこまでの人間だから――

ピアノを愛する反面、そんなネガティブな思いが時々私の中で見え隠れしている。

（私、本当はピアノ弾きに向いてないのかしら？……）

悶々としながらも月日は過ぎていき、短い夏が色褪せる頃、私は腹を決めようと思った。

（逃げててはいけないわ。どうせやるしかないんだし、芸術祭はベストを尽くそう。それで答えが分かる筈。何の手ごたえも感じられなかったら、この道をあきらめるわ）

そう、誰が見ていてもちゃんと弾けなければ、ピアニストは失格なのだ。

私は余計な考えを捨て去る為に、ひとり静かに座り眼を閉じて、素晴らしい演奏が出来ることだけを思うように習慣づけた。

毎日毎日、レッスンと瞑想の繰り返しでだんだん集中力が増してきて、どんな長い曲を弾いても、数秒で終わってしまう感覚が身についていた。

（これなら大丈夫そうだわ。あとは本番で渾身の力をこめて弾く

だけね)

そして秋、芸術祭は華やかに幕を上げた。

絵画や彫刻やバレエ、それに音楽。私はなるだけ独りで塞ぎこまないように芸術たちとふれあい、鑑賞した。

友達とはしゃぎながら刺激を受けて、心をプラスの方向へ保てるように。

「美術科の作品、どれも斬新で良かったわね。何かムーブメントを感じて、心を動かさずにはられないわ」

「私はバレエが素晴らしいと思った。水準が高くて、学生が表現してるなんてとても思えない」

ランチで友人達との他愛ないお喋り。

心和んで、プレッシャーに潰されそうな私に癒しのひとときをくれたのが嬉しい。

「明日はマリサがピアノ演奏するんでしょう？がんばってね」

「シュドルフがいても関係ないわ。リラックスして、実力発揮してよね」

さすがに“シュドルフ”という名前を聞くと緊張するが、私はもう、まな板の上の鯉だ。

ジタバタしても仕方が無い。もし失敗したらしたで、ピアニストを目指すのをやめて、別の道を見つければいい――

以前の私にはできなかった、気持ちを楽しみ持つ事を、ウィーンに来て覚えたように思う。

メンタル的に少し成長できただけでも、ここまで来た甲斐があったかも知れない。

そして芸術祭の演奏の当日の朝、太陽からの手紙をもういちど読み返してみた。

親愛なる茉莉沙へ

お元気ですか？そちらの暮らしはどんな感じでしょう。

僕は大学で首席になる事ができました。

みんなは就職や今後の進路などで忙しそうですが、できれば天文台の研究室に入りたい　と考えています。

大好きな宇宙に毎日触れて、宇宙をいつも感じていたいのです。

ニュースで知つてるとありますが、アメリカの宇宙開発センター“WASA”が今度、新しい宇宙探索クルーザー“レボルバー3号”を造りました。乗組員の試験を今度受けに行くつもりです。

夜寝る時間も惜しいほど、やる事が山のようにあるけど、あつという間に過ぎていく充　実した毎日なかなか気に入っています。

子供の頃、みんなの前で発表した自分の夢を、いま叶えようと僕は頑張っているの、

君も是非夢を叶えて欲しい。

遠く離れてはいるけれど、同じ空で繋がっている。

今日も星空に尾を引く流れ星を見つけ、君の成功を祈っています。

また君のピアノが聴けたらと心待ちにしています。
体調を崩さないよう気をつけて頑張ってください。
いつか世界の茉莉沙になれるその日までお元気で。

夏沢太陽

あの緊張をもう一度

（もうすぐ曲が終わる。次は私の出番だ……）

こんな気持ち、昔も味わった事がある。

そう、あれは小学生の頃初めての発表会。

あの時は緊張のあまり気分が悪くなってしまう、ピアノも弾かずに帰ろうかとさえ思ったものだ。

そんな私に勇気をくれたのは、客席で静かに見守っていた太陽だった。

彼は声援を投げかけた訳ではないけれど、優しい瞳が『ガンバレ』と温かく背中を押してくれたから、今こうしてウイーンまで来る事ができたと思う。太陽には心から感謝の気持ちを贈りたい。

でもあの人はこの講堂ではなく、何千里も向こうの遠い国にいて、しかも私の帰りを待っている訳ではない。

同じ街に暮らしていた時は誰とつきあっていようが気にもならなかったが、ステージの袖で私は果てしなく重い孤独と、いま戦っているのだ。

（大丈夫、大丈夫。シュドルフがいても誰がいても、絶対立派に演奏できるわ）

“人”という字を書いて呑みこむ今どきクラシカルなおまじないにすぎる程、いまの私には余裕というものが引き潮のように遙か遠くにある。

パチパチパチパチパチ

（はっ、前の人の曲が終わった！）

『イザベラ・ムツタリー二さんのフルート演奏で、“はねる子馬”でした。次は日本からの留学生マリサ・フクモトさんのピアノ演奏で、曲は“英雄ポロネーズ”です』

（私はあのときとは違う。もう大人なんだし、帰るなんて言わない。平常心、平常心。ここは小麦畑の真ん中よ。そう、畑に練習しに来たの。さあ思いっきり練習しましょう）

私は深呼吸を繰り返し、余計な邪念を追い払うように努めてみた。

ふんわりとしたトランス状態が全身を包むのを感じると、握りこぶしに力を込めて引き寄せ、軽く頬を叩いて自分に気合を入れた。

（よし！行くわよ）

カーテンをぐぐり抜け、観客に深々と一礼すると、拍手の波が私に押し寄せた。

この波に飲まれてしまわぬよう、気持ちをしっかりと維持するように顔を上げると、見覚えのある顔が被りつきの席に座っているのが視界に飛び込んできたではないか。

（やっぱりシュドルフが！しかもこんなすぐ側に……）

ドクン、ドクン、ドクン、ドクン……

せつかく心身ともに平静になれたというのに、血流が高速回転で体を駆け巡り始めた。そして……

ワン――

何故か耳鳴りがして周りの音が遠くなってゆく。

代わりに、あの発表会するときみたいに自分の心臓の鼓動がうるさい程聞こえてくる。

さすがに動揺を抑えきれない。

世界的なあの指揮者が観えていると思うと――

（茉莉沙すっかりしなさい。客席にいるのは人じゃなくて麦の穂よ。さあ畑に置いてあるピアノで練習するのよ）

私は気を取り直し、ピアノに向かおうとした。

（あれっ、ピアノは？）

そんな馬鹿な。ステージにセッティングしてある筈のグランドピアノが見当たらない。

（おかしいわ、今しがたまで確かにあったのに……それになぁにこの舞台、照明落としたのかしら？暗くて足もとよく見えないわね）

ピアノが消えてしまったように見えたのは、ステージがライトダウンしたからだとその時思った。

（とりあえず手探りでもピアノのところへ行けば何とかなるわ。

これでも目をつぶってたって弾けるんだし)

私はピアノにぶつかってしまわないように気をつけながら、数歩歩いた。

ガクン！

「キャアーツー!!」

すると、突然体に重力がかかった感じがして、何かが私に激しくぶつかってきた。

「オオーツ！」

(痛い！やっぱりピアノにぶつかったやつだ。でも何だか変ね。会場がやけに騒がしいわ)

ピアノに思い切りタックルしたと思った私は、暫く痛みを抱えてうずくまっていた。

落ち着いたら気を取り直して演奏しようと思っていたら、すぐ側でローラの呼ぶ声が聞こえてきたのだ。

「ちょっとマリサ、大丈夫なの?!」

「あらローラ、こんなとこまで来てどうしたの？ちょっとピアノにぶつかっただけ、大した事ないわ」

「何言ってるの！血が出てるじゃない。病院へいかなきゃ!」

「大丈夫よ、痛みがひいたら演奏するわ。大ケガしたわけじゃないから、心配しないで」

「もう！分かってるの?!あなたはステージから落ちたのよ!」

「……何ですって?!」

照明が落ちたと思い込んでいたけれど、本当は暗転にならないでライティングは明るいままだったのだ。

緊張のあまり目の前が真っ暗になり、私は視界を失ってしまった。

（船が、とまる……もうおしまいだ）

ディムの目から大粒の涙が止めどなく溢れ出した。

ヘナヘナと崩れ落ちぺたんとして床にアヒル座りすると、ズボンの股のあたりもはばかりる事を忘れて水が溢れてしまった。

「地球に行ってみたかったよ……」

トピーさんとコスモ・エキスプレスの千年祭、いつしよにまわりたかった……

地球は、キレイな花がきつと咲いてるんだろうな……

大人になったら、花屋さんになろうと思っていたのに……

マンダーレ（弦楽器）をもっと上手に弾きたいし……うつく……

幻の珍味“ラズー”だってまだ食べたことない……ひつく……

パラダロ（“H”の事）も経験してない……ずずっ……

ばだばだやでいだい事たくさんあったでい……ばば（母親）ど所でい行っちゃうど？……

ずるずるっ……そんだどヤダ……ばだ死でいたくださいよお……お

おおっ、う、うえ〜ん」

鼻汁まで止まらなくなり、息が詰まって苦しい。

普段は美少年でも、ディムは一度泣き出すとつぶれた肉饅頭のようになってしまう。

いつも朝夕問わず鏡を見ては身なりのチェックは厳しいけれど、天地がひっくり返る非常時はさすがに汚い泣き顔も気にせず嗚咽しまくった。

（はっ、こんなトコで泣いてる場合じゃない。パパに知らせなきゃ）

ディムはつぶれた肉饅頭を整えようとせず、お漏らしの事も忘れ、そのままフレードの所へと戻って行った。

「どうしたディム、また泣いたのか？しかもお前、トイレに間に合わなかったな」

「パパそれどころじゃないよ！さつき聞いちゃったんだけど……」
周りを見回すと、みな落胆の溜息をつき、噤り泣いている。

デймがいくら頭が足りない子だったとしても、大声で言えばどうなるかぐらいは簡単に想像できるので、今はこっそりと囁くしかない。

「ちよつと耳かして。あのね……」

何人かがデймを見ていたが、こんな時人の内緒話などに興味を持つ者などいない。

「何だつて！本当か？！……まずいな。何とかしなければ……」

フレードは人差し指を嘗め、暫く空を指差す格好をしていた。

「何してるの？」

「残念ながら陸風だ。帆を張ったとしても沖へ押し戻されてしまう。仕方ない、船長に掛け合ってみよう。おっとその前に、トレインに連絡をとっておこう」

フレードはポケットからインカム型携帯電話を取り出し話した。

「もしもしナツザワです。ああ、君か。いや実は私達は今船に乗っててね……」

周りを一瞥して、デッキから人のいない室内へ移動すると、フレードは声をひそめた。

「もう知ってると思うが、先程近海の沖合いでマグニチュード6の地震があつて、津波の恐れがあるそうだ。

ところが困った事に、今乗っている船がエンジントラブルを起こして立ち往生しているんだ。

もし私達が……

私達が発車時間になつて戻らなくても、定刻通り業務は進めて欲しい。他の乗客に迷惑のないようお願いする次第です」

『何ですつて？！会長、落ち着いて下さい。すぐそちらに救助隊をよこします。』

急がせますので決して諦めないで下さい。その船は何人乗りですか？』

「50人……程かな」

『では大掛かりにならないので時間はかかりません、ご安心下さい。』

それでは準備にかかりますので失礼致します。大丈夫でございます、お気を確かに。では……』

「パパ、電話に出たの、トピーさん？」

「ああ、そうだよ。すぐに救助が来るそうだ」

「あのひと、頼りになるね。安心しちゃった……」

デймはソファーに横たわると、心労がほぐれたのか静かに寝息を立て始めてしまった。

プラチナの波に揺られ、母に抱かれた子供の頃に帰ったように――

「ママ……まだそっちには行けないよ……ムニヤムニヤ」

その頃、トピーたちはこの一大事に慌ただしくてんてこ舞いをしていた。

「もしもし、こちらはコスモ・エクスプレスですが、うちの乗客が船に乗って、その船がトラブル発生したのでレスキューをお願いします……」

えっ？他にも立ち往生した船が沢山あってレスキュー隊が出払ってて間に合わない？！

そうですか、ではどこかの救助が済み次第大至急頼みます。乗客にはうちの会長もおりますもので」

「チーフ、こちらも駄目です！陸上でも今ちよつとしたパニックになってて、あちこちで事故が多発しているそうです」

「あー、何て事だ……あのお二人にもしもの事があれば、どうすれば……」

こんな時に限って、惑星中が蜂の巣をつついたような大騒ぎになるとは、フレードとデймをはじめ、たまたまこの星に降り立った人々は運命の悪戯を呪うしかないのだろうか。

こうしている間も、津波は船に向かって刻一刻と近づいてくるのだ。

プラチナ色にキラキラ輝く美しき悪魔が、ディムたちをもうすぐ呑みこもうとしている。

「ママ、波がくるよ。おーきな波だよ、ムニヤムニヤ……」

そんな事も露知らず、ディムは夢の中で母親のカメリアと戯れているようだ。

心からのポロネーズ

「ローラお願い、私平気だからピアノのところへ連れて行って」

「ダメよ！お医者様に診ていただかないと」

「弾かせて……病院ならその後で行くわ。後生だから、お願い……」

ステージから転落したのはショックだったが、おかげで恐怖心がいつペんに吹き飛んでしまった。

私は迷いをバツサリと斬り捨てると、自分にしかできない演奏を絶対今やるんだという強い意志がモクモクと湧き上がってきたのだ。誰が何と言おうが一向に構わない。たとえシュドルフに晒われよう

「分かったわ。歩けそうかしら？」

「ええ、大丈夫」

「じゃ、しっかりつかまって」

幸い足腰だけはしっかりとっていたので、ローラに軽くつかまる程度でよかった。

しかし階段を上るときはさすがに怖くて、何度も踏み外しそうになってしまった。

「あつ！」

「気をつけて。ゆっくりでいいから落ち着いて。あと一段よ」

距離感も方向感覚も何もわからないのに歩かなければならないのは、こんなにも不安な事だったとは今まで思いもしなかった。

白い杖を持ちながら交差点を渡ったり、電車に乗ったりと街を闊歩している人たちに、この時尊敬の念を抱いていた。

「さ、ピアノの前に来たわ。ゆっくり座って」

私は手探りで椅子を探し当てて座り、鍵盤に触れると黒鍵を頼りに音階を調べた。

さつきから私の様子がおかしい事に、ローラはどうやら気付いているらしい。

「最初のキーは判る？」

「ええ、はじめの音は全部黒鍵だからすぐ判ったわ。あとは指が憶えてるから最後まで弾けるわよ」

「そう、じゃあ頑張ってね……あなた、今何も見えてないんでしょ？もしかしたら視神経がやられてるか、脳に異常をきたしたのかも知れないわ。曲を弾いたら、即刻病院へ行くのよ。いいわね」

「約束するわ……」

「じゃ私席に戻るから。演奏の成功を祈ってるわね」

「ありがとう」

あんなハプニングがあつたにも関わらず、私は他人事のように落ち着きはらっていた。

寧ろ転落の衝撃で眠っていた強い自分が目覚めたのかも知れない。今度こそ、今度こそ私のピアノを弾くのだ。

遙か遠くにいる太陽の耳に届く程、魂の底から響く私のピアノを

ちゃんと弾けたかどうかは全く憶えていない。

英雄ポロネーズという長い曲を演奏した数分間の間、私は“零”になっていた。

そしてピアノを弾いていたのではなく、ピアノとの融合フュージョンに成功したような感覚に包まれていたと思う。

音符のひとつひとつが空気としつとり溶け合い、私の心が音になって人々に叫びを高く上げていた。

『どんな悲惨な事が起ころうとも私は夢を捨てない、ピアノを弾くのをやめたりはしない』と……

最後の音を弾き終えたら、私の手元には白い鍵盤があつた。

そして眩しい光――

（あ、見える……）

私のスクリーンに、世界が戻ってきたのだ。

観客の顔もひとりひとりハッキリ判る。

その顔はどれも立ち上がり、今だかつてない程の嵐の喝采を私に強く浴びせかけてきた。

「ブラボー！すばらしい！こんな演奏者がひそんでいたなんて、今日はここへ足を運んでよかった」

スタンディングオベーションの嵐の中、あり得ない事にシュドルフも立ち上がって私に向かい熱い拍手を送っているではないか！

（信じられない。あのシュドルフが、私を褒めてるなんて……）

「君はいいピアニストになるよ。私が保証する。友人の音楽家やプロデューサーを紹介しよう。このまま君を埋もれさせるのはもったいない」

「……………！！！！」

彼の口からこんな言葉がでるとは、これは夢を見てるにちがいない。

沢山の人が見ているのも気にせずに私は頬を軽くつねってみた。

（痛い！夢じゃないのね）

私は立ち上がり、ステージに上がってきたシュドルフに求められるまま固い握手をかわしていた。

気難しそうな見た目とは違って柔らかな手の感触は、まだ半信半疑の私に『これは現実なんだよ』と教えてくれている。

もう、考える力がなくなってきた、私はそのままシュドルフの腕の中へと倒れこんでしまった。

「お嬢さん、大丈夫か?! しっかりしなさい。救急車だ、救急車を早く!」

もうすぐ船は……

「はい、ナツザワです。ああトピー君、どうだった? 救助隊は……」

『あの会長、大変申し上げにくいのですが…… 実は津波のニユースを聞いてあちこちで騒ぎが起こっておりまして、事故が多発しているものですからレスキュー隊が手のまわらない状態でございます』

「何だつて?!」

『それですね、少し遠くですが救助に来てくれるレスキュー隊が見つかりました。』

一刻を争うのでできうる限り急ぐよう申しましたので、何卒今一度、希望を持ってお待ちになって下さい』

「そうか、わかつ……」

ドオン!

何やら船底より振動が響いて、周りの乗客たちにざわめきの波が起こり、フレードもいささかの不安を打ち消せずにいた。

『会長、どうかしましたでしょうか? 今のは一体……』

「分かん。船長のところに行ってみるから、このまま切らないでいてくれ」

『かしこまりました』

携帯電話は性能が進化して、周りでヒソヒソ話をしていても筒抜けな程、音の拾いがいい。

フレードたちを乗せた船に何か変化があったのも、トピーは逃さず捉えられた。

一度電話を切って架けなおすより、船長との会話もリアルタイム

でトピーに伝えられるので通話そのまま保留にさせておいた。

「船長室は……ここだな。あのー、お忙しいところ恐れ入りますが、この船の船長さんはあなたでいらつしゃいますか？」

「はい、私が船長のアリーソンですが」

「あの私、コスモ・エクスプレスの者でナツザワと申しますが……」

「あー、あなたがあのコスモ・エクスプレスのナツザワ会長ですか。当クルーザーに乗船して頂いて光栄です」

「まあその事は結構です……失礼ですが、実を言うと私の息子が事情を聞いてしまいまして、それでうちの部下に相談したところ、救助をよこすよう手配してくれたのです」

「おお、それはありがたい。実は復旧のメドが立たず私共も困り果てていたところです」

「どういたしました。でも情報によりますと、陸上でも大変なパニックが起こってまして、あちこちで事故が発生してレスキュー隊が多忙なため、色々あたってやっと救助に来てもらえるのですが、果たして間に合うかどうか……」

「キャプテン！」

ものすごい勢いでクルーが飛び込んで来たが、顔色が夜明けの空よりも蒼白で、額に冷や汗を滲ませ只事ではありませんとそこに書いてあるようだ。

「あ、お客様でしたか。失礼しました」

「この方なら事情はご存知だよ。何だ？構わんから言ってみなさい」

「はい、あの……皆が総出でエンジンのメンテナンスに取り掛かっておりましたが、メイン動力クランクがもう少しく動き出すというところまでこぎつけたのですが……」

その、残念なお知らせなのですが、先ほど試運転をこころみた時に爆発が起きまして、その衝撃で船底に穴があいてしまい、水が勢

いよく入り込んでおります！」

「何だつて?!」

「……つまり、津波による転覆をまぬがれたとしても、この船はまもなく沈没してしまいます！」

「そんな！」

『!』

何という事だ。

折角もうすぐ助かると希望の光が射し込んできたというのに。

彼らはみな、なす術もなくプラチナの海へと消えて行かねばならないというのか――

フレードも、アリーソン船長やクルーも、体中の色を失ってしまった。

うたかたの花嫁

「夏沢太陽、アナタハ健ヤカナル時モ病メル時モ、コノ者ライツクシミ愛スル事ヲ誓イマスカ？」

「はい、誓います」

「福本茉莉沙、アナタハ健ヤカナル時モ病メル時モ、コノ者ライツクシミ愛スル事ヲ誓イマスカ？」

「はい……誓います」

「デハ、指輪ノ交換ヲ」

ああ、夢のよう。

私は今、太陽と永遠の愛の誓いを交わしたのだ。

十字架のイエス様も二人を祝福して後光を放ちながら祝福している。

ここはもしかして天国だろうか？ 足がすーっと軽く、地についているような感じがしない。

（体が羽になったみたい。私、生きてるの？）

天国にしようが地獄に堕ちてようがそんな事はどうでもいい。今至福のときを迎えて、体中の重みから解放され、心の中は愛と自由と喜びに満たされている。

（これが、幸せなのね。体の震えが止まらないほど、しあわせ……）

「ソレデハ、誓イノクチツケヲ」

太陽は、私の顔を覆い隠すウエディングヴェールをそっとたくし上げた。

「……あなた、誰?!」

霧が晴れていくように視界が開けると、目の前には少し強面の男の顔が現れたのだ。

「何を言うんだ、僕は太陽だよ」

「違うわ! 太陽はもつと優しい顔をしてるもの。あなたいつの間に入れ替わったのよ。あのひとを一体どこへやったの?!」

「何を訳のわからない事を言ってるんだ。さあ、キスをしよう」

「いや! やめてえー!!」

「いや、いやよ。いや……はっ!」

「マリサ、気がついたのね? よかったわ」

祭壇はいつの間にか白い部屋に変わっている。

私はベッドに横たわり、側には大きな董色の瞳が私を見て潤んでいるようだ。

「ローラ? どうして」

「あ、腕に気をつけて、今点滴を打っているから。ステージで倒れて意識不明になったものだから、もう大騒ぎだったのよ。でもケガもたいした事ないからじきに退院できるんですって。よかったわね」

今しがた行われていた結婚式……あれはやはり夢だったのだ。

以前からよく見た太陽と結ばれる素敵な夢……の筈だったのに、途中で入れ替わったあの男は何だったのだろうか?

私と太陽は、引き裂かれてしまう暗示なのだろうか？

（あれはただの夢よ。知らない人が出てくるなんてよくある事だわ。忘れましょ）

つまらない夢だから忘れようと思っても、心のどこかに引っかかってしまう。

それにしても哀しい夢。

目の前から太陽が消えて胸がえぐられてしまったよう――

そんな気持ちを打ち消すように頭を振ってふと窓辺に目をやると花瓶には夕映えの空色をしたブルー・ムーンが、涼やかに凜として息づいているのが見えた。

「まあ、見事な大輪のバラ。きれいなね」

「マリサ?! 見えるの?」

「ええ、紫のバラでしょう? はっきり見えるわ。あ、心配かけてごめんなさい。ピアノを弾く前にシュドルフの顔をみたら途端にまわりが真っ暗になったの。ホント不思議。それで私ステージから落ちちゃったのね。でもあなたに助けられてなんとか演奏できたらパァーッと光がもどってきて、そしたら今度はシュドルフが私をスカウトしてきたから、もう何が何だか……気がつけば病院で寝ていたの」

「そう……失明したかと思った。本当によかったわ。でも、検査はちゃんと受けておかないとね」

「ハイ、もちろんわかってます。コワイおねえさん」

「まあ、言ったわね!……プツ、（^^）アハハッ」

「あははは」

「失礼します。あら賑やかだと思ったら、気がつかれたのですね。検診のお時間ですよ。お熱と血圧計りましょうね」

「あ、はい」

何が夢で何が現実なのか、少々混乱している。

けれど、鬱蒼とした森から急に広い草原に出たときのように、私に道が開け始めたのだ。

待った甲斐あつて、海路の日和のもと前途は洋々としている。
しかし私の行く道は必ずしも真っ直ぐとは限らないかも知れず、
かといって後戻りもできないので、自分を信じて私は進んで行くし
かない。

麗しの夜に乾杯

パチパチパチパチパチパチ

「ブラボー！」

「アンコール、アンコール！」

そして、夢は叶えられた。

どんな高価な宝石を手に入れるよりも誇らしい気持ちだが、私の中
いつぱいに広がり、今にもはじけてしまいそうだ。

泣き虫で引つ込み思案だったあの茉莉沙が、奇跡を起こしたのだ！
ヨーロッパ各地をまわる多忙な日々が訪れ、私は“日出ずる国の
魔女”とまで謳われた。

「マリサ、すばらしかったわ！」

「ローラ！来てくれたのね、ありがとう。まあ見事なブーケ」

コンサートの後の心地良い充実感を噛みしめながら一息ついてい
ると、ローラがホールの楽屋を訪れて来た。

「学園にいた頃もあなたはどこかちがってたけど、近頃ますます
光輝いているようね。私なんか近寄りがたいみたいだわ」

「まあ何を言うの、そんな事ないわよ……お元気だった？あなた
こそどうなの？」

「あのね、今度個展を開く事になったのよ。うふふ」

「あらそうなの！おめでとう。じゃあお祝いしましょう。今夜時
間は大丈夫かしら？」

「いいのよ、気を使わなくても」

「あらご馳走させてよ。あなたの晴れの門出じゃない、私の気持ちよ」

「ありがと、マリサ……」

「ちよつとお邪魔してよろしいかしら？」

突然黒髪のしなやかな女が、私を訪れて来た。

暫くぶりに日本語で話しかけられ、今私の周りに日本人の知り合いはいないから、一瞬追っかけの人が来たのだと思った。

「……あなた、もしかしてパトラちゃん？」

「そうよ、お久しぶり。あなたの活躍は私のまわりでも噂になってるわよ。おめでとう、茉莉沙ちゃん。はい、どうぞ。あなたの好きなオリエンタル・リリーよ」

雰囲気が大入りびで、ますます美しさに磨きかかっている。

両手に抱いたカサブランカのブーケにも引けを取らないくらいに
「ローラ、紹介するわ。モナミ・イチノハラさんよ。グランプリエ・バレエ団で活躍している日本人プリマで、あなたも聞いた事あるでしょう？」

私達のフューゲンドリツヒの同級生で、パリ校に留学したあと、そのまま現地で実力を認められたのよ！

「ええ、存じているわ。初めまして、私はローラ・ツヴァイシュタインです。」

フューゲンドリツヒでは彫刻を専攻しておりました。お噂はかねがね伺っておりますわ。マリサ共々、“ヨーロッパに彗星の如く現れた東洋の二人の美女”なんですよってね」

「まあ、いやですわ。恥ずかしい……」

もな美も憧れのプリマ・ドンナになったと聞いていたので、一度逢いに行きたいと思っていた。

しかしなかなか暇を見つけられないでいた矢先、彼女の方からひよっこり来てくれたのだ。

「マアこんな所でお話も何なので、場所を変えましょう。演奏が終わったらなんだかお腹が空いてきたから、ゆっくりお食事でも頂きたいわ」

「あ、それなら任せて、おいしいお店を知ってるのよ。せっかくパリに来たんだからフランス料理をとくとご堪能あれ！」

相変らずもな美は音頭を執るのが上手い。

そして私は、昔からそれについて行くだけ。

人を引っ張っていくのは、私の永遠の憧れなのかも知れない。

時々、船の灯りがセーヌの水面を滑って行く。

ポン・ヌフの橋が見える窓辺に座り、私達はお喋りの花を楽しげに咲かせ、レースのように繊細で人形のように可愛^{プーベ}い料理たちに舌鼓を打っていた。

「どうお？ サッパリとした中にもマツタリとしていて、後をひく感じがいいでしょ？」

「ほんと、とっても美味しい」

「この夜景も、ご馳走のうちのね」

ここは新婚旅行のディナーには、正にうってつけのシチュエーションだ。

まあ、そうでなくても好きな人と一緒に来てみたい。或いは、道ならぬ恋の切ないランデヴーも雰囲気盛り上がるかも……

想像を巡らせ、マスカットワインのまろやかさを楽しんでいると、普段は大人しいと言われる私も少しばかりテンションが上がっている気がする。

「ところで茉莉沙ちゃん。太陽君が今度WASAのレボルバー3号に乗るんだって」

「エエッ！！」

自分の声が思いがけず店内に響いてしまい、周りの視線が痛いやら顔から火が出そうやらで私は熱い両頬を包み込んで俯いた。

「もう、声が大きいわよ。レディーにあるまじき振る舞いね。……」

それで、TVの会見を世界中のニュースで放送するそうよ。それにレボルバー3号が飛び立ったら、宇宙の模様や地球なんかが、全世界に放映されるんだって。すごいわねえ太陽君。今から楽しみだわ」

ついに太陽が宇宙探索機に……………！

私は自分が宇宙に出かけるかのように胸が躍りだし、『彼の夢が叶うのがこの世で最大の喜びだ』と心がそう呟いている。

（太陽君、ついにやったのね、おめでとう。私もうれしいわ。今すぐとんで行きたいけれど、そつと遠くからお祝いさせてね）

「じゃあ私達みんな自分の夢を叶えるのに成功したのね！ローラは彫刻家、パトラちゃんはプリマバレリーナ、太陽君は宇宙飛行士、そして私はピアニスト……………みんな素晴らしいわ。それじゃ、私達の偉大なる実績をたたえて、もう一度乾杯しましょう！！」

「あらあらマリサったら、酔ってるのかしら」

「フッフ……………そうね。じゃ、私を含めローラさんと茉莉沙ちゃんそして太陽君、私達の成功と輝かしい未来のために」

「カンパニー！！」

花の都は眩しい不夜城。

シャンソンを聴きながら、私達は甘く香り立つ勝利の美酒に酔いしれていた。

この幸せなときが、いつまでも永遠に向かって繋がっているものだと思ひながら――

「あ、この曲知ってる。『monamour monamour
c'est ma couleur……………』」

「ヤダ、歌わないでよー」

「アハハハ……………」

夢は宇宙を駈けて

『それではここで、宇宙探索機“レボルバー3号”からの映像をお送り致します』

私は朝から何度もテレビ番組を入念にチェックし、絶対見逃したくないプログラムの時間を確認しなおした。

今日はどこへも外出せず、食事もあり合わせのものを適当に頬張りながらこの時間を心待ちにしていたのだ。

そして目当ての番組がスタートすると、私はアニメ番組を愉しむ子供のようにテレビに釘付けになってしまった。

『全世界の皆様こんにちは。私は日本から来ました、この“レボルバー3号”のクルーであります夏沢太陽です』

（あつ！太陽君だ。本当に乗っているのね）

暫く顔を見ていなかった太陽は、またさらに精悍な男に成長している。

実際この眼で見て、彼は子供の頃からの夢をついに叶えたという実感が私の中で沸々と沸きあがるのを止める事はできない。

史上最年少と言われた若くて美男子の宇宙飛行士に、私は誇らしげな気持ちが膨らんではちきれそうになった。

『今この窓から見えていますのはしし座第三星雲のあたりでしょうか。』

一面、星の海で実際に見てみると想像を絶するほどの美しさです。

この探索機は今ゆっくり旋回中で、このテレビ中継に合わせて皆様にご覧いただけるよう地球に向けて接近しています……

あつ、今地球のはじが見えてきました。青い水平線が見えます。皆さんわかりますか？その向こうには月がぼんやり浮かんでいます。

私達が夜になると眺めては様々な想いを膨らませ、本当の自分を探す事ができるので、ある国では“夜の女神”と謳われています。

今は少し欠けているでしょうか。

地球上では恐らく下弦の月として映つてると思われます。

さあ、機体は今地球に沿って飛行しています。

見えますでしょうか？雲がかかって分かりにくいのですが、あれはニュージールランドの形をしています。只今オーストラリア上空付近を飛行中です。

南半球は今は夏頃で、ところどころ低気圧に霞んでいるのが分かります。

あ、あれは台風ですね。雲が規則的な渦を巻いて、真ん中がポツカリ空いています。

とてもキレイな形をしていて、ケーキのようにも見えます。

地上では雨風が悪魔のように暴れていても、上から見るとこんなに美しいのです。

私達が突風や大雨、猛暑や干ばつなど気候の変動に一喜一憂していても、宇宙から見ればほんのささいな事だと感じさせられてしまいます。

今、赤道付近を通過した模様です。

インドネシアの島々、マレー半島が見えます。

そろそろアジア大陸にさしかかります。

あの筋はメコン河ですね。溢れるほどの水を湛えた大きな河も、一本の線にしか見えません。

このあたりは緑色をしていて、密林が多いのが分かります。

夕方になると激しく降り出すスコールが、緑を豊かに育てているのですね。

対照的に向こう側は茶色くよんだ感じがします。所々に砂漠がある模様です。同じ地球上でこんなにも違うとは、なんとも不思議な感じです。

その砂漠に何か見えませんか？

かすかに引かれたような線、そう、万里の長城です。これは月からも見える唯一の建造物で、どんな立派なビルでも宇宙から見えないというのに対し、人類の創り出した壮大な歴史とロマンを感じずにはいられません』

「へえーそうなんだ。知らなかった」

宇宙船の窓に繰り広げられる万華鏡のような光景を饒舌に案内する画面の中の太陽は、はにかみ屋で飄々としていた少年とは違う私の知らない太陽だ。

さつきからテレビに齧りついているとその未知なる彼に逢いたくなってきたしまった。

私の中で再び、少女の頃の熱い想いがおさえ切れずに溢れ出し、巻き起こるノアの洪水の中で再び恋に溺れそうな予感がしていた。

（そうだ、彼が宇宙から戻ったら日本へ帰ろう。次の公演が終わったら暫く暇になる。

私だって好きな人を目の前にお話くらいしていい筈。そうよ行きましょう、太陽君に逢いに……）

『さあ窓の景色は一面蒼白くなってきました。このあたりは北極です……』

私の気持はもう、坂を下りてゆくブレーキの壊れた自転車。

あなた太陽に向かって恐ろしい程加速して、もう止めるなんてできない。

プラチナの魔物

（津波が来る前に、この船は沈むかも知れない。どっちにせよ救助が間に合うのか？もし間に合わなければどうすればいいんだ、どうすれば！）

フレードとディムを乗せた船は、今まさに終焉の渦へと呑み込まれようとしている。

もう、望みは海の底へと沈んで行ってしまうのだろうか――

「乗客全員に救命胴衣を着けさせる。大至急だ！」

「はいっ！」

「あなたも早く着けて下さい。さつきよりも船が傾いてきています」「分かりました」

フレードは救命胴衣を着用して膨らませ、もう一着借りてディムが

寝そべっているソファーへと急いだ。

「デイルム、起きろ！早くこれを着るんだ。大変な事になったぞ！！」

「ん……ママどこ？お洋服屋さん……？」

「寝ボケてる場合か！この船はもうすぐ沈むんだ。船底に穴があいて、津波より先に沈没するかも知れないぞ！」

「……へ？！」

「何だつて？！」

「アンタ今何て言っただんだ！」

「沈没……！助からないの？！」

「イヤだよー死にたくない！」

「ああ神様！助けて、助けてくれえ！！」

（ハッ、しまった！）

フレードはつい興奮して叫んでしまい、デッキまで筒抜けの声は乗客たちを一気に煽る事になってしまった。

「アンタは私より若いんだから、年上が助かるよう犠牲になりなさい！」

「アンタこそ棺桶に足突っ込んでるから、今死んでも同じなんだよ！」

「オイ、オマエ。どうせ死ぬなら一発やらせろよ」

「このクソ外道アマ！自分一人助かろうと思っただけじゃねーよ！！」

「アタシ、アンタの事心底キライだったのよ。どうせ助からないなら今ここで殺してやるわ。覚悟しろ、死ねえー！！」

「何すんのよー！鬼畜！！」

「皆さん落ち着いて！私達係員の指示に従って下さい！！」

……………最悪だ。

後悔しても、もうあとの祭り。

船上は無法地帯と化し、この地獄絵図の光景は、もはや誰が咎めても収拾がつかなくなっている。

本当に怖いのは災害ではなく、生きてる人間の強欲とエゴイズムであざなわれた縄がグイグイ締め付ける苦しみかもしれないと、フ

レードは貧血に気が遠のきながらそう思っていた。

ギギギギ……

「キヤアアー沈む、沈むわァ！」

「助けてえええ」

「いやあああああ！！」

泣いても喚いても哀願しても、船体はお構いなしでさらに傾きを増していく。

「パパ、怖いよ……」

「デйм、しっかりしなさい。まだ死ぬと決まってはいいんだ。さあ、早くこの救命胴衣を着なさい」

「ウン……」

「いいか、最後まであきらめるな。希望を捨てるのは、死んでも遅くはないんだぞ！」

フレードの清い眼差しが、こんなにも真つ直ぐに自分を見据えた事はかつて無かったとデймは思った。

これまでお互い気恥ずかしくて眼を見つめるなんてした事がなかったが、息子への真剣な愛情を痛いほど突きつけられ、今やっと目が覚めたようにようやく本当の親孝行を知った気がする。

「わかった……」

例え大波に消息を絶たれたとしても、船が海の藻屑となっても、自分は生きて生きのびて親の切ない想いを叶えるのだとデймは心に決めた。

もし、フレードの命がここで燃え尽きてしまったとしても――

「おい！あれを見る！！」

「うわあああつ、何だあれは！！」

誰かが叫び、二人はデツキを振り返ってみた。

柵の向こうに、美しいけれど途轍もなくおぞましい魔物を目撃してしまい、現実を信じる気持ち捨てたくなってしまった。

光を浴びてキラキラ輝くプラチナ色の壁が、水平線を覆い隠しな

が少しずつ、少しずつ育っていつている。

絶望という名の魔物がフレードたちを骨ごと喰い尽くそうと、虎視眈々と近づいて来ているのだ。

「つ、津波だああ！もう駄目だ、うゝん……」

「津波が来た、津波が来た。アハ、アハハハハ」

「まあキレイ 冥途の土産にはぴったり」

「津波つなみツナミーラララララ」

乗客は皆、プツリ音をたてて壊れてしまった。

船はもうすでに片方の舳先が水に浸り始めている。

救命隊はまだくる気配を見せない。

フレードは、自分の体が盾になるように、苦しい程ディムを両腕に包み込んでいた。

（自分はどうなってもいい。せめてこの子だけは、ディムだけは……！）

絶体絶命のこの窮地、フレードの祈りは果たして天に通じるのだろうか――

現れたファム・ファタル

『マーキュリー航空・ロンドン発378便は、只今到着いたしました……』

「お久しぶり、元気そうね。すっかり見違えたわ」

「君こそずいぶん立派になって。ほら、あそこの女の人たちが君を見てるよ」

あれから何年経ったのだろう。

この空港で太陽と別れてからというものの、私はピアノだけを支え

にして生きて、何千キロも離れた国から気流に乗せて愛を届けるように精魂こめて奏でてきた。

『頑張れよ。夢をきつと叶えるんだ。辛くても負けるな』

『ありがとう、自分を信じて精一杯やってみるわ』

あの日の言葉通り夢は叶い、私の足は、再び日本の土を踏みしめている。

ずっと逢いたいと想いこがれた最愛のひと――

紛れもなく確かに、いま目の前にいるのだ。

「今夜、空いてるかしら？もしよかったらお食事でもしましょう」

「いいよ、積もる話もある事だし。待ち合わせは……そうだな、品川ヒルサイドタワーの前がいいかな？」

「ええ、任せるわ」

思えばこれが、彼との初めてのデートなのだ。

昔、バレンタインのチョコレートを渡し損ねて、太陽との恋は儚いうたかたとなって消えてしまったが、やっと今になってデートができるなんて天に昇るような気持ちだ。

夕陽が傾くころ、自分に一番似合うドレスを選んで鏡に向かい、

私は何度も呪文を呟いた。

（茉莉沙、今夜だけは今までにないくらい綺麗になるのよ……）

自分の魅力を最大限に引き出す一生に一度の魔法を、今自分にかけるのだ。

ファンデーションは厚くなり過ぎず、ムラのないように。

化粧筆のひと刷けにも気を抜いてはいけない。

睫毛は固まらないよう丁寧に。

ルーージュは落ち着いて輪郭をとりましょう。

「ん……ぱっ」

（今宵の私は美しい。世界で一番、あのひとの心ときめかせるの……）

私はさらに呪文を繰り返す。

ヨーロッパで買ったコスメと香水、そして淑女の嗜みの悩ましげなランジェリー……

仕上げて髪を結いに行くと、鏡の中には見た事のない女性が現れた。

「さあ、いかがですか？ 福本様、とてもお美しいですよ」

「ハア………これが私？」

いちどでいい、一度でいいから太陽の心を惑わせてみたい。悪女だと言われても構わないから。

世界中が見とれるようないい女に身を竊した私は、もな美の存在を鍵つきの箱の中へ閉じ込め、太陽の待つ摩天楼へと急いだ。

（パトラちゃん、ごめんなさい。今夜だけは許してね……）

混んだ道から裏通りを回るタクシーの中で、茜に色づく空の下にいるもな美に何度も何度も心の中で詫びた。

彼女には悪いが、もうすぐ待ち合わせの場所だと思つと、心臓がはじけてしまいそうだ。

十五年もの間あたたためてきた気持ち、今宵爆発してしまうかも知れない。

ブレーキが利かなくなつたらどうしようと恐れながらも、パンプスのヒールはお構いなしに私を太陽のもとへと運んで行ってしまう。

「お待たせ、遅くなってごめんなさい」

「……茉莉沙？ ハア………別人かと思つた。きれいだ」

思惑どおりに太陽の目は、ファム・ファタルに変身した私に釘付けになっている。

（一夜だけでいい、私を見て。あなたの視線の温度で溶けそうなほど、もっと見つめて……）

身も心もロゼのシャンパーニュに染められて、私は時々大胆な目つきをしてみせた。

宇宙の果ての星の人のようだった太陽との距離を、今夜銀河列車の特急で一足飛びに縮めてしまいたい。

「……そう、みんな元気にしてるのね。ああ、会いたいわ」

「そうそう、憶えてるかい？クラスで一番地味だったヨネヤマ。あいつ相変らずブスだったけど、この間ついに男前のダンナのところに嫁に行ったんだってサ。同窓会でみんなに写真見せて自慢まくってたよ」

「え？！ジュンちゃん結婚したの？へえー、でも実は女子のあいだでも彼女はお嫁さんになるの一番あとだって言われていたのよ」

「エーひでえなあ。ハハハハ……」

「あのう、失礼ですがちよつと宜しいですか？」

「は、はい」

見知らぬ婦人が突然私達のテーブルにやってきて、こちらの顔を窺いにつこり笑みを浮かべている。

「福本茉莉沙さん……ですね」

「はい、そうです」

「ああやつぱり。あたくし貴女のファンですの。お会いできて感激ですわ。あの、握手して頂いてよろしいですか？」

「ええ、結構です」

握りしめた婦人の手は思いのほかしつとりとしていて、きちんと手入れが施されているのが窺える。この人はそんじょそこのオバサンとは違う事が、私には直感で判った。

「あのう、厚かましいとは存じますが、もし宜しかったらあそこにあるピアノで何か一曲弾いて下さいますか？勿論お礼は致しますので」

「あ……私は構いませんけど、お店の方は何て言うでしょう」
金持ちという生物はなんて我侭だ、自分の言う事は何でも通ると思っているのか――

私の心の片隅で、ほんのちよつぱりそんな声が響いた気がした。
婦人は手を挙げ、少し混んで忙しそうなギャルソンを構わず呼び止めた。

「ちよつとあなた、あそこに置いてあるピアノ、少しばかり使わ

せて頂いても宜しいかしら？」

「あ……少々お待ち下さいませ」

ギヤルソンは“この忙しい時に”と眉毛で言いながらも、オーナーか誰かのもとへと下がっていった。

「あたくし、このお店は夜景も綺麗ですのでよく伺うのですが、今日はちよつと特別な日です。実は、主人との30回目の結婚記念日ですよ」

「まあ、それはおめでとうございます」

「こんな日に貴女にお目にかかれるなんて本当に光栄ですわ。ヨーロッパでのコンサート、拝見しました。とても素晴らしくて、同じ日本人として誇りに思いましたのよ」

「お待たせ致しました。松葉谷様、本日はおめでとうございます。あちらのピアノはどうぞお好きにお使い下さいませ。のち程当店からのお祝いで、ワインをテーブルにお届け致します」

「まあ、ありがとう」

松葉谷……どっかで聞いたこと事のある名前だが、よく思い出せない。

確か太陽と一緒にいた時に聞いたような気がするが……

「あたくしにも娘がおりまして、同じようにピアノをさせていたのですが、あの子は全然ダメで。貴女の爪の垢でも煎じて飲ませてやりたいですわ」

「お母様、いい加減にしないとご迷惑でしょう……ごめんなさい、母がお邪魔ばかりしまして」

その噂の娘も目の前にやって来た。

が、やはり初めて会う気がまったくしない。

思い出せそうで思い出せないのは気持ちが悪くて、どうしても確かめずにはいらなかった。

「あの、失礼ですがどこかでお会いした事ありませんか？」

その娘は暫く私の顔をながめていて、それから突然電流が走った

ように何かが彼女の中で繋がったようだ。

「あ、思い出したわ！あなた子供の頃にピアノの発表会で気分がお悪くなっただんじゃありません？」

「ええ」

「やっぱりそうだわ。あの時の少女がこんなに立派に……コンサート、私も拝見しました。ご成功おめでとうございます」

（そうだ！あの時の優しいお姉さんのね。あー思い出せてスッキリした。でもまた会えるなんてなんという偶然かしら）

そう、あれは初めての発表会。

私は緊張し過ぎて具合が悪くなり、そんな私をいち早くいたわり励ましてくれた年上の少女・翠子……

あの時のお礼もずっと今日まで言えないままだった。

「あの、その節はお世話になりましたありがとうございます。」

私本当は、あの日帰ろうかと思っただ位で、もしあのまま発表会で弾かないで帰ってたら、あの時のことがトラウマになってそのままピアノをやめていたかも知れませんでした。不安だった私に手をさしのべて頂いて本当になんてお礼を言っていかがかりません。今日は、あの時の感謝の意味を含めて、一曲弾かせていただきます」

今の私があるのは、翠子と太陽のお陰だと思う。

私はこの二人に、ありがとうの言葉の代わりに恩返し曲を贈るため、席を立った。

「何か、リクエストはありますか？」

「そうですね……あの発表会、昨日の事のように鮮明に憶えています。あなたは確かグラナドスの曲を弾いてましたわね？出来ればもう一度、グラナドスを弾いてくださいませんか？」

「ええ、結構です。お店の雰囲気もありますので“オリエンタル”なんていかがです？」

「お願い致しますわ」

「じゃあ翠子さん、お席に戻って拝聴致しましょう」

「はいお母様……福本さん、ぶしつけにお邪魔して申し訳ござい

ませんでした、では……」

私も店の片隅のグランドピアノの前に座り、太陽と翠子にもう一度聴いてもらうべく指を滑らせ始めた

思えば、太陽の前で初めて弾いたのもグラナドスの曲。

今弾いているのは東洋の神秘を表現した曲だが、私の気持ちを乗せるには正にうってつけたと思う。

もしも私が魔女ならば、彼の耳から入り込み、心の中に一生消えない絵の具で私の姿を描けるのにと――

（太陽に魔法をかけたい。今それができればいいのに……）

周りから溜息が聞こえる。

私もシャンパーニュが効いてきたようだ。

甘口のお酒よりもっと悩ましく太陽を酔わせたい。まったりとじらすような指づかいで、彼の心をかき回し続けた。

（私を見て、もっと見つめて……今夜だけは、あなたの運命の（ファム・ファタル魔女よ）

アヴェ・マリア

「もう駄目だ、破滅だあーっ!!」

「ああ、神よ……」

プラチナの波が、化け物の大波がもうすぐそこに来ている。

船には穴が開いてすでに半分沈みかけ、月のように光り輝く惑星ルミエールの、このプラチナ色をした海で、フレードたちは間もなく生涯の幕切れを迎えてしまうのか。

「デーム、津波が来たら口と鼻を押さえなさい。水を沢山飲んでしまわない為だ。あんな波をかぶったらひとたまりもなく船は一気に沈むだろう。」

でも絶対あきらめるな！お父さんにもしもの事があってもお前は生き残れ。いいな、必ずだ！！」

「ウン……」

もう一刻の猶予もない。

フレードとディムを哀れな船ごと呑み込まんばかりに、悪魔が大口を開けて今襲いかかるうとしている。

「大きく息を吸って、浮きやすくなるよう体に空気を貯めるんだ。さあ！！」

ギギギギイ……

船は、波の盛り上がりで更に傾ぐ。

人々はもはや言葉も意識も失い、絶叫する者さえもつけない。

あんなに鏡の表みたいだった海には、地響きに似たうねりの音だけが響き渡っている。

「絶対に死ぬな！ディム、愛してる！！」

「スハーツ！」

息を吸ったディムの脳裏に、幼い頃からの思い出が鮮やかに駆け巡り始めた。

優しくかった母、兄弟や父との喧嘩、皆で笑った楽しいひととき、そしてこれから向かう筈の地球で、となりには温かなトピーの微笑

……

すべてが今ここで、ゼロに還ってしまうというのだろうか。

（せっかく生まれてきたのに、何もできずにここで終わるの？口ソクを吹き消すみたいにな、人生ってカンタンに終わっちゃうの？）

「そんなのイヤだ。嫌だあああつ！」

ザバーアアアン！！！！

——波の音はもう聞こえない。

再び訪れた静寂。

誰もがもう天国に到着したと、そう思った。

（あつけないもんだったな。これがあの船に乗った人たちの運命

なのかあ。でも仕方ないからいいや、これでママに逢えるんだし。
さあママを探しに行こうつと)

「ママどこにいるの？ママ……あつ！」

ディムが伏せていた顔を上げてみると、そこには口で説明できないような不思議な光景が見えた。

あの津波が凍てついたかのように動かないでいる。

金色の光を浴びた氷の巨像が煌めきながら船を飾っていて、どこかのアーティストが手がけた大掛かりな作品を鑑賞^{オブリジェ}しているみたいな気持ちだ。

「おお、これは何だ？まるで時が止まってしまったような……」

「天国って面白いところねえ。雲の上に花園があつて、天使達が舞い踊ってるのかと思っていたわ」

人々は人生の煩わしさから解放された気分を満喫しながら、プラチナの波のオブジェを眺めていた。

観れば観るほどどんな貴重な宝石にもない輝きを放っていて、お金では買えない美しさとはこういったものだと思い知らされてしまう。

誰もが、人生最期の風景を現実から降り立ったところから客観的に眺めているのだと、そう思っていた。

「パパ、静かだね。あの地獄の騒ぎがウソみたい」

「そうだな、私達は今何処にいるのだろう？」

この世に別れを告げたと思うと、人の魂には穏やかさが戻ってくる。

生きてる時のあの醜い憎悪や嫉妬や争いなどは煙となって消えて行き、穢^{けが}れを脱いだスピリットとなって然るべき世界へと還元されるのだろう。

腐敗した魂は恨みを忘れる事無く、救われないまま延々とさまよい続けるのかも知れないが、同じ船で運命を共にした人たちは皆、微笑みを浮かべて安楽そうにしている。

フレードとディムも苦しみをすべて捨てて、魂の家へ向かうと

心を鎮めはじめていた。

「パパ、ママに逢いたいよ。どこにいるのかなあ？」

「うーん、探しに行けば逢えるかも知れないな……ん？何だろう、ディム何か聞こえないか？」

「え？ナニ？」

ディムは耳をすませてみると、飛行機に似た音が近づいているような気がする。

ゴゴゴゴゴゴ……

「あ、パパあれを見て！」

飛行機のような音は段々騒がしくなり、空には黒い塊がどんどん大きく育っていった。

ついに……

パチパチパチパチ……

スカイレストランの客達から“オリエンタル”を弾き終えた私に拍手が贈られた。

最上階の窓はラウンド状の通しガラス。

港の灯かりや遊覧船、遠くの摩天楼、タワーも観覧車も瞬いている。

この指が奏でた切なくスイートなメロデーとともに翠子には満足してもらえただろうか？

私はピアノの前から翠子たちに向かって一礼をして席に戻ると、すぐにギャルソンがテーブルにやって来た。

「失礼致します。こちらシャトー・ブリュイエヌ1982年、あちらにいらっしゃいます松葉谷様よりでございます」

「まあ……」

ピアノのお礼に、私達のもとへホルドー・ワインが届けられたのだ。

コルクを開けた途端、香りが踊り出すほど芳醇で、ちょっと手を出しかねるような高級なものだとすぐに判ってしまう。

このようなものを頂けるのは恐縮なので、今度は私が翠子のテーブルを訪れた。

「あの…ピアノを弾いたとはいえ、あんないいワインを頂いても宜しいのですか？」

「いいんですよ嬢さん。今日は私達にとって特別な日だから、花を添えて頂いたあなたに私達からのほんの気持ちです」

「ありがとうございます。お気に召して頂いて、私も光栄です」

ご主人は人のやさそうな紳士で、家族全体が幸せだというのはテーブルを取り巻く空気で私でも一目瞭然だ。

翠子がほんのちよっぴり羨ましく思えた。

その赤葡萄酒の香りに魅せられ、私はついついグラスを傾けると小さな黒薔薇の海がどんどん引き潮になっていく。

黒薔薇の魔法は徐々に効力をあらわし、喉の奥を焼き焦がしながら、引つかかっていた言葉の通り道の詰まりをきれいさっぱりと掃除してしまった。

「おい茉莉沙、そんなに飲んで大丈夫なのか？」

「大丈夫ですよお、アタシはこんなのヨーロッパで水がわりに飲んでたからあ。

あー太陽クン、宇宙の旅はどーでしたかあ？」

「うん、とても素晴らしかったよ。あの無重力はどうにも変な感じだったけど……」

星が海のように果てしなく、波のようにキラキラしていて、それが無数にワーツと広がってた。上も下も、右も左もなく、巨きな星おおの海に包まれて……

ああ、君にも見せたかった。宇宙から見た地球はやっぱり青かったよ。ああいうのを瑠璃色っていうんだな」

深く静かに語る太陽の瞳に、私は宇宙が見えていたと思う。

星の漣が私を浚って、あなたの海で溺れてしまいそう――

「星の話をする太陽クンってス・テ・キ&#9825; ;
ワラシ本当のコト言うと、ムカシからアナタのコトダーーーーイ
スキなの&#9825; ;

ずつとずつとずーつと片想いなノヨ」

……………お酒って本当に怖い。

理性のあるうちは死んでも言えない科白を、薄めたスープのようにサラリと淡白にのたまらせてしまう。

太陽は一瞬フリーズしていたようだが、すぐにいつもの優しい眼が私を見つめた。

「そう、僕も宇宙に行つて気がついた……ってというか宇宙から教えられたのかな。自分の心の深い底に潜んでいた気持ちだ。

レボルバー3号に乗っていた時、誰よりも君に逢いたくなつた。

星の見える窓には君が笑つて僕を見ていたんだ。僕が本当に好きなのは、茉莉沙……君だったんだよ」

「――」

私は相当酔っているのだろうか？

何だか現実なのか妄想なのかよく分からなくなってきた。

ただの儚い夢物語だとしても、太陽のこの言葉は一生忘れられない宝となつて、心の小箱の中で褪せない耀きを放ち続けるだろう。

しかし、黒薔薇の意地悪はこのあたりで私の記憶を封印してしまったのだ。

（光が、眩しい……夢をみているのかしら？）

「はっ……」

私を包む白いシート、カーテンを開ける逆光の影。

見慣れない部屋、ここはどこなの？

「やあ、ゴメン。起こしちゃったね。おはよ、茉莉沙……」

振り向いたのは太陽の笑顔だ。

ベッドに近づくと太陽は私の唇を貪り始めた。

いつの間に覚えたのだろうか？このツボを押さえた密着感……

昨夜のお酒が軽く匂って、気が遠くなりそうな悩ましい感覚に身を任せ、自分の舌を太陽に吸わせながらも心では少しばかり混乱していた。

（やっぱりあれは酔って見た幻じゃなかったのね。でも本当はリアルな夢なのかも。それでもいい、もつと愛して……だけどこれが現実なら、ほんとうにこれでいいのかしら……私達、もう友達とは言えないのかも。パトラちゃんは、一体どうするの？）

私が迂闊にもお酒に任せて言ったひとことがタロット・カードの“運命の輪”をひいてしまったように、私達三人の未来が^{これから}大きく激しく変わっていくのを、まだ誰も分らないでいたのだ。

「あ、太陽くん……あ、ああ……」

サバイバル

「え、何だ？」

フレードはディムが指している食指の方向を仰いでみると、空にはいくつかの物体が段々はつきりと形を露わにしていくのが見える。天国にもあんな物が飛んでいるのかと二人は思ったが、そのうちに地上の世界にあるのと何ら変わらない飛行艇が、明らかにこちらに向かってしていると確信できた。

『皆さんご無事ですか？我々はワンダルキア救助隊の第17部隊です。遅くなりまして申し訳ありませんでした。只今より皆様の安全を確保致します。どうか落ち着いて、指示に従い順序よく行動して下さい』

「パパ、ここって天国じゃないの？僕たちまだ生きてるの？！」

「何だかよく分からないが、どうやらそのようだな」

津波がチューブとなって船に被さろうとした瞬間、凍りついたようになっただのは何とも不可解だが、取り敢えず九死に一生を得てフレードたちに希望の光が射し込んできたのだ。

『お年寄りの方、女性、お子様は先に飛行艇にお乗り下さい』

上空から自動梯子が降ろされると女・子供は野生のハイエナの如く集まったが、その弾みで傾きかけた船がさらに傾きを増して、危うく転んでしまうところだった。

ギギギギ……

「キヤアアア！」

『慌てずに落ち着いて！思わぬ事故を起こさないよう隊員の言う事をよく聞いて下さい』

大して大きな船でもなく、しかも半分浸水しているので、精々二機同時に救助するのが限界だ。

しかも先程よりもデッキの高さが水面に近づいている。

あまりのんびりしていると、目的地は海底になりかねない。

順番がなかなか回ってこない人達は、少しずつ苛立ちを覚えていく。

「もっとさっさと行けねえのか、サカナのエサになっちまうだろ！」

「こっちだって順番待ちしてるんだから煽るような事言わないでよね！」

「ケンカはやめてください！気持ちばかりですが、こんな時に騒ぐともっと悲惨な事にもなりうるのですよ！」

やはり人間生きてるとわかった途端、“自分が良ければそれでいい”的なエゴイスト根性に支配されてしまう。

生きるというのは、いと哀れなのかも知れない。

『さあ男性の方、順番に梯子に& a m p ; # 2 5 6 8 1 ; まって下さい』

「デйм、お前は先に乗りなさい。私はあとから行く。心配しなくても大丈夫だ」

しかしもうデッキは半分くらい水に浸ってしまい、救助はさらに難しくなっている。

もしもフレードが救出される前に船がもたなかったら――

デймにふと、一抹の不安の翳りが射し込んだ。

「でも、パパ……」

「早くしないとお前もお陀仏だ。さあ、行きなさい！」

「……わかった」

デймは決心して、隊員と共に救助梯子に& a m p ; # 2 5 6 8 1 ; みると、そのままスーツと体がエレベーターのように上がって行った。

命綱を着けているのは分かっているけど、体の周りに何も無い。下から見上げていた時には分からない恐怖が全身を包み込み、血流が止まってしまうのではと思われた。

「下を見てはいけない。目をつぶるか、上だけ見るように」

「ハイ」

デймは“恐いから下ろして”と言いたくなかったが、やはり命ある限り帰らぬ人になりたくない。で隊員の励ましを受けながら何とか自分と闘ってみた。

「ハイ、つきましたよ」

「ふうーっ」

ほんの数秒がとても長く思えた。

飛行艇に乗り込んだデймは、ぐったり力が抜けて、生きた心地がなかった体の隅々によやく安心が巡り始めていた。

「船長さん、せっかくのクルージングがこんな事になってしまつて、あなたはさぞお心苦しい事でしょう」

「いやいや、そんなことより乗客の皆様の無事を確保するのが我々の務め、全員が元気に帰還できれば。それ以上の事はないのですよ。それよりもナツザワさん、あなたもそろそろ乗り込まれた方がいいのでは……」

「私は後でもいいのです。息子が救助されましたので、今この瞬間に沈没しても心残りはありません」

フレードの一言が、本当にそうなるとは誰に予想できたであろう。乗客はあと数人。

もう少して全員無事救出される筈だったのだが、上の飛行艇のデームは、そんな事を思いもしないでどつと疲れが来てしまい、ウトウトと瞼の重さに身を任せていた。

「ママ、助けてくれてありがとう。うーん……」

浅い夢の中で、花園にいるカメラリアが振り向いて笑っている。

『デーム、パパなら大丈夫よ。必ず助かるわ。安心してお休みなさい』

夢の中のカメラリアはそれだけ言うと、そのまま踵を返して花に埋もれていくように見えなくなってしまうた。

「ママ……どこ行くの？待って……」

「キャア！何てことなの！」

「どうしてなんだ！」

「一体何が何だか分からんよ。信じられん！」

周りのがにわかにざわめいて、デームの重い瞼が再び開いた。

誰もが窓の外を見て口々に騒いでいる。

デームも気になって目をこすり見てみると、何がどうなってるやらさっぱり分からなくなってしまうた。

さっきまでオブジェになっていた波が活動を再開しているではないか！

船は哀れなことに、ブクブクと泡を生み出して、今海底への旅立

ちを始めたところなのだ。

「パパは？パパはどうしたの？まだ飛行艇に乗ってないの？！」

奇跡はもう、タイムリミットを迎えてしまったのか？

フレードはどこにいるのか確かめられないままデームはただ、訳も分からずにウィンドウにはりついていた。

澄みわたる風の中で

「今度、どこかへ行かないか？」

「えっ？」

髪を梳かす私の背中を抱いて、太陽が鏡ごしに問いかけてくる。

「もう夏だよ。コテージを借りて、二人きりで。青い海の近くがいいかな？それとも高原の避暑地？お姫様、どちらがよろしいですか……」

太陽と二人のヴァカンスなんて夢のよう。

いま私の心には羽が生えて、都会の空の小部屋からリゾートへと飛んでいってしまった。

緑薫るログハウスは風と鳥が歌っているだけで、誰も邪魔をしにこない。

彼の広い胸にもたれて甘えたい！

もな美のことなどすっかり忘れて妄想の甘い世界へと私はどっぷりと浸っていた。

「うふふ……」

「？……何が可笑しいの？」

「あ、うつん何でも。私ってしばらくヨーロッパで過ごしたでしょ？だから日本の夏ってすっかり苦手になってしまったわ。海もいいけど、涼しい山に行ってみたいわね。きれいな湖と白樺林があるような……」

「よし、決まりだ。じゃあ場所はどの辺がいい？」

「そうね……あ、そうだね。昔友達が北海道旅行に行つて、その写真を見た事があるの。まるで空が落ちてきたような美しい湖……私も行つてみたい」

「北海道だね、じゃあ決定。すぐにでも行きたいな。来週なんてどう？」

「いいわ」

「あー嬉しいな。茉莉沙と二人で旅行、楽しみだね」

何度も思う事だが、これは本当に現実なのだろうか？

私はこの恐い程の幸せを身体全体で満喫してもいいものなのか？人は幸せな時ほど不幸せの事を忘れ、悲劇はあとから追いかけて来るとは考えもしないのだとこのあと私は痛感したのである。

そして出発の日、私達は共に羽田を飛び立つた。

思えば数年前、私と太陽を引き裂いた飛行機の翼を憎らしく思ったが、やっとと同じ翼で空を飛ぶ事ができた。

真つ直ぐでしなやかな黒髪が高い塀のように囲み、遠くから見てただけの彼が、息が触れ合うほど近くにいます。
ストップウォッチ

もしも永遠に時を止められる時計があつたなら、私は何を身代わりにしてもいいとそう思ふのだった。

「摩周湖は神秘の湖で、湖畔に下りる道も無ければ水源がどこにあるのか明らかにもなっていない。しかも時々霧のヴェールで身を覆い隠してしまう。まるで人を拒んでいるようだね」

「もし霧が晴れていて、湖が見えたら婚期が遅れてしまうと言わね。湖は見たいけど、お嫁に行けなかったらショックかも」

「そんなの都市伝説だよ。ま、めでたく拜めても噂だから気にしない、気にしない」

その神秘の湖の前までやってきたはいいが、もっと神聖な雰囲気のところかと思つたらバスはいっぱい停まつてるし、観光客だらけ

でちよつとがっかり。

（あーあ、ムードないなあ）

それでもいよいよフェンス際に立つときは少しドキドキしてしま
った。

（お願い、見えて……）

「わあ………」

眼下には鏡があつて空を映しているのかと、そう思ってしまった。
なんて素晴らしい！

ラピスラズリを湖底に敷き詰めているのかと錯覚してしまうよう
な色――

白雪の峰を映し出す富士五湖だつてここまで美しくはない。

見られない人は何度見ても霧を纏っているらしいので、私はひょ
つとして運がいいのかも知れない。

「ああ綺麗……溜息がとまらないわ」

「普段の行いがいいからだね。でも婚期が遅れたらお気の毒」

「もう、意地悪いわないで！」

「はは………だけど湖は気まぐれだよ。霧の足は速いつてさ」

もう一度空を映す鏡の方を見てみたら、お喋りしてる間に湖は信
じられないスピードで白い衣に着替えていたのだ。

「あつ本当。もう見えない」

束の間だけれど美しい湖が見られたけれど、この湖はもしかして
私の幸せの象徴なのかも知れない。

あつという間に霧が行く手を阻んで先が見えなくなってしまふ――

私は心のどこかでそう思っていたかも知れない。

「さあ、着いたよ」

「素敵………」

コテージは想像以上にセンスが良くて、いっぺんに気に入ってし

まった。

周りに取り巻く白樺の木々、窓から覗けば湖は底知れない青さ――

私は天の上の別世界にやってきたようで、足はフワフワと地についでいない感じがしていた。

しかしその頃私を脅かす運命が近づこうとしているのに、太陽も私も気付かずに浮かれていたのだ。

「おばさん、お久しぶりです。これ、つまらないんですけどお土産です」

「まあ、もな美ちゃん！どうもありがとう、悪いわねえ。あら、どうしたの？怪我でもしたのかしら？杖ついて……」

「あ、ちよつと転んで。大した事ないんです」

「あらそう？バレエやつてるから大事にしないとね」

「ありがとうございます。あの、太陽君は、いらっしゃいますか？」

「あら困ったわ、ご免なさい。あのね、太陽は今ちょうど旅行に出てるのよ」

「旅行……ですか。どちらへお出かけに？」

「北海道って言うてたわね。今日出発したからすぐ戻って来ないと思うけどいいかしら？」

「あ、いいんです私待ってますから。ところで北海道のどのあたりまで行かれたんでしょうね？向こうは涼しいから羨ましいわ」

僅かに生まれた疑惑をうまく隠しながら、真っ直ぐでしなやかな黒髪が揺れていた。

もな美はこのとき恐らく、何やら悪い予感が胸の中でふつつつと湧き上がっていたに違いない。

そんな事も露知らず、北国の儚い夏の中で、私達は淡い光浴びて戯れていたのだった。

「太陽クーン待つてよお、そんなに走らないでー」

「もたもたしないで早くおいでー、アハハハハ……」

湖に消えたオデット

「綺麗……不思議な色。ずうつと観てたら吸い込まれてしまいそう。もし身を投げるならこんな湖がいいわ」

淡水魚が水面を跳ねると、透けて見えてた湖底の石も漣に崩れて幾つもの輪が広がって行く。

アクアマリンでできているような湖はきっと魔力を秘めているのだ。

目の眩む崖の上から躊躇^{ためら}いもなく人を水鳥にさせてしまう気がする。

「冗談言つなよ。あんまり乗り出すと本当に落ちてしまうぞ」

「ふふ、ごめんなさい。幸せすぎて私どうかしちゃったのかしら」
夢にまで見た太陽の腕の中、私は何度もよじれて魚になった。この何年もの空白を埋めて行くように繰り返し繰り返し、彼は私を抱いたのだ。

本当に叶えたかった願いがようやく実を結んだから、たとえ今、湖のアクアマリンの一部に変わったとしても後悔はないだろうとほんの少し思ってみただけだ。

「ねえ、お茶でも飲まない？この自然の中でアフタヌーンティーなんて格別よ」

「うん、じゃコテージに戻ろう」

テラスのテーブルに座り、温かな紅い飲み物で私達の気持ちもほんのり色づいていくようだった。

流れる雲にはモクモクとした暑苦しいものは無く、薄い絹が碧い空に滑ってゆく。

流れる絹が映る鏡の湖。

雪のような白樺の枝から伸びるビリジアンの木の子葉が風に身をまかせている。

私がもしピアノを弾かずに画家を目指したなら、きっと今ここでキャンヴァスに向かっている事だろう。

「実を言うと、宇宙に出てみて気付いた事があるんだ」

「なあに？」

「あんな巨きな無限の空間に教えられたのかな、ずっとずっと何年も気付かなかった自分の本当の気持ちを……茉莉沙、君の事が好きだった。やっと自分に正直になれたよ。ホテルのレストランで告白されたとき、嬉しかった。あの時君は酔っ払っていたから憶えてないだろうけど」

記憶の片隅にしかないけれど太陽が言っていた言葉、あれはやはり酔狂などではなかったのだ。

それが証拠に、今しつかりした意識でもう一度同じ言葉をこの耳が捉えたから。

風は涼しいし肩にとまった小鳥の感触も確かに現実のものだが、私達がいる北の湖畔は実は夢の中の世界で、目覚めると独りベッドで泣いているのではと思わせるような言葉を、太陽の唇が続けて放った。

「茉莉沙、結婚しよう」

「……………！」

ドスン！

何かが地面に落ちたような鈍い音が響いた。

振り返るとそこには日本人形のような黒髪が涼風にそよいでいて、そしてその髪が冷たく凍ってしまったかに見えた。

「もな美！」

旅行鞆を拾おうともせず黒髪は踵を返してしまい、逆立つように乱れながら白樺林へと紛れこんでいった。

「おい、待ってくれ！」

「パトラちゃん、待ってえー！」

時々よろめいて転びそうになりながらも、黒髪は私達をすり抜けて白樺の間をどんどん逃げて行く。その行く先は、さっきいた湖のほとりだから間もなく追いつくだろう。

私が太陽と結ばれたとき、いつかこうなるのは分かっていたけれど、まさかそれが今だとは……

どうしようもない間の悪さに、運命の皮肉を恨めしく思ってしまった。

「パトラちゃんお願い、話を聞いて」

「来ないで！」

崖の縁まで追い詰められて、乱れた黒髪はようやくしなやかに肩に納まった。

「もな美、君が悪いんじゃない。患者はこの僕だ。口惜しいなら気の済むまでぶてばいい」

「何を言ってるの！私があなただをぶてる訳ないじゃない。優しくして欲しいのに、そんな人をぶちのめすなんてできないわ！」

濡れた頬に髪がはりついている。それを見た私の胸は千枚通しで穴を開けられたようで、もう身じろぎさえ出来なくなり、この頬もいつしか濡れていた。

「私はプリンシパルを目指していたけど、それはおろかプリマ・ドンナも出来なくなってしまったの……うっん、バレエ自体夢と消えてしまったわ」

「何ですって……」

この時私には、もな美の痛みがはつきりと見えた。

夢という名の翼をもぎ取られ、胸を掻き篁りのた打ち回る苦しみが私の胸の小さな穴をグイグイ乱暴に広げていく。

「黙って見ててちょうだい」

もな美は爪先を立てて両腕を広げ、羽ばたく仕草を始めた。

（“白鳥の湖”だわ。悪魔の呪いで姿を変えられたオデット姫の哀しみ——）

本物の湖を舞台に、足許の危うい崖の縁も気にせず踊り出すもな美。

オデットにも劣らない程の切ない気持ち私が私の心をメッタ刺しにして、やっとの事で白樺の幹に支えられながら膝が崩れていき、私は許しを乞うた。

「やめて…ご免なさい。悪いのは私よ。だからもうやめてえ……」
「あつ！」

ボタン！

突然もな美が倒れてしまった。

パラパラと小石が湖へと滑っていき、倒れ方を間違えたらと思うと、私達は冷や汗が逆戻りしていく心地がした。

「ほらね、最後まで踊れないでしょう？私の足はもう踊りには堪えられないのよ……骨肉腫と診断されたの。このままだと足を切断よ……アハハハハ！」

「！」

何て事！

あんなにバレエを愛したもな美に、天は最悪の仕打ちをし給うのか。

この世に神はいなくとも、悪魔は存在するのかわけられてしま

う。

これがもし私なら、やはり耐えられない。

手が使えなくなったらもう生きていけないだろう。

私は全身の血の気が引いていくのを感じ、口のあたりが痙攣してカタカタ鳴っているのを止める術をも考えられないでいた。

「ねえ、さっき言った“結婚しよう”って言葉、あれ嘘でしょう？冗談よね？ねえ、そう言つてよ……」

「……………」

太陽は言葉をさがしている。

辛くて残酷な一言をどうやって吐き出そうかと喉を詰まらせ苦しんでるのが私にも痛いほど分かる。

出来るなら馬鹿な事だと笑いとばして欲しい。

私を気にせずもな美にひとこと嘘だと言って楽にしてあげた方がいいと願った。

太陽のプロポーズは無しになってもいいからこれが悪い夢で、目覚めるといつもの平和な朝になってこの時本当にそう思った。

しかし私のささやかな想いは太陽の重い口火によって破られてしまふのだ。

「さっき言ったのは本当だ、君の聞き違いじゃない。僕は茉莉沙にプロポーズしたんだ」

「……………」

風が止まった。世界の流れも時間もそのとき止まってしまった。

「……………」

「……………」

「……………」

弱々しく立ち上がったもな美に生気の影はなく、吹けば消えそうな儚さをはらんでいて見てはいられなかった。

哀れな白鳥のようなかなしみ色の瞳で、誰もが見つけられず困っていた言葉をやっとの事で彼女は切り出した。

「さよなら……………」

もな美はそう言ったきり背中を向けると、崖の縁を踏みしめ、渾身の力を込めてそのままグラン・ジユテ（大跳躍）をしてしまったのだ！！

「もな美！」

「パトラちゃん！」

ゴオオオオオオ！

突然、彼女を包むように激しいつむじ風が巻き起こって、私達は飛ばされてしまいそうなところを白樺の樹になんとか& a m p ; # 2 5 6 8 1 ; まって持ちこたえた。

「わああっ！」

「キャアー何この風?!」

(……ハッ!)

いきなり脳裏に浮かんだ、いつか美と一緒に行った占いの館

ジル・アンドローザが告げた運命の竜巻……

それはきつとこの事だったのだ!

竜巻の威力は強大で、& a m p ; # 2 5 6 8 1 ; まっている白樺ごと吸い込まれてどこかへ投げ出されるのではと生きた心地がしなかった。

「ウワツ何だ!」

「眩しい!」

物凄い光がもな美から発せられているようだった。

直視すると眼がつぶれてしまいそうだ。

あり得ない程の突風と閃光に頭は混乱して、このまま手を放してしまえばいつその事楽になれるのかも思ったり、早くこの悪夢から醒めたいから舌を嚙んでしまおうと、私は狂気と正気の狭間でようやく自分を維持している状態でした。

(これは天罰だね。人の気持ちも考えずに誘惑なんかしたから……)

——そのうち、風も止み光も消えていった。湖は波もなく穏やかに風いで、あんなになつていた白樺も元のまま。

今のは一体何だったのかと放心状態で座り込んだが、湖に向かつて跳んだもな美が気になって崖の下を二人で覗き込んでみた。

「パトラちゃん、どこにもいない……」

「湖に落ちたら波紋が広がる筈なのに……」

私達はそろって同じ幻を見たのだろうか?

幻でなかったらもな美は今頃湖の底で溺れている。

私達は近くにいる人を呼んでに助けを求めなければと思いつつ、

体が凍結したように身じろぎもできないでいた。

午後の優しい光は何事もなかったかのように、鏡の湖面をキラキラと輝かせている。

第一部第四章

《登場人物》

夏沢茉莉沙　夢叶い、ピアニストに。愛の障害を越えやがて

……

フレード・ナツザワ　惑星ルミエールで存亡の危機に！

デйм・ナツザワ　津波が止まったのと何か関係がある？

トピー・ミールズ　エクスプレスのチーフパーサー

グラデッサ　女性音楽プロデューサー。茉莉沙のよき相談相手

メリンダ　夏沢家に仕える気のいい家政婦さん

夏沢湖紹奈　茉莉沙の娘。母親似で愛くるしい

夏沢辺我　湖紹奈の弟。そっくりな姉弟

福本瑞江　茉莉沙の母親。孫たちを溺愛

夏沢太陽　もな美より茉莉沙を選び、そして……

第四章

さよならワンダルキア

「パパ！パパアーーー！！」

「危ないからハッチから離れなさい！落ちたらどうするんだ！」

「でも大波をかぶって船が……パパが死んじゃうよう。うわーん

！」

「大丈夫だ、乗客はみんな救命胴衣を着けてるから沈んだりしない。今隊員が残りの人達を捜索中だからすぐに見つかるさ。安心しなさい」

奇跡は待つてはくれなかった。

時を止めるタイムウォッチの魔法にかかったかの如く津波はオブリエとなつて、その間に海の藻屑になりかけた哀れな船から全員救出される……筈だったのに。

『デйм、遅くなつてすまん。心細かつたろう？』

フレードはそう言つて笑いかけているデймの想像も空しく、凍りついた波は一瞬にして解凍してしまった。

父親の安否はまだ分からない。

（地球に着いたらエクスプレスの千年祭で楽しむ約束だったのにどうして？そりゃさつきは天国に逝っちゃったのかと本気で思ったけど、ホントにママのところに逝っちゃうの？イヤだよ。もうワガママも言いません、パパの言う事もちゃんと聞いていい子になります。だからお願い、死なないでパパ……）

デймは一心に祈り始めた。

ちよつと厳しいけれど本当は大好きな父親の為に、そしていつも困らせてばかりの自分を戒め、これからは孝行息子として生きられるように。

「ママ、どうかパパを守つて。まだ連れていったりしないで……」

「おい、見つかったぞー！残りの乗客は全員無事だ。意識もしっかりしている」

（エツ、ホント?!）

レスキュー隊の声が高く弾んでいる。

天はフレードを見捨はしなかったのだ。

「まあよかった！奇跡つて本当にあるのね」

「おお、神よ。あなたのお慈悲に感謝します……」

デームや他の乗客達の顔には、パァーッと薔薇色の生気が甦ってきた。

「あつ坊や、どうしたんだい。しっかりしなさい！」

心の箍がすっかり外れてしまうと、デームの体力も気力もエンブティになり、飛行艇の床をベッドにして、さつきよりも深く深く意識が沈んでいった。

『2番線に停車中のトレインは、21時発の急行・地球行きでございます……』

無事に救出されたフレードは、ホスピタルでも異常なしと診断されて、エクスプレスの出発にも間に合いホッと一息ついていたらこるだった。

「いやあ本当に面目ない、お前にまで心配かけてしまつてすまなかつた」

「もう、ホントにビックリしたんだから！生きた心地しなかつたヨ。じゃあ罰として地球に行ったら僕がどこ行ってナニしても文句言わないこと。いいね！」

デームよ、これからは親孝行すると心に誓つたのではなかつたのか。

「失礼致します。会長、お坊ちやま。よくぞご無事でお戻りに……クルー一同感慨深く天の思召しに感謝致しております」

「トピー君ありがとう。君がいなければ私達はどうなっていたか分からないところだった。本当に何から何までよくしてもらつて感謝してもしきれないよ」

「いえいえ勿体のうございます。私はただ当たり前の事をしただけです……」

♪ ♪ ♪

『皆様お待たせ致しました、間もなく発車致します』

「さ、もう時間だから、私達に構わずに業務優先で」

「はい、ではこの先もお気をつけて旅をお楽しみ下さい。失礼致

します」

月によく似た惑星ルミエールは、二人にとって生涯忘れがたい星となるであろう。

人生は必ずしも順風満帆のときばかりではない事を教えられたような、そんな気がしてならない。

ゴーグルを装着しなければいけない程眩しい星は、遠目には優しくても実際に降り立つと大変で、水面下の水鳥は足で水を必死でかいているのと似ているようだ。

「あのイルカさんたち、危険を教えてくれたんだね」

「ああ、グリーンドルフィンか。動物は人間には分からない何かを知っているというからな。助けようとしたドルフィンにも感謝しないと……」

ところで、あの化け物津波が氷みたいに動かなくなったのは本当に不思議だ。

実を言うとな、我々一族の先祖には代々不思議な力を備えた者が時々現れると伝えられている。

3代前の当主は廃墟になった屋敷を指一本触れずに倒壊させたというし、200年ほど前のロワンドテーリヤ群発大地震が起こるその10年位前に、予知能力を持つナツザワ家の娘がピタリと言い当てた話は有名だ。

その他、迷宮入りしかかった事件をインスピレーションで見事解決させたり、自分の惑星から一步も出ずに遠くの星の出来事を見てきたように寸分の狂い無く話す夫人もいたとか」

「へえー」

「あの奇跡……あれは私でなくきつとお前の遺伝子が目覚めたのかも知れん」

「え？ナニ？」

「いや、何でもない。ところで、本はだいぶ読んだのか？」

「ええとね……もな美さんが湖に飛び込んだじゃったってトコまで」

「それはな、正確に言うとは実は湖に飛び込んだんじゃないんだ」
「エッ?!どゆこと?あのあとどーなっちゃったのオ?」

「これ以上言々と面白くないから、あとはじっくり読んでなさい」

「ウーーン、イケズうー」

「……そんな言葉、どこで覚えたんだ」

「大昔の古代マンガだヨ」

「間もなく安全圏内に入ります。ご乗車の皆様にご案内致します。
3両目バーカウンターにおきましては、これより惑星グリンダの“
ジュジュ”や地球の“マンハッタン”“ダイキリ”をはじめとした
各惑星の名物カクテルフェアを開催致します。紳士淑女の皆様は
お気軽に足をお運び下さいませ」

「おつ、何だか美味そうな催しが始まるな。今から喉が鳴るわい」

「いいなー。僕も飲んでみたい」

「お前はミルクでも飲んでなさい」

「ぶうー」

あれだけ大変な事があった惑星ルミエールも、何もなかったように
優しい輝きを投げかけ、窓の外でどんどん小さくなってゆく。

それでも不思議とこの星を恨みたい気持ちが湧いて来ない。

九死に一生を得る思いをしても、また帰りには立ち寄ってみたい
気にさせてしまうのは、やはり人は昔、月を見て育ったせいかも知
れない。

月によく似た惑星ルミエール――

淡い光は段々薄れ、列車は次の星へとスピードを緩めずに滑って
ゆく。

「さよなら、ワンダルクア。また来るよ……」

再びあなたから離れて

「パトラちゃん、ご免なさい……許して。私がいけないの。うつ、うつ……」

「茉莉沙のせいじゃないよ。そんなに自分を責めるんじゃない」

「でも……子供の頃からバレリーナを夢見てたのに、足があんな事になって……せめてあなたの優しさに包まれたいと思っていた矢先、あんな裏切り……私も腕が使えなくなつてあんな風に裏切られたら、きつと彼女と同じように絶望して湖に身を投げてるわ」

『さよなら………』

もな美は私達に哀しい眼差しを向けたのを最後に、渾身の力を込めて岸壁の縁を蹴つて高く舞った。

すると彼女を取り巻くように物凄い風が巻き起こり、白樺につかまっていないと本当に飛ばされてしまうところだったのだ。

彼女の身体はまばゆい光に包まれ、視力を失いそうな程強く光ったかと思えば、風は止み光も消えた。

それからというものの湖は何日も搜索が続けられたが、もな美は何の跡形も残さずに搜索隊の努力も空しい結果に終わってしまった。

もしかして生きているという希望を抱かせながらも、依然行方不明のままにいる。

「私やつぱり、あなたと結婚できません」

「そうか、もな美の事が気になってるのか。でも僕はこれで引き下がったりはしない。君の気持ちが悪くまで待つよ。何年でも……」

太陽のこの前向きさがあつたおかげで、一生塞ぎ込んでいたかも知れなかった私はこのあと救われる事となる。

しかし、当分結婚はおるか誰ともつきあう気にもなれず、私は再

び日本を離れピアノを続けていた。

思えば昔、バレンタインのチョコレートを渡して太陽に告白しようとしたがもな美に先を越されてしまい、あの二人がつき合っているのも私がグレたり壊れたりしなかったのもピアノがあったからだといまでも感謝している。

いつものようにピアノに触れていた一日が終わろうとした或る日、私の携帯電話が胸騒ぎとともに鳴り響いた。

「Hello, This is Marisa Fukumoto, der sprichst」

「もしもし、僕だ。太陽だよ」

本当は待っていた。

私はこの電話を……

何度も自分から電話しようとも思ったが、色々な事が重なり過ぎて、逢うのはおるか話す事さえ罪悪感を感じるのですと控えていた。

でも太陽の声だとわかった途端、胸の音が大音量になって向こうに聞こえるのではと思った程だ。

「あら、お久しぶりですこと」

動揺を隠す為平静を装ってはみたものの、かえって冷たく響いたのではないか？

もう少し自然に振舞えば良かったのだろうか？

私の後悔をよそに、太陽は気にも留めてない様子だ。

「どう？相変わらず元気にしてるかい？」

「ええ、おかげさまで」

「ところでどうだろう？あれからもう2年以上も経ってるから少しは冷静になれたとは思っただけれど……」

「あら、何の事かしら？」

重々百も承知のくせに、故意ととばけるなんて空しい。

そうしなければ歯止めが利かなくなるのが怖いからなのに。

「前にも言ったプロポーズの事だけど……」

「あら、ソレでしたら別に無かった事にして頂いても宜しくてよ。私はピアノがある毎日が楽しくて気に入ってますから、あなたはあなたでご自分の人生を思う存分謳歌して下さいませ」

いくら苦し紛れとはいえ、こんな心にも無い科白をしゃあしゃあと吐き捨てられるなんて……

もしピアノリストになり損ねていたとしたら、女優ができるような気が本当にしてきてしまう。

「いや、今日は返事をどうこうという話じゃないんだ」

「では何のお話？」

「実は報告がひとつあって」

「え？」

「今度、WASAに正式に採用になった。アメリカ行きが決まったんだ」

「まあ……！」

これは驚いた。

想定外の言葉にさらに動揺して携帯を落としそうになったが、2年前の湖の悲劇が私の頬を叩く。

思えば、小学生のとき太陽ともな美と3人で星を観て夢を馳せたあの頃が一番幸せだった――

『遠いところにある星に行けるようになったら……夢みたいだなあ、すばらしいヨ』

『そうね、遠くの星へ行きましょう。3人で』

『ウン行こう！この3人で』

あのときは夢が無限大に膨らんでいて、そんな不可能な事さえ叶うと信じられたものだった。

あれから3人とも将来の夢を実現させてはみたものの、本当にこれで良かったのかとひしひしと考えさせられる。

（人は夢を叶えても、心からの喜びが無ければ幸せといえないのでは？）

私達三人の姿をかえりみて、時々そう感じざるを得ない。

「……もしもし茉莉沙、どうした？」

「あっいえ、ま、まあそれはおめでとう。お祝いに駆けつけたいけれど、あいにく私は今コンサートで忙しくて……」

「いや、それには及ばない。コンサートはどこでやってるんだ？」

「イタリアよ。でもわざわざ来なくていいわ。あなただって準備とかで何かとお時間ないでしょうし」

「でもアメリカに発つ前には是非とも一度逢っておきたい。もしかしたら、君に逢うのは……これが最後かもしれないから」

ゴン！

今度は本当に携帯を床に落としてしまった。

鈍器で思い切り頭を殴られたようで、これ以上の通話はもう無理だ。

「もしもし茉莉沙、聞こえるか？もしもしー！」

これが最後、これが最後……これが最後！

頭の中でその言葉がわんわん回り続けて、いつしか私はフローリングの床へと意識を沈めていった。

ありがとうマドンナ

コンコンコン

「マリサ、ちょっといい？」

ホール楽屋のノックの主はグラデッサという私のプロデューサーの女性だ。

彼女も若い頃は世界中を席捲したピアニストで、音楽的才能はさる事ながら、素晴らしい音楽家を何人も育てて世に知らしめた実績

を持つスゴ腕で、私は敬愛をこめて”母”^{ムッター}の称号で呼んでいる。

今日のコンサートでは演奏しながら（あ、これはきつとあとで大目玉だ）と思ったが、予想通りムッター・グラデッサがやって来たので、私はグッと覚悟を決めた。

「さっきのは何？！ “セレナード”の後半、モタモタしていつもの切れが無かったわ。それに “ムーンライト・ソナタ第三楽章” あれは空中分解寸前ね」

観客は騙し騙しに通せても、妥協を拒むグラデッサの耳は流石に誤魔化せない。

この人に言葉で嘘をついても演奏をすればたちまちバレてしまう程、微妙な心の隙間まで表れるからピアノってこわい…………

「ほかにも色々あるけど、キリがないわ。とにかく、今日のあなたは気持ちというのがありません！ 音楽を愛しむ気持ちがね。自分の心ひとつコントロールできないようならピアノニスト失格よ！！」

グラデッサの厳しい言葉は普通なら応えるだろうが、今の私には柳に風でしかない。

それよりももっと深刻な想いを抱えるのが重くて、私は申し出ずにはいらなかった。

「ムッター、今日の仕事はいい加減で本当に申し訳ありませんでした。でも、聞いて欲しい事があるの……………」

私は今迄の経緯を語り始めた。

小学校の頃から太陽が好きだったけれど、彼はもな美とずっとつき合っていて、私は口惜しさをバネにピアノをがむしゃらに頑張ってきてやっと認められた事、子供の頃仲が良かった3人はそれぞれ夢を叶え、宇宙に行った太陽は私への気持ちに気づいた事、もな美はこれからという時に足が病魔に冒されて、しかも太陽の気持ちを知って湖で行方不明になってしまった事、そしてそれが私の心にかかっていて忘れようと努力してるが、先日太陽からアメリカ行きを聞かされてこのままだともう逢えないという事も隠さずに話し

た。

グラデツサはなんと言つか分らないが、私ひとりで抱えるにはキャパシティーも限界に來ているので、少しでも樂になりたかつた。

「そう……モナミ・イチノハラだったら私も知つてゐるわ。若いのにお氣の毒。で、あなたはどつしたいの？」

「私は……もな美の事がどうしても引つかかつて……彼の氣持ちを素直に受け入れるのがためらわれるんです」

「でも、タイヨウが好きなんでしょ？」

「ええ」

「彼女は死んでるかも知れないわ。もういないのよ！居もしない人を氣にかけてどうするの！それより自分の幸せを考えないと、あなたはいつまでも地獄の中よ」

「ええ、頭では分かるのですが……」

「ピアノは、ここでなくてもいいのよ」

「は?!」

「まあアメリカは変わった人が多くてやりづらいかも知れないけど、あなたなら十分通用するわ。私が保証する。だって、類稀な才能を天から譲り受けたのは、シュドルフも一発で見抜いたでしょう？さあ、アドヴァイスはあげたわ。人生は一回だけ。あとは決断するのよ」

「……分かりました」

「幸せは誰かがくれるものじゃなく、自分で選り取るものよ。幸運を祈るわ」

音楽に関してはデーモンみたいな人なのに、この時のグラデツサは背中に透明の羽が生えてるようで後光差し込む聖母のように崇めてしまった。

流石、カリスマは違ふ。背中を押してくれた母に私は感謝してもしきれない。

「ムッター、ありがとう……」

私の目頭はいつしか熱くなり、グラデッサはそんな私の頭を撫で、やさしく抱きしめてくれた。

最良のとき

「茉莉沙！」

「太陽君、やっぱり来てくれたのね……」

私の迷いは、雨上がりの露と共に消えていくようだった。

もな美は気の毒な事になってしまったが、これも彼女の運命。きつと幸せな時期もあった筈だから、もしこの世にいないとしたらその想い出を胸に安らかに眠って欲しい。

そう思うとずっと悩んで来た自分が馬鹿馬鹿しい程哀れだ。

人は心ひとつでいくらでも幸福に生きられるのに、その事に気づかず自分を牢獄に閉じ込めていたのだ。

（でも今日からは、鉄格子を破るわ。明るい光のもとへ行くのよ！）

その光の中に太陽がいる。

彼はいつだってキラキラ輝いて私の目には眩しすぎるのだ。

そんなあのひとに、私は俯いてても嫌われていなかったのだろうか？

いや、そんな心配より太陽に気持ちに応えるほうが先だ。

さあ言うのよ茉莉沙、今度彼に逢ったら絶対口にすると決めた言葉を！

「あなたのお申し出、お受けします。私も、あなたと……結婚したい」

言葉の分からねぬ異国の鳩が一齐に飛び立ち、二人を祝福してくれているのだろうか？

昔観た映画のワンシーンの中に、私達が入り込んだ錯覚に陥って

しまう。

人目も憚らず抱き合う私と太陽を、スペイン階段に座って笑いながら羨む人たち、道端で売ってるジェラートもあまりの熱さに溶け始めている。

映画のヒロインは短くて哀しい恋が終わってしまうのに、本当に私の始まりはこれからなのだ。

思えばとても長い道程だった。今度こそ逃がさない、私の幸せ――

「ありがとう、やっと言うてくれたね。一度日本へ帰ろう。そして式を挙げよう！」

何度も見た、もうひとつの密かな夢。それが今ようやく叶う。

鏡の中、白いドレスの私、もう夢じゃない。

どこをつねっても目覚めて独りぼっちなんて事はないのだ。

「夏沢太陽、アナタハコノ者ヲ健ヤカナル時モ病メル時モイツクシミ、愛スル事ヲ誓イマスカ？」

「はい、誓います」

「福本茉莉沙、アナタハコノ者ヲ健ヤカナル時モ病メル時モイツクシミ、愛スル事ヲ誓イマスカ？」

「はい、誓います」

（今度こそ本当ね。気がつけば変な人と入れ替わってたなんてイヤよ！）

「デハ、指輪ノ交換ヲ」

太陽が私の手を取り、薬指にはめてくれたプラチナリング。

指にずっしりと“これは現実だよ”と教えてくれている。

（この重さ、やっぱり夢じゃない）

私の目が、ほんのりと滲むのを感じる。

「ソレデハ、誓イノロツケヲ」

私の顔を覆っていたヴェールをたくし上げたのは、この世で一番愛しい顔で間違いがなく、私の睫毛は堪え切れずに温かな真珠の粒

を放っていった。

誰かが言っていたが、花嫁を一番美しく飾るのは、どんな宝石よりも清らかな涙だと――

太陽の唇、これも本物だ。

私が忘れる筈が無い、この感触を……………

夢のように美しい現実には滞りなく進んで、悪夢には無かったシーンを次々と迎えることができた。

私達は今、ライスシャワーを浴びている。

ここまで来ればもはや疑ってはいない。

そして後ろを向いて、碧空に向けて思い切り投げるブーケ。

もう邪魔をするものは何も無い！

あまりの気持ちよさに、心はブルースカイのむこうまで突き抜けてゆくような気がする。

「キヤーッ」

「私がもらうのよ！」

「いーえ私よ！」

「やったーゲット（^^）」

「あーイイなあー」

私は振り返り、はしゃいでいる女の子達を見てふっと淋しさが横切った。

（ホントなら、ここにパトラちゃんがいいた筈なのになあ。ブーケだって彼女にあげたかったし……

うつん、やめよう。幸せが逃げるわね）

今日は悪い夢の通りにならないよう、一日笑顔を絶やさないともしりでいたのだ。

絶対悪い意味で泣かないと決めたから少々のことでは意地でも顔は崩さない。

しかしそんなたった一日限りの決意も脅かすような事があるなんて……

私も不意をつかれて戸惑い、あとは無事に早く終わる事しか考え

られなかった。

「さ、次の披露宴の準備もあります。どうぞこちらへ」
一度控え室で休憩してメイク直し。

開宴前のリラックスも束の間、始まればお色直しもあるしお開きになっても見送りもしなきゃいけないし、終わるまでバツタバタだから一日花嫁やるのも楽ではないが、そんなたのしい苦労もブラックホールへ呑み込まれるほど、私は恐怖のどん底へと突き落とされてしまう。

窓辺で同級生達と写真を撮ったりして昔話に花を咲かせているまではどこの結婚式場にもある風景だった。

「ついにやったわね、茉莉沙。まさか夏沢くんが相手とは思わなかったけど」

「このこの、ニクーイ！あとで暴露話でもしちゃおうかナー」

「えーヤダーやめてえ」

「ハハハハハ」

私がふと、何の気なしに窓に目をやってみた時だった。

「！」

「？、茉莉沙ちゃん、どーしたの？」

「ううん、どうもしてない」

（そうよ、そんな筈ないわ。絶対あり得ない！）

もう一度窓を見てみた。

庭がきれいに見渡せるだけで、今私が見たものはもうどこにもない。

私は拳式で緊張して疲れたのだ。きつとそうだ。そう思いたい。しかし幻にしてはあまりにリアルで、鮮明に瞼に焼き付いてしまった。

思い出すのもおぞましいけれど……

それは、真つ逆さまの女が土色の顔で窓ガラスにベツトリとはりついていた。

瞳孔の開いた眼が充血しながらこちらを睨みつけ、血が流れて呻き苦しんでるようにも見える。

しかもそれは見たこともない女の顔ではないようなのだ。

（誰かに似ている……そうだわ、あのひとはきっと、パトラちゃん？——）

そのあとの披露宴は平静を装うのが精一杯で、幸せとか楽しいだとかの言葉など頭の中からぶっ飛んでいたのは言つまでもない。

とてつもない予感

「……というのがダディーとマミーが結婚するまでのお話よ。結婚式が終わったら、ダディーのお仕事の都合ですぐにアメリカに渡ったの。それから湖紹奈が生まれて、辺我が生まれたのよ」

あれからもう10年。

独身時代は様々な山河を越えてきたけれど、結婚してからは一姫二太郎、二人の子供に恵まれ恐いほど平穩無事に毎日を送っている。ピアノは辞める事なく続けていて、長女の湖紹奈^{こみね}、ひとつ下の弟の辺我^{べが}も手がかからなくなってきたので、最近では子供達はメリンダというベビーシッターの時から世話になっている女性に任せてコンサートツアーにも行ったりしている。

ついこの間もカナダから帰ってきたばかりで、今日は久しぶりに子供とゆつくりした時間を過ごしていた。

「フーン、すごいなア。マミーたちの恋って、恋愛小説みたいネ」

「ま、この娘ったらおマセさんね」

「ハハハ……コロナお嬢様もお年頃なんですよ。ねえ」

「あらメリンダさん、もうゆっくりしていいのよ。宜しかったら一緒にお茶でもいかが？」

「そうですかぁ？じゃお言葉に甘えて。いまクッキーのおかわり持ってきますね」

ずっと待っていた幸せが、ここにある。

夫がいて子供がいて笑いと愛に溢れた日々――

ただ時々思い出すのは、行方知れずの美の事。

彼女が見つかったという話は聞いていない。

胸の痛む想い出だから忘れてしまった方がいいとは思っただけ

ど、あの結婚式の日、私だけが見た身の毛もよだつ恐ろしい幻……

あれは幽霊だったのか？

それとも太陽を奪った罪の意識が見せたものなのだろうか？

ほんの一瞬の事だったが、自分を睨んでいた眼が『私を忘れないで……一生記憶から消さないで』と言っていたようで、どうしても

気のせいでは済まないように思えてしまうのだ。

「ただいま」

「あらあなた、お帰りなさい。早かったのね」

「ダディーお帰りなさい。ねえセブンブリッジやろーよオ」

「あつこれ、ダディーは疲れてるのよ。お遊びはあとになさい」

「ハ―イ」

「お仕事早く終わったの？お腹すいてる？お食事の支度すぐにするわね」

「いや、あとでいい……」

「そう？」

太陽の様子がいつもと違うようだ。

顔色がすぐれないように見えるが疲れがたまっているのだろうか？

それとも体調が良くないのか？

子供達が寝静まったあと、私は太陽に訊いてみた。

「あなた、具合でも良くないのですか？」

「いや、大丈夫だ」

「そう、でも何だか元気がないみたいよ。何かあったのなら話して」

「うん……」

太陽はためらいがちに口を開いていった。

「実は、天体観測をしていた時の事なんだが……エルディック彗星は知っているか？」

「いいえ、私は星の事はあんまり……」

「そうか。そのエルディック彗星というほうき星だが、もうすぐ地球に再接近する。予定では二週間後の土曜日だ。再接近時には大西洋の上を通るからアメリカほぼ全土から観測ができる……筈だ。しかし今日観測したところによると、どうしても腑に落ちない事態になってきているんだ」

「ねえちよつと待って、お酒でも飲みましょう。落ち着いたほうがいいわ」

眼を大きく見開いて脂汗を滲ませている太陽を見て、私は本当に只事ではないと直感した。

このまま興奮させておくと血管がどうにかなって倒れかねないよな勢いだ。

少しでもリラックスして欲しいと、私はキッチンに行って氷と水、そしてブランデーを用意した。

「慌てないでいいのよ。さ、飲んで。私もいただくわ」

とりあえず2〜3杯飲んでみた。

ふうーっと吐息が熱くなってきた頃、再び太陽の口がさつきよりも饒舌に開かれた。

「どこまで話した？」

「ええと……そのナントカ彗星が大西洋の上を通って、アメリカからきれいにみえるんでしょ？」

「そう、そのナントカ……じゃないエルディック彗星なんだけど、今日見てみたらア、そのお、星には軌道ってモンがあるでしょ？！

あるじゃないハハハ」

（ゲ……もう酔ってる）

結婚してから気づいたのだが、このダンナは酒に酔うと骨なしフニヤフニヤ男に変身してしまうのだ。

私は爽やかで背筋のスツと伸びた太陽に惚れたつもりなのに……

まあ、さっきの血の気の失せた顔よりはいいけど。

病院送りになっても困るし。

「ソウ、星には軌道ってモンがありまして、その軌道に沿ってどの惑星も動いてるんです。水・金・地・火・木・土・天・海・冥、ア、土・天・冥・海の時もあるか。ソレはネ、冥王星の軌道が楕円形だからでエ、その順番の覚え方を暗誦するとトシがバレちゃうのだ。アレ？冥王星って太陽系惑星だっけ？ボクちゃんわかなーい」

そういえば幼い頃、冥王星は惑星だと教わったが、のちに惑星といえる星がいくつも発見された為に、変更が大変なので小さな星冥王星が除外されてしまった。

しかし今はそんな事どうでもいい。

「はいはい、それで？さっきから同じ事何回も言ってるわよ」

「あーオバサンゴメンゴメン。えーとおー」

（お、オバサンだとおー！！！！）

はつきり言って絵に書いたように毎日が幸せだが、時には「離婚よ！」と頬にビンタを張ってやりたい事もある。

「ボクちゃん、わかったからとつと次をお話し！」

「うえーん、こわいよう。ママあー」

（はあー、駄目だこりゃ）

今日のところは諦めたほうがよさそうだ、話はまた折を見て訊き出す事にしよう。

それにしても、太陽は私には勿体無いくらいにいい男と思っていたのに、どこの世界にも完璧な夫などやはりいないものなのだろうか？

「ママあゝあの鬼ババがいじめるヨオ」
「だから鬼ババじゃないっちゅーの！！！」

ココナツのハートビート

『間もなく発車致します……』

様々な星への輸入・輸出を司る宇宙流通センターは、とくに観るところがある訳でもなく、停車時間も短いので乗客は皆、せいぜい買い物を楽しむぐらいなものだ。

しかし、どんなに物価の安い星よりも商品がリーズナブルなので、土産物や贈り物、普段使いのものまで鬼のようにここで購入しまくってゆく人も多い。

フレードとデймも、御多分にもれていないようだ。

「お前も随分買い込んだみたいだが、一体どれだけ買ったんだ？」

「遊びに行く時の服10着でしょう、靴が15足、それからシャンプーに香水、全宇宙時計、カツコイイ靴にお菓子たくさん、あとデスキーヌ……」

「デスキーヌだとお？！そんなもん地球に持って行って何するんだ！」

（しまった！）

うつかり言い放つてからデймは後悔して、顔からどんどん血の気が引いていくのを感じた。

何しろデスキーヌとは地球というコンドームの事だから。

「あ、あの……デスキーヌ、デスキーヌデスキーヌ〜ラララ〜」
つて歌ってたんだよ」

「うるさい！歌って誤魔化すな！お前は一体地球に何しに行くつもりなんだ？！そんな不埒な事ばかり考えるんだったら、次でロワンドテーリヤに引き返させるからな！」

「会長、どうなさいました?!」

フレードの剣幕に、トピーは慌ててコンパートメントに駆けつけてきてしまった。

しかし、事の事情を話すにはフレードも流石にためられて、今まで蒼い顔をしていたデймも、今度は血流が一気に戻って紅くなっていた。

「いや、その……何でもない。下らない事なので君の手を煩わすまでもないから、どうぞ大事な業務に戻るように」

「あの……誠に余計な事とは存じますが、デスキー又でしたら車内にもございますし、ご必要な折はいつでもお声をおかけ下されば……」

紅潮したデймの頬はさらに茹でダコになり、フレードにまで恥ずかしさが伝染してしまった。

「いや、あの……別に私は……その……」

「いえいえ、ご遠慮なさらなくても結構です。着けた方が何かと安全ですし、あるに越した事はありません。あ、もしデймお坊ちやまもご必要ならお気軽に……」

「えっ! お気軽につて……あの……」

もはや長時間風呂に浸かり過ぎたようなデймの顔は、穴があったら入りたいと言っている。

親子ともども気まずいというのに、トピーはどこ吹く風で、爽やかに「それでは失礼致します」とあっさり行ってしまった。

おかげであれだけ大騒ぎのデスキー又事件がドライアイスのようにシュワシュワと消えて、何だか気までが抜けてきた。

「次は、トロピカル・プラネット、トロピカル・プラネットでございます。停車時間は50時間を予定しております。お急ぎのお客様は、反対側ホームに到着致します快速特急をご利用下さいませ……」

「50時間つて、そんなに停まってるの?」

「次の惑星は“宇宙の楽園”と呼ばれているからなあ。よっぽど急いでない限りみんなのんびりとヴァカンスを楽しむのだよ。中には50時間どころか何泊もしていく人も多いし、宇宙のあちこちから観光客が集まってくる人気のリゾートプラネットなんだ」

「へえー、なんだかワクワクしてきちゃうな。早く着かないかなアー」

デймは窓にはりついてカーブしている車両の先端の、さらにそのまた先に眼を凝らしてじいっと窺っていた。

「あつ、パパあれかな？」

「どれ？」

「ホラあのみどりの」

「ああ、そのようだな。トロピカル・プラネットは鮮やかなグリーン
の光を放っていて、“人生を忘れさせるエメラルド”とも謳われているんだ」

その“人生を忘れさせるエメラルド”は、いい薫りを漂わせ笑いながら手招きしているようで、人は皆灯かりに釣られて飛んでくる夏の虫のようにこの惑星に惹かれてゆく。

蒼い空に碧い海、暖かく甘い風に、そして恋の予感……

この星は人々を魅了してやまない。

「間もなくトロピカル・プラネット、トロピカル・プラネットでございます。当列車の到着ホームは2番線で、向かい側3番線には地球行き快速特急がこのあと到着致します。なお、お乗換えは4番線よりアルティル方面行き、5番線よりサザンクロス方面、6番線よりアンドロメダ方面、7番線より北斗七星方面がそれぞれ発車致します……」

「パパ、ナンカ暑くない？」

「常夏の星だから仕方ないさ。涼しい服に着替えて、帽子も持った方がいいぞ」

緑豊かな大地に佇むステーションは、今までと趣がまるで違ってい

た。萱葺き屋根に木でできたような建物は原住民の家のようで、デ
イムは少し心配になっていた。

「あんな建物で大丈夫なの？嵐が来ちゃったら吹き飛ばされそう」
「木造に見えても、鉄筋コンクリートなのさ。しっかりした材料
で朽ちかけた小屋の雰囲気を出すのは難しかったらしいが、南国ム
ードいっぱい、”ああ、リゾートに来た”って実感できるぞ。さ
あ、少しゆっくりしていくから忘れ物ないようにな」

ドンドンドンドンドン……

列車がホームに滑り込むと、地響きに似た音が聞こえてくる。

「何これ?!」

「歓迎のしるしだよ。あの音は太鼓などの打楽器の音だ。さあ着
いた、行こう」

ドンドンドンドコドンドコドン……

「● × ♪ ♀ \$! !」

ステーションはまるでお祭りだ。

腹の底に響く太鼓の音、理解不能な現地語風の言葉で言う「よう
こそ」――

二人とも圧倒されて暫くはこのカーニバルに見入っていた。

ドンドコドンドコドン、カカツ!

「ハー……ッ!!」

どうやらデモンストレーションは終わったようだ。

思わず拍手が湧き上がり、フレードたちも熱烈的歓迎に拍手を贈
った。

ステーションのエントランスでは、女性達が乗客の首をレイで飾
っている。

「ようこそ、トロピカル・プラネットへ」

「パパ、キレイな女の人たちだね」

「……………」

フレードはただニンマリとにやけている。この親父は一体何を考えているのだろうか？

「もう、鼻の下長くして」

「いらっしやいませ。トロピカル・プラネットへようこそ」

フレードもレイをかけてもらおうと、いそいそと美女たちのもとへと走って行ってしまった。

「ホントにスケベなんだから、いい年して……ん？……！！」
大人げないフレードを呆れ顔で睨みつけていたフレードは、突然息を呑んだ。

何かとんでもない事を発見してしまったのだ。

「パパッ！ パパァー！！」

ドン

「イテテ……」

突然立ち止まるフレードに、ディムはぶつかってしまった。

「いらっしやいませ。ようこそ……お客様？ どうかなさいまして？」

今までチャウチャウ犬のような表情で喜んでいたフレードの顔が強張り、そのまま固まってしまった。

「……………カメラア！」

それは奇跡か神の悪戯か、女性達の中のひとりの女……………

他界した筈のフレードの妻カメラアが、墓場の底から蘇えったのかと思うほど瓜二つだったのだ！

時の針は逆に回り、若かりし日がもう一度自分を包み込んでいると、フレードは錯覚の世界へ落ちてゆくのだった——

「お客様、大丈夫でございますか？ お客様——……………」

今、なんて言ったの？

「今日はちゃんと落ち着いて話していただきます」

「ハイ……」

先日飲ませたのは失敗だった。

結局太陽はヘロヘロに酔いつぶれて、ボタンキューと寝てしまったのだ。

今日は頼まれようとなろうと、意地でもアルコールは出さないつもりだ。

「えーと、はじめから話そうか？」

「ええ」

「再来週の土曜日にエルディック彗星が再接近するとき、大西洋の上を通るっていうのは聞いたかな？」

「それは聞きました」

「それで……天体観測してて妙な事に気づいたんだ。エルディック彗星の軌道だが、何度見て計算し直しても合点がいかない。彗星の動きがわかるかわからないか位の微妙さで、少しずつずれていつてるんだ」

「え？」

太陽の言う事を私は半分しか理解できないが、何か途轍もない事が潜んでいそうで、固唾を吞んで話の行方を頑張って追いかけていった。

「つまり、今まで通りなら大西洋上を通過という事なんだが、観測して計算してみると……アメリカ本土に、まっすぐ突っ込んでくるといふ事になる」

「何で……す……って？」

太陽、今何て言ったの？

信じられない！

ほつき星が堕ちて来るだなんて、スペクタクル映画じゃあるまいし現実になんてそんな事が起こるなんて私は認めない。

「そんなのウソよ！彗星だって何回も行ったり来たりしてるんでしょ？今まで何とも無くて今度は急に地球にぶつかるなんて、おか

しいわよ」

「僕だつてあり得る訳ないと思ったよ。しかしこれはWASA自体が認めた事なんだ。気持ちは分かるけど、ひっくり返すなんてできない……」

太陽の肩が僅かに震えていた。

私には認識できない事だがどうやら本当にそうらしい。

ほつき星が堕ちて来る――

私達は皆、どうなるのだろうか？

そんな事想像すら出来ないし、考えてみても震えがくる。

「この事はまだ一部の人間しか知らないし、全米に発表するかどうかは大統領を交え検討中だ。なにしろ、国中は恐怖と混乱の坩堝るつぼと化してしまう可能性があるからだ。しかし、時間が無い。お前たちは一日も早く日本へ帰りなさい」

「あなたはどうするの？アメリカに残るっていうの？」

「まだやる事が沢山あるんだ。すぐ逃げるなんていう訳にいかない」

「そんなのイヤよ！私あなたを置いて日本には帰れない！」

「気持ちは分かるが、子供達を避難させてくれないか？この国には危険が迫っているんだ」

「ねえ、もう一度よく調べられないの？何かの間違いとか、勘違いなんて事もあるんじゃない？」

「……残念ながら事実だ。ここは素直に受け止めて、日本に帰ってくれ。頼む……」

太陽の目は哀しい色を映していた。

私と子供達を愛している故に安全な場所へ逃がしたい、たとえそれで今生の別れを迎えてしまったとしても、太陽は私達がなんとか逃げのびて欲しいと願うのが苦しい程私には分かる。

彼の気持ちを想うと、私は湖紹奈や辺我とともに一旦この国を離れた方がいいのではと思い始めていた。

「わかりました。子供達は私が責任を持って実家へ連れて帰りま

す。あなたもお仕事がなんとか片付いたら、日本へ……ねっ」

「ああ、わかった。約束するよ」

私の胸には、打ち消しても否定しきれない悪い予感が黒雲のように渦をなしている。

それを振り切るように太陽へしがみついてしまった。

頬を伝う雫が、彼の背中へと筋を描いて滲んでいった――

気が気じゃない

『New Japan Airline, No. 499 for Tokyo・Now……』

「それじゃ私達は行きます。あなたも早めに区切りを付けてすぐ日本に来て」

「分かった、そうするよ」

「ダディー、またネー」

「バイバーイ」

お互い手を振りあい、私と太陽を隔てる距離はどんどん、どんどん伸びてゆく。

このまま私は待っているだけでいいのだろうか？

待っていると彼は必ず私達のもとへと帰って来るのだろうか？

（ううん、気のせい。あの人と暫く離れるから淋しいだけよ）

不安がよぎって胸騒ぎを覚えずにいられなかったが、なんとか気丈に子供達の手を引き、私は飛行機に乗り込んだ。

後ろ髪をひかれつつ――

こんな気持ち、ウィーン留学に飛び立ったあの時以来だ。

「マミー、夏休みじゃないのにどうして日本に遊びにくくの？」

「それはね……そうね、おばあちゃんがどうしても湖沼奈と辺我に逢いたいっていうのよ。おばあちゃんは体の具合が悪くてね、

もしかしたら危ないから今のうちに顔を見たいんですって」

「おばあちゃん、死んじゃうの？」

「そうと決まった訳じゃないわ。きつと湖紹奈と辺我に逢ったら元気になるわよ」

母の瑞江が危篤だなんて話はまるつきり聞いていない。

子供にこんな嘘をつくなんて、仕方ないとはいえ本当に心苦しい。母の顔を見たらよく謝っておこう。

「ダディーもあとで来るんだよね？」

「ええ、すぐにね」

太陽の仕事はいつひと段落つくのか？

私は落ち着きはらって見せているものの、内心待ち遠しくて堪らない。

ヤキモキした気持ちを乗せて翼は西へ向かって雲海の上を滑って行く。

「まあ、よく帰ってきたねえ、遠い所から疲れたでしょう？さ、上がった」

「わあーおばあちゃん、死にそうだけど元気になったんだ。マミの言ったとおりだ。よかったあ（^^）」

「ちよつと茉莉沙どういう事？」

母はいきなり痛い視線で私を攻撃してきた。

「ご免なさい、わけはあとでゆっくり話すわ。あの子達が何か言っても“体は大した事ない、お前たちの顔見たら元気が出た”と言つて。お願い」

嘘の後始末は本当に大変だ。

世の中の詐欺師の人達はとんでもなく大変な仕事をしているのだろっと思つた。

私にはきつとできない。

「ほんつとにしようがないわね、私を重病人かなんかにして。そのうち殺されかねないわ」

「ご免なさい、でもそうでも言うしかなかったの。なんで急に日本に帰るのか訊くものだから……………」

丁度近くの神社で縁日があるので、子供達は私の父に連れられ揚々と出かけて行った。

私は長旅の疲れを紅茶の香りで癒しながら、母に今本当の事を打ち明けようとしている。

瑞江は、笑うだろうか？

それとも“くだらない嘘をつくな”と噴火するだろうか？

「湖紹奈と辺我を急に連れて帰ったのは理由があるの。

あのね、あの……………」

ところで、こんな事信じてもらえないかも知れないけど……………エルディック彗星っていうほうき星がもうすぐ地球に近づいてくるの。

太陽が言ってたけど、そのほうき星の軌道がズレていて、本当なら大西洋の上を通るものが……………アメリカ本土に堕ちて来るんですって！」

母の瑞江は私の言う事が理解できているだろうか？

恐る恐るリアクションを確かめながら話していると――

「何？も一回言つて」

ズルツ……………バナナの皮で滑つたみたい。

仕方ないなあ、もうちょっとわかり易く言うわね。

「そんな馬鹿な事……………もし本当なら今頃テレビとかで言ってるでしょう？」

「私だつて始めは信じられなかったのよ！今、米国の上層部で緊急極秘会議まで行われてて、この事をどう発表するか揉めているわ。下手にマスコミに流すと、どうなるか分かるでしょう？あれだけの大国よ。世界中が滅茶苦茶になっちゃうわよ！！」

本当に考えただけで身も細りそうだ。

もしあの国が滅びでもしたらどうなるだろう？

経済も流通もストップして、地球上の社会が死んでしまうかも知れない。

いや、それよりも私は太陽が一刻も早く私達のもとへ無事に来てくれるのを切に願っている。

（あなた、どうか戻って。身ひとつで構わないから……）

そんな私の思いとは裏腹に、悪戯に日にちだけが幾日か過ぎていった。

早く日本へと避難するよう促そうと堪りかねて太陽に電話を架けてみた。

「もしもし、あなた？私、茉莉沙よ。お仕事はどう？もう落ち着いたの？」

「茉莉沙……何て言ったらいいんだろう？実は大変な事になってしまった」

「え?!」

このとき、五臓六腑の機能が停まってしまうかと思った程、激しい胸騒ぎが私を襲った。

太陽に万が一の事があつたらどうすればいいか本当に分からない。そんなのは今迄考えた事もないし考えたいとも思わない。

取り敢えず冷静になろうと私は気丈に努めてみた。

「上層会議では、メディアでの事前発表はしない事になった。恐らく国中が大パニックに陥るのを避ける為だろう」

「そんなの！国民全員を騙すっていうの?!」

「彗星は陸地に堕ちてこないかも知れないし、たとえ堕ちても被害は大したものでもないかも知れない。それより恐ろしいのは、人々の心が荒んで犯罪や殺人が爆発的に起こってしまう事——会議ではそう決断されたんだ」

被害が大した事ないかもと言ったって、彗星がまともに堕ちて誰もが達者でいられるとも思えない。

騙まし討ちに遭うようでアメリカの人々が気の毒だ。

「そうなの、じゃあせめてあなただけでも日本に帰ってきて」

「それが、言い出しにくい事なんだが……しばらくここを離れられなくなってしまった…」

「なんでよオ?！」

私の呼吸は突然上がりだして、酸欠になるかと思ってしまった。

「一応国家機密を知る者なので、目をつけられている。不審な動きをすればその場で処置をすると通達がきているんだ」

冗談じゃない!!

太陽に罪は無いのにこんな不条理が許されていいのだろうか?! 私の頭には憤りが怒涛となって渦巻き、そのうち目の前に星が輝きだして太陽の声が段々遠くに木霊してゆくのを感じていた。

「茉莉沙? もしもし、茉莉沙どうした?！」

トップシークレット

お父さん、お母さん。突然ですが私はもう一度アメリカへ行ってきます。

太陽は複雑な事情により帰国ができないそうですが、どうしても心配でいても立ってられず

私は会いに行つて、彼の顔を見たら首に縄をかけてでも連れて帰るつもりです。

心配しないで、私なら大丈夫。

きつと戻つて来るつもりですが、もしも、万が一の事があつた時は湖紹奈と辺我をよろしくお願い致します。

愚かな母親を恨まないよう言つてきかせて下さい。

でもそんな最悪な事にならないよう地を這つても、石にかじりついてでも私はもう一度ここに帰ると約束します。

愛する家族たちのために—— 茉莉沙

『Ladies & Gentlemen, We will soon fry away from Tokyo. Please sit down and fasten your seat belt. Thank you.』

——皆様お待たせ致しました、間もなく離陸致します。お座席のベルトを今一度お確かめ下さいませ』

（今頃皆は置手紙を見てどんな顔をしているのだろう？ やつぱり心配かけてしまったかしら？）

私は後悔していない。

かのXデーまでもう3日もないからどうしても太陽を放つてはおけず、敢えて危険地帯へと向かっていた。

もしかしたら隕石に焼かれて灰になるかも知れない。

でもそれも太陽と一緒に本望だとも思える。

ただ気がかりなのは湖紹奈と辺我を遺して逝くこと。

二人には私のような不幸せを味わう事がないよう見守っていたけれど、それも叶わなくなるのは永遠に心残りだ。

私はこんな事を考えたり、悪い想像を否定したりしながら太平洋を渡って行った。

「どうぞ、機内食でございます」

「ありがとうございます。でもご免なさい、欲しくないの」

「どこかお加減でも思わしくないのですか？」

「いえ、大丈夫です」

「左様でございますか。では何かございましたら、お気軽に私どもにご相談ください」

「どうもありがとうございます」

食欲もなく、夜の帳に包まれてもまんじりとも出来ずに、時々どこかで光る稲妻を虚ろに見つめ、これが悪夢ならどんなに救われる

だろうと考えていた。

目が覚めたら、太陽や子供達との変わらないいつもの平穏な朝……
私は目を閉じ、夢よ早く醒めてと心で繰り返し続けた。

乾いた風、目がつぶれそうに舞う砂埃。

物々しく動き回る人達の手前で、何ものをも拒むように門は固く閉ざされている。

「すみません、私この職員のナツザワの妻ですが、夫に会わせて下さい」

「何かご自分を証明できるものをお持ちですか？」

私は鞆を探り、パスポートを守衛に提示した。

「OK、奥さん少々お待ち下さい」

守衛は内線で連絡をとり、暫くなにやら話し込んでいたようだが、そのうちちよつと困った顔で、お手上げのポーズをとった。

「奥さん、ナツザワさんは今どうしても手が離せなくて、この忙しいときに来るんじゃないとお怒りだそうですね」

「そんなの出鱈目よ！主人がそんな事言う訳がないわ」

そう、どんなに忙しくても太陽はそんな風に言う男ではないと私はよく知っている。

（これは何かの圧力なんだわ）

そう感じると、これはやはり只事じゃないと彼の身が案じられ、私はもう居ても立ってもいらなくなってきた。

「そういう事なら私にも考えがあります。主人に会えるまで絶対に帰りませんから！」

守衛はまたも困ってお手上げポーズをする。

「そうですか。そこまで言うなら中でご主人をお探し下さい。でもそのかわり無事に出られる保障はありませんよ」

「構いませんわ。ここで“ハイそうですか”と引き下がる訳にいきませんもの。では失礼して、ご免遊ばせ」

今やここはどういう所なんだろう？

単なる宇宙開発研究所ではなく、職員達を拉致監禁している牢獄でしかない私にはそう思えて仕方がない。

（勢いで入ったは良かったものの、あの人はどこにいるものかしら？）

何エーカーあるのか見当も付かないほど途轍もなく広そうな敷地は、歩くだけで疲れてしまう。

その中で太陽を捜すなんて本当に骨が折れそうで、自分の夫なのにこんな思いをしないと会えないとは情けなくて涙が止まらなくなってきた。

（でも、泣いてる場合じゃないのよ。しっかりしなさい茉莉沙！あの人を見殺しにしたいの？）

「ううん、そんなの絶対に嫌！時間がないのよ、諦めたら終わらだわ！」

私は慣れない場所で心細くなっている自分を励ますため、歌を歌い始めた。

「♪ 紅い木の実が　枝からポトリ　コロコロ、コロコロ転がって
エ　追いかけていくよ　コラコラ待ちなさい　気づいてみればここは
どこ　花が咲いてるいい香り　誰も知らない知られていない　秘密
の楽園へようこそ　♪」

半ば自棄っぱちにも見える私を見て、人々はさっきから何やらヒソヒソ耳うちしているみたいだ。

きっと訳知りの女が、頭がおかしくなってしまったと哀れんでいるのだろうか？

「モウあなたあ、どこにいるのオ！」

このままだと本当にヤバい人になりそうだ。

太陽よ、お願いだから少しでも私に顔を見せて……………

私たちのカタストロフィ（終焉）

（ああ、何だか頭がボーッとしてきた。もう何も考えられないわ……）

本館らしき建物は調べた。

別館1号館、2号館、3号館、天文台、ロケット打ち上げ場……
太陽の姿はいまだ見当たらない。

足なんてとづくに棒になってしまい、彗星が堕ちてくるよりも先に私が行き倒れになりそうだ。

「疲れた……ちょっと休もう」

そこは公園のように池があり、ほとりにはベンチも置いてある。
私はぐったりと腰を下ろし、誰も見ていないので横にならせてもらった。

（私、このままタイムリミットを迎えるのかしら？それも独りで？）

また情けない気持ちに滲みだして、目尻が濡れてゆく。

曇りと鉛色の空を鳥達が騒ぎながら渡って行き、涙が耳へと注がれてくすぐったい。

私はもう全てが嫌になってしまった。

「太陽のバカヤロー！こうなったのもアンタのせいよ。一体どこまで引つ掻き回せば気が済むのよ。アタシの幸せを返せーっ！
！！」

誰はばかる事なく、駄々をこねる子供のように私は声を張り上げ大泣きした。

人生も愛も幕切れの時が近づいていると思うと、すましてなんか
いられない。

人は死ぬ前になると子供に帰るといふのは本当なのだと、ふと思った。

「茉莉沙、茉莉沙なのか？！」

すぐ近くで響いた声に驚き、慌てて上体を起こした目の前には、紛れもない太陽が立っている。

「もう、どこにいたのよ！日本から走ってきて心配でアッパラパになりそうだったわ！どうしてくれるの、もう死にそうよ」
混乱してるのか、言葉が支離滅裂で自分でも何を言ってるか理解できない。

しかし太陽は気が狂いそうな程の想いを分かったらしく、興奮した私を強く抱きしめてくれた。

「ごめんよ、本当にすまない。君にこんな辛い想いをさせて……」
太陽の温もりを肌で感じると、昂ぶっていた神経は火に水を浴びせるように鎮まっていく。

現金にもいつもの私が何事も無かったように顔を出していた。

「とにかく会えて良かったわ。さあ帰りましょう」

「帰るって、僕が今ここから出られないのは知ってるだろう？」

「出られないなら、脱走するまでの事よ」

「……………本気で言ってるのか？」

「あら大真面目よ。こんな所で見殺しにされるなんて冗談じゃないわ！さあもう時間がないのよ、早く行きましょう！」

さっきまでの投げ遣りな私はすっかりどこかへ消えてしまい、太陽の腕を引っ張り走り出す、自分も知らなかったジャンヌ・ダルクか女スパイのような私がいた。

「待て、そっちは人が多い。こっちから回ろう」

正面ゲートと裏ゲートの間に、殆どひと気がなくて森に近く、高い壁も無く脱出しやすい場所があると太陽は言う。

今日中にこのWASAを出てすぐに飛行機に飛び乗らないと大変な事になる――

チャンスは一度だけ、失敗は絶対許されない。

見つければ銃殺されるだろうし、もたもたしていると彗星とともにお陀仏になってしまう。

私達は破裂しそうな心臓を押さえながら脱出ポイントへと急いだ。
「あつ、あれがそうかしら?! 見えてきたわ!」

高い塀が途切れ、鉄条網の向こうに木が茂っているのが見える。
あれなら私でも越えられる筈だ。

あれさえ越えれば私達は日本へ帰って生き延びられる。相当走ったから苦しいけれど、もう少し、あと少しだ――
しかし……………

『その二人、止まりなさい!』

「しまった、見つかったか?!」

なんて事だろう!

もうすぐそこで出られるというのに、無情にも私達の企ては発覚してしまった。

「茉莉沙、このまま突っ切るぞ!」

「分かったわ!」

金網に辿り着くなり、私達は猿の如く登り始めた。
すると……………

ダダダダダダダ!

機関銃が打ち放たれ、その辺りの草に石に、ピシピシ当たりまくって私達の寿命を脅かしている。

「クソッ! 何しやがる。ふざけやがって!」

もうあとになど引けない。

さつさとフェンスを越えて素早く塀の陰に隠れないと、彗星が頭に堕ちてくる前に蜂の巣になりそうだ。

ダダダダダダダ!

「茉莉沙、つかまれ!」

フェンスの上に着いた太陽は私の手をとって引き上げた。

「飛び降りるぞ!」

恐いなんて言っていられない。

火事場の馬鹿力の言葉通り、私は太陽とともに3メートル程の高さを一気に飛び降りて、信じられ ない素早さで塀の陰に隠れた。

時間にして数秒も無かったが、私にはとんでもなく長い時間に感じられた。

「はあ……………なんとか助かった……………」

「安心するのはまだ早い、一刻も早くここを離れたほうがいい。この森を抜けると道路に出る筈だ、そこで車でも拾おう。さあ急ぐぞ」

「ええ」

森の中に入る前に、どうやら弾丸のつぶてが治まったらしいWASAの建物をふと振り返って見てみると、空に乳白色の光るものが浮かんでるのが見えた。

「ねえ、あれ何？」

「え？……………っ！そんな馬鹿な！！」

太陽の顔から色が無くなってゆくのが分かる。

それを見た私の胸にも激しい脅威が生まれ始めた。

あの光は、もしかして……………

「あり得ない！彗星は軌道を変えるばかりか、加速度をつけて向かっているぞ！！」

「どうしてよ！彗星が近づくのは明日の夜じゃなかったの？！」

「詳しい事は分らんが、あれはまるで生き物だ。この国めがけてスピードを上げている。このままだと間もなく堕ちてくるぞ！！」

これは本当に現実なのだろうか？

昔、ノストラダムスが言ったように、今夜が恐怖の魔王が空から降ってくる日なのか？

私にはもう分からなくなってきた。

もしこれが悪い夢ではなく現実の世界の出来事なら、私は太陽の身をなんとしても守らなければとそれだけが頭の中を駆け巡っていたのだ。

「あ、見て。光がだんだん大きく、強くなるわ！」

光の塊は眩しさを増して、そして空一面が星よりも月よりも、一瞬明るく輝きをはなった。

（もうだめだわ！逃げて同じ。神様どうぞ私達をお救い下さい！！！！）

私は太陽を力一杯抱きしめ、何が起きても離れないようにしがみついた。

カタストロフィの訪れに引き裂かれぬように。

「あなた、愛してる。どうなろうと愛してるわ！！！」

ゴゴオオオオオオ！！

轟音が響くなか、気流が狂ったように渦を巻き始めるのを感じる。私達の周りを突風が目にも止まらぬ速さで取り巻いて、体が重力から解き放たれ、宙を漂う感じがする。

そのうちどこから発せられたのか、眩しい光が自分たちの体を包みこんでゆく。

（この感じ……前にどこかで見たことあるような……）

風と光。

それらはますます激しく取り巻いて、私達はもうどこにいるかさえわからなくなってきた。

意識はだんだん朦朧として、心地よい眠りに包まれてゆくような感じがする。

もはや現世に別れを告げるときが来たのかと意識の隅でそう思っていた。

太陽よ、せめて私から離れないで。最期まで側にいて――

私達は、右も左も前も後ろも真っ白な世界に放り出されたようだ。そのあとは、もう何もわからなくなってしまった。

く 第二部へつづく

第二部 第一章（前書き）

第一部あらすじ

宇宙を縦横無尽に駆け巡る鉄道“コスモ・エクスプレス”の創立千周年イベントに出席するため、フレードとデйм父子は遙か遠い星“ロワンドテリヤ”から地球へ向けて旅立った。

退屈しのぎにと渡された一冊の本に、デймはそこに綴られた千年前の祖先たちに想いを馳せる。

主人公である著者の茉莉沙は、同級生の太陽に恋するが、太陽は同じく同級生のもな美と恋人同士になってしまう。

叶わなかった悲恋を胸に秘め、茉莉沙はピアノの道へと進み、思いがけず留学先で認められピアニストとして成功する事に。

そしてもな美もバレリーナに、太陽も宇宙飛行士にと三人はそれぞれ夢を叶えてゆく。

ある日どうしても太陽に逢いたくなって、茉莉沙は太陽に自分の想いを告げた。

すると太陽の唇も、茉莉沙を好きだと呟く。

ずっと抱いていた想いが通じたと喜んだのも束の間、急に外国から帰国したもな美が

偶然太陽から茉莉沙へのプロポーズを目撃してしまい、もな美はショックのあまり湖へと身を投げてしまった。

「夢を失った、私はもう踊れない」もな美の残した言葉が胸に刺さり、茉莉沙は太陽から離れていってしまう。

しかし、周りや太陽本人の説得に心を改め、二人はついに結婚へと踏み切れた。

アメリカへ移住し、二人の子供も設け満ち足りた暮らしを満悦していたが、ある日太陽から信じられない事実を聞かされる。

「エルディック彗星が、地球に向けて墜落！アメリカを直撃——」

避難のため茉莉沙は子供を連れて日本へ帰国するが、太陽が宇宙開発局“WASA”に監禁同然に閉じ込められた為に避難できないと聞き、半狂乱で再び単身渡米する。

WASAの敷地に入り込み太陽に再び逢えた茉莉沙は、太陽とともに脱走した。

しかしその時、まだ来ない筈のエルディック彗星が二人のもとへ…

……

一方、トロピカル・プラネットという惑星に途中下車したフレード父子。

停車駅で待っていたのは、今は亡き妻カメリアに生き写しの女だった――

第二部 第一章

登場人物

モナミ・グレイス・デ・ヤポナリーア ヤポーナ公国王
子の内親王

夏沢太陽 妻の茉莉沙とともに、彗星墜落の窮地に
フレード・ナツザワ 旅の途中、妻に瓜二つの女性に出
逢う

ディム・ナツザワ 父ディムの動揺をよそに、マイペー
スな自由奔放人

セバスチャン ヤポーナの王宮に仕える執事長

クロディーネ・パデュウ カメリアにそっくりなトロピ
カル・プラネットの女性

夏沢茉莉沙 太陽とふたり、摩訶不思議な体験を……

*この物語はフィクションであり、登場人物や団体・建物・一部の
天体などは架空のものであります。また文中に不適切な表現がある
かも知れませんが、登場人物の心情やストーリーを盛り上げる為で
すのでご了承下さい。

第二部 第一章

小休止

翠子「はあゝ」

ジル「どうなさったの？翠子さん、溜息などついて」

翠子「茉莉沙と太陽、一体どうなってしまう事でしょう？二人はこのまま落下した彗星の犠牲になるのでしょうか？」

ジル「アラ、主人公が死んでしまえば物語はそれで済みですわ。作者がそう簡単に殺してしまうとも思えません事よ。だいいちこれから第二部が始まるというのに主役がいなくなるなんてあり得ませんわ」

翠子「エッ？！この物語の主人公って、フレードとデймじゃありませんでしたの？」

ジル「アナタ、事務所から“今回はテキトーでいいから”って言われてるか知りませんが、台本ぐらいちゃんと目を通さないといくら脇役だからって手抜きはいけませんわ！」

翠子「ごめんなさい。でも私最近とっても忙しくって……」

ジル「そりやあなたは次回作の主役が決まってるから宜しいでしょう、でも私はこのあと脇役なのよ！」

スタッフ「ジルさん、もうすぐトリ入ります。スタンバイよろしく」

ジル「はい！さ、メイク直ししなければ。ああおいしいお茶だったわ。それでは私失礼致します。ご免あさぐせ」

翠子「……あーうるさかった。よくお喋りになる方ですこと。

それにメイク直しだなんて、あそこまで厚塗りですと簡単には直せませんことよ。あ、コホン……さて、エルディック彗星が堕ちて来て絶体絶命の窮地に立たされた茉莉沙と太陽は、このあと不思議な運命を辿る事になります。そして“トロピカル・プラネット”に降り立ったフレードとデймの前に現れた謎の女性……こちらのお話も目が離せません。第二部は物語が佳境へと入っていき、さらに盛り上がりますが、主人公が……アレ？違う？……という風になるかも知れませんが、そちらも合わせてお楽しみ下さい。では“星の漣のむこうには・第二部”本編の前にまずはこちらからどうぞ」

監督「カット！良かったよー翠子ちゃん。ありがとう、お疲れ様」

翠子「ありがとうございました」

マネージャー「翠子、次の現場急ぐわよ。ケツカッチンだからね」
翠子「あ、ジャーマネー！コータバある？一本ちょうだい。アタシちよっとプクイチしてくから先に車まわしといて。それから、こないだのコマ撮り最低だったからやってらんないって社長によく言っとくのよ！」

いざなう謎の女

「どうされました？私の顔に何かついてます？」

「あ……いえ、何でもありません」

フレードもデймも、狐につままれたように開いた口が塞がらなかった。

死んでしまった筈のカメラアが蘇えってそこに立っているのかと思った。

ひよつとしたら幽霊なのかも知れないとさえ思ったほど、その女性性はカメラアに生き写しなのだ。

これは単なる偶然か、それとも運命の悪戯なのだろうか？

「ところで、お宿はもうお決まりですか？」

「あ、いいえ。まだ」

「それでしたら、私の勤めてるホテルはいかがでしょう？大した所ではありませんが、お部屋はオーシャンビューの眺めが好評ですし、美味しい海鮮料理もご用意できますのよ」

「そうですか。ではお世話になろうかな」

「まあ、ありがとうございます！ではお疲れでしょうから、すぐにお寛ぎ頂けるようご案内致しますわ。ステーション前に送迎バスが停まっておりますのでどうぞお乗り下さい」

「はい、どうも」

何だかこの女のペースに乗せられている気もするが、断る事もあ

るまいと二人は勧められるままバスに乗り込んだ。

一步建物の外へ出れば痛いほどの陽射しが照りつけているが、程よい冷房のきいた車内はとても快適で、ホッと一息つきながら風光明媚な景色の中を滑って行くと、リゾート気分は盛り上がり二人の顔にはいつしか笑顔が戻っていた。

「ああきれいだ。一点の曇りも無い青い空、エメラルドの輝きの珊瑚の海、情熱色に萌える熱帯の花。ここは別世界だな」

「これより断崖沿いの上り坂に入ります。しばらくカーブが続きますので、ご気分が悪いようでしたらすぐにお知らせ下さい」

車窓の景色はさらに見晴らしが良くなり、七色に変化する素晴らしい海を自分達の為に用意されたものの様に二人は楽しんだ。言葉も持たず感嘆していたフレードは、若き日にカメラと遊んだ海辺を再び想い出していた。

『フフフフ、アハハハ……フレード、待ってえー』

『はやくおいでよカメラアー。もたもたしていると流されちゃうぞ』

「」

『もう、意地悪ネ。おぼえてらっしゃーい!』

『ハハハハハハ……』

「パパ、パパあ。ホラ着いたよ」

「……ハッ!」

バスはいつの間にかホテルの前に来ていた。

「お疲れ様でございました。どうぞお忘れ物ないようお降り下さい」

フレードは不思議な感覚に捕らわれている。

目の前の女を見ると、今しがたまで回想の中にいたカメラアが抜け出てきた気がしてならない。

それとも自分が想い出に閉じ込められて、出口も無く彷徨い続けているのかと少し混乱に陥っている。

「さ、どうぞ。こちらでございます……」

そんなフレードを惑わせるように、女は愛しい妻に瓜二つな微笑みを投げかけている。

まるで拉致

リー……リー……リー……

（虫の声が聞こえる……私達、助かったのかしら？）

気がつくと、私は太陽と折り重なって森の中で倒れていたようだ。彗星が堕ちてきた割には、何事もなかったように辺りは穏やかに静まり返っている……

おかしい、不気味なほど静かだ。

私達だけが助かって他の人々は皆滅んでしまったのだろうか？
いささかの不安が胸を突いて、私は堪らずに側に倒れている太陽を揺り起こした。

「あなた、あなた！大丈夫？」

「ん……茉莉沙……無事なのか？僕達は助かったのか？」

「ええ、そのようだわ。でも何だか不思議なの。森が破壊された訳でもないし、いつものように穏やかなのよ。とても天変地異が起きたとは思えないわ」

「そうだな、彗星が陸地に堕ちたら無事に済む筈がない。やはり海にそれたか、ぎりぎりのところで免れて堕ちて来なかったのかのどちらかだろう。取りあえずWASAに戻って確かめてみよう」

二人ともかすり傷ひとつ負っている訳でもなさそうなので、立ち上がって歩くのは容易だった。

私達はもと来た方へ戻ろうと思ったが、生きるだの死ぬだの大騒ぎの後なので方向が分からなくなってしまうていた。

「ねえ、どっちだったかしら？」

「うーん、光がうつすら差してるあっちが森の端だな。深い所まで来ていないから出口はすぐそこだよ」

その光の差ししてくるほうへ行ってみると、すぐに森から抜け出せた。

しかし、何かが違うと私達にはすぐに感知できたのだ。

「……おかしい。WASAがすぐ側にある筈なのに、それらしい建物はどこにもない。違う方向に出たとしてもこの辺りはこんな地形になつてない筈なのだが……」

私達がいた森は何故か高台にあつて、ふもとのずっと向こうに街があるのが窺える。

だがWASAの周りは森を含めて平地になつている。こんな丘はこのあたりには無い筈なのだ。

「彗星が堕ちた衝撃で、地形が変わつたのかも知れない。街は無事なのかどうか調べに行つてみよう」

私と太陽は丘を下つて、街へ続く道沿いに歩いていった。心なしか景色が見慣れないものに見えて仕方がない。

（知らない場所を歩いているみたい。これも彗星が堕ちたせいなのかしら？）

草も木もこの世のものではないのが生えているようで、何だか様子が違う野原の道を私達はトボトボと歩いていた。

暫くすると、向こう側より車が数台走つて来るのが見えてきた。通行の邪魔をしないよう道路の端に寄ると、思いもかけずすれ違いざまに車の群れは停まつて、降りてきた人達が話しかけてきたのだ。

「あの、突然で失礼ですが、あなた方は向こうの山の方から来られたのではありませんか？」

仮装行列でもしているみたいにマントを羽織り、少々奇妙ないで
たちの男達の中の一 番年配の男が尋ねた。

「ええ、そうですか……」

「左様でございますか。ではその男性のほうの貴方、失礼です
がお名前は太陽さんとおっしゃるのでは？」

「はい、その通りです。でもどうして僕の事を知っているのです
か？」

この見知らぬ男が何故彼の名前を知っているのだろうか？ひよつと
してWASAから逃げ出したりしたから追われてるのかと、私は急
に不安の影に怯えた。

太陽も怪訝な顔をして、何かを怪しんでいるようだ。

「やはりそうでしたか。実は貴方をお迎えに上がりました。皇太
子妃殿下が貴方をお待ちでございます。さあ、車にお乗りになって
宮殿までお越し下さい」

お迎え？妃殿下？お待ち？

……頭の中で繰り返して整理しようとしても、何が何やらさっ
ぱり糸が纏れたままで、私も太陽も混乱の迷宮へとはまっていった。

「ああ、その女性も何のことか分からないからいいでしょう。

ま、事情を知って頂く為取り敢えず一緒について来て下さい」

（は？！……ムカツ！何なの）

何て言い草なんだろう！私はついでおまけなのか。

しかしこのままだと訳が分からず気持ちが悪いので、ここは大人
しく言うとおりにしたほうが良さそうだ。

私達を乗せるや否や車はいきなり胃のあたりに重力の負荷がかか
る程スピードを上げ始めたので、私は少し心配になってきた。

「あのー、そんなに急がなくてもいいんじゃないやありません？この道
路、どう見たってハイウェイじゃないでしょう？警察が見てたらス
ピード違反になりますよ。それにもし事故にでもなったら……」

「貴女は黙っているように！これだから女は嫌だ。連れて来るん
じゃなかったかな」

（カッチーン！何よ！！）

この得体の知れない奴らの態度に憤りを覚えつつも、太陽が手荒に扱われないよう出かかった言葉も呑み込んで、喧嘩を売る真似は控える事にした。

「スピード違反なら心配いりませんよ。この速度ならこの辺りでは制限内だ」

（いくら街外れの田舎道だからといって、何マイルで走ってんのよ。こんなにスピードを出していい法は無いでしょ！）

口の中でブツブツ呟いていたら、そのうち段々と市街地へとさしかかってきた。

流石に街に入ると速度は落ちてきたようで、私は少しホッと胸をなで下ろした。

街は思いのほか大都会のようで、幾つもの高層ビルと摩天楼の林を縫って走るモノレールが窓の外を流れていった。

（こんな大きな街が近くにあったかしら？）

私達が暮らしていたのはアメリカ力の片田舎の地域なので、車ですぐの所に都会があるのはとても不思議な感じがしてならない。

やがて辺りには庭園が広がり始め、フロントガラスの向こうに白くて巨大な建物が見えてきた。ギリシャ神殿のような大きな柱がエントランスに控えていて、私は一瞬ホワイトハウスまで来たのかと思ってしまった。

「さあ着きました、どうぞ」

車を降りた私達は度胆を抜かれた。

何段あるか分からない広い大きな階段の上にドーンと聳え立つ迫力満点の巨城――

すっかり圧倒されて、とんでもない所へ連れてこられた、出来れば踵を返してこのまま帰りたいと気後れしてしまった。

「どうぞお入り下さい。これから妃殿下のおわします王座の間へご案内しますが、固くならなくても結構です。お楽になさって下さ

い」

私達のような一般市民が王族のお方に謁見するというのに、誰が緊張せずにいられるものか。

大体さつきから気になっていたが、アメリカは君主国家ではないから何処の国の妃殿下がいるんだという話だ。

しかも何処ぞのお妃が太陽の知り合いだとは聞いた事などない。どうにも腑に落ちなくて早く真相をはっきりさせたいと、迷路のように延々と続く廊下を歩きながら私はあれこれ考えていた。

「こちらが王座の間でございます。妃殿下にお会いになったら、くれぐれも失礼の無いようお願い致します」

ギギギイ…………

王座の間の大きく重厚な扉は開かれた。お偉い方に会うこの瞬間、流石に心臓がキュツと縮む思いがしてしまう。

私は目を閉じ胸を押さえ、ステージに立つ時のように息を整え、頭の中を透明にしようと努めた。

(……………あっ!!！)

眼を見開いた私は呼吸が乱れ始め、もう少しではしたなく大声を上げてしまうところだった。

「ようこそいらつしゃいました。さあ、もう少しこちらへ…………」

玉座の美しいプリンセスは私達に微笑んで手招きをしているが、その微笑は雪の女王の吐息にも似て私達をツンドラの大地のように凍りつかせ、体の震えが止まらなくなってしまうたのだ。

浮気な恋の惑星

「恐れ入りますが、こちらにお名前とご住所を惑星名からお願い

致します」

フロントクロックで宿泊記帳用の小型キーボード端末を差し出され、フレードは美しい音楽でも奏でるような鮮やかな手さばきで入力した。

フレード・ナツザワ Age 48

Planet ロワンドテリヤ

Addles エダンプル国 ヤポーナシティ リブラリ

区3番アヴェニュー5-486

デйм・ナツザワ Age 18

同上

「まあ！貴方はあのコスモ・エクスプレスの会長さんですのね。存じ上げないとはいえ失礼を致しました。こんなむさ苦しい所までようこそお越し下さいましたわ」

「いえいえ、なかなか雰囲気のあるホテルですね。私は好きですよ」

吹き抜けの天窓には雲がゆつくりと流れていて、各フロアにある木のフェンスは優美な模様を織りなしている。

ゴムの木・アイビー・ドラセナ・フェニックス椰子・極楽鳥花などが茂り、ヴィヴィッドカラーの鳥たち歌う熱帯コロニアルの時間がゆつくりそこに流れているようだ。

「大変申し遅れましたが、私はクロディーネ・パデュウと申します。父は当ホテルの社長をしておりますが、私は勉強のためあらゆるサービスの仕事を任されておりますの。これもご縁ですから、宜しければご滞在のあいだ私がお世話をさせていただきますわ」

カメラリアによく似た謎の美女の正体がようやく分かった。

クロディーネというこの女性が自分達のサービス係を買って出るなんて、天界へ旅立った妻が本当に還ってきたようで、フレードは何か因縁めいたものを感じていた。

「ところでお部屋でございますが、勿論最上階のインペリアルスイートを用意して存じます。幾つかムードの違うものがございすがどちらがお好みでしょうか？」

クロディーネがカウンターに触れると、部屋の様子が分かる画像がそこに映し出された。

オーソドックスな雰囲気、大人が一杯飲むような雰囲気、このロビーと同じく熱帯的な雰囲気、華やかな白の洋館風、お伽話の世界の家みtainな部屋、宇宙空間にいるような不思議なムード……あらゆるコンセプトの部屋があつて、ワクワクする迷いへと陥ってしまう。

「あ、これがいいかも」

デームがふと選んだのは畳の敷かれたジャパネスクモダンの部屋で、遠い祖先の遺伝子が呼んでいるかの如く直感に響いたようだ。

「うん、落ち着けそうでいいな。じゃあこの部屋をお願いします」

「ハイ、かしこまりました。ではご案内致します」

クロディーネはベルボーイを連れて荷物を持ち、フレード達を先導した。

ベルボーイはトピーほど端正な顔立ちではないが南国の魅惑を秘めていて、デームの浮気なハートがまた躍り出していた。

「この“特製シースルーエレベーター”で参りましょう。ではどうぞ」

乗り込んだエレベーターは枠組みまですべてクリスタルでできていそうな程透明感が抜群で、動き出せば体がフワリと宙に浮いていると錯覚してしまうものだった。

「ウワゝすごい！スリル満点。ちょっとコワイけどイイかも」

小さな密林に似た植え込みがどんどん下へさがって、自分達が飛行人間になった感じがする。

「いかがですか？いい眺めでしょう。高所恐怖症の方には評判よろしくございませんけど」

人なつこく笑うベルボーイの浅黒い肌に白い歯がきらめいて、デ

イムはトピーをすっかり忘れてしまい、心拍数は鰻上りでこのまま眩暈で倒れるかと思ってしまった。

チン♪

ドアが開いて束の間の飛行は幕を閉じた。

木製フェンスの廊下から吹き抜けのロビーが望めて、仰いでみると一面の天窓には青い空――

開放感溢れるこのホテルをフレードとディムはすっかり気に入ってしまった。

しかしその中で、何やら恋の花らしきものがひっそりと咲き始めているようだ。

前に行くフレードとクロディーネ、後を歩くディムとベルボーイはいつの間にか並んで、お互い何となくシンパシーを感じていたのだ。

「まあそうですね、今年はコスモエクスプレスの千年記念ですね。地球ってどんな星なんでしょう、私も一度行ってみたいものですわ」

「美しい星ですよ。自然が豊かで、ここにも引けを取らない位にね。瓦礫だらけの廃墟と化した星も多い中で、貴重な存在です。貴女が忙しければ是非一緒に過ごしたいところだ」

「ほんと、私もそうしたいと思いますわ……」

知らない人が見れば、この二人はきつと同じ釜の飯を食う程親密な仲に見えるかも知れない。

「お兄さん、この辺でもしろいトコロってどこですか？」

「そうですね……泳ぐならマデラスビーチ、このホテルからすぐです。女神の水浴び場とも言われていて、遠浅の海は透明度が素晴らしい、金色珊瑚の生息海域なので天気がいいと海が光って見えるんですよ。あとポストラフビーチは砂を踏みしめると豎琴を弾いたような音がして、時々ハート型の砂があるので新婚カップルには人気のビーチです」

「へえ、ステキだなあ」

「もちろん夜遊びたいなら、ちよつと足を伸ばせばマイワウの街ですと何でもあります。この星ではお客様の年齢なら大抵のお店は入れますからご安心を」

「でもよくわからないからお兄さんがもしおヒマなら案内してもらえたらウレシイな」

出た！デймのお願い光線が。この男もトピーのように哀れ餌食とされてしまうのか。

「はははっ、僕のようなむさ苦しい奴よりきれいな人がいいでしょう？」

「いいえ、どこに行っても楽しそうだからお兄さんがいいんです！」

「そうですか、じゃあ弟ができたつもりで羽目を外すのも悪くないですね。結構です、体が空いているとき一緒にしましょう」

恐るべしデймの技！

どうすればナンパが成功するのか学びたいくらいだ。やはり美少年は何かにつけて得をするのか。

「さあ、こちらでございます。このお部屋は入ってすぐにお履物を脱いでリラックスして頂くようになっております。地球のニッポンという国にある“リヨカン”というホテル形式を真似たもののよ。どうぞ、お入りください」

「おお……」

フレードとデймは今迄体験した事のない異空間に驚いたが、初めてだけれどどこかノスタルジーを感じていた。

ドアの中は灯籠の暖かい光が照る小さな庭があり、敷き詰めた玉砂利の中の飛び石を渡って、格子戸を開けたら玄関になっている。

靴を脱いで上がると馨しい畳の香りが胸を洗ってくれるようだ。

大振りの飾り扇に床の間の豪華な生け花、簾をめくってテラスに出てみると風鈴が潮風に歌い、露天風呂まであるではないか。一面の大海原を眺めて湯に浸れるとは、想像以上に贅沢な空間にフレードもデймも大名気分だ。

「さあ、お茶が入りましたわ。どうぞお寛ぎになって……」

「ねえパパ、なんかこのお茶緑色だよ」

「ん、少し苦味があるが香りがいい。さすがデームだ、ご先祖の文化に無意識に惹かれたんだな」

「お気に召して頂いたようで恭悦至極に存じます。改めまして、当ホテルへようこそおいでくださいました。私クロディーネはじめ従業員一同心尽くしのおもてなしを致しますので宜しくお願い申し上げます。何かご用の際はお気軽にお申しつけ下さいませ。あとお夕食でございますが、夕刻の6時はいかがでしょう？」

「ああ、それでお願います」

「かしこまりました。では6時にこちらのお部屋にご用意致します。それまではお部屋でお寛ぎになるのもよし、ビーチに出たり市内観光もよし、ですわ。では私共はお食事の時にまた参ります。どうぞごゆっくり、失礼致します……」

「どうもお世話様」

「お兄さん、またネ」

クロディーネとベルボーイが下がって、二人はハアーッと溜息をついた。

たまたま降り立った惑星でこんな気持ちになるとは夢にも思わなかったからである。

しかしこのトロピカル・プラネット、実は“恋のアイランド”と呼ばれる程、恋愛発生率が宇宙でNo.1の惑星なのだ。行きずりの恋に、今も惑星の至る所で泣き笑いが繰り返されている事だろう。

ここにも恋の予感に内心打ち震える二人がいた。

「何だ、さつきから笑ってるけど変だぞ。何かおもしろい事でもあったか？」

「パパだつてニタニタしてるヨ。思い出し笑い？キモチ悪い」
お互い緩みっぱなしの口許を晒うとは目糞鼻糞で、なんて滑稽なのだろう。

よみがえるあの日々

「パ、パトラちゃん?!」

につこり微笑むお妃様、そう、彼女はやはり死んでなどいなかったのだ!

私の胸には今迄の出来事が走馬灯のように回り始めた。

『科学の本で見たケド、将来宇宙ステーションなんか出来て、宇宙旅行も気軽に行けるようになるんだってね』

『ソウソウ、他の星に植民地つくって地球から人が移住する事もできるんだッテ』

『じゃあ、そうなったら3人でちがう星へ行こうよ』

『そうだね、行こう!この3人で』

幼い太陽と私ともな美。満天の星空の下で他愛も無い約束をしたものだ。

『さあ、貴女の番よ。緊張するのは始めだけ、弾いていると楽しくなるわ。行つてらっしゃい』

そのあとのピアノ発表会で、具合が悪い程緊張した私に勇気を与えたのは太陽だった。

《茉莉沙がなばれ、ここで見てるからな》

《ウン、ありがとう太陽くん。私精一杯やるわ》

お互い頷きあいステージと客席で言葉の無い会話を交わして、それまで淡雪みたいな想いをそのときはっきりと自覚した。

“太陽が好き”だと――

『た……………』

『太陽クーン！良かったーっ今日会えなかったらどうしようかと思っちゃった。はいコレ、プレゼントよー』

プラタナスの木の陰で震えながら見ていたヴァレンタイン・ディ。太陽に渡されたのはよりによってもな美のチョコレートなのがショックで、日の目を見る事がなかった私のチョコレート。

『今度ねえ、なんとおデートなのお。“もな美、好きだよ”なんて言われたらどうしょ』

耳を塞ぎたいお惚気に嫉妬を通り越して呆れながら、私はその後もピアノに打ち込み続けた。その甲斐あって、ヨーロッパ留学も決まったのだ。

『二人とも元気だね。また逢いましょう三人で』

『ええ、きつと』

寄り添って見送る太陽ともな美に胸を痛め、振り切るように私は飛行機に乗り込んだ。

留学先で認められて一躍ピアニストとなったが、太陽も夢叶い宇宙へ飛び出したのを知ると、無性に逢いたくて再び日本へ舞い戻ったのだ。

『お久しぶり、元気そうね。すっかり見違えたわ』

『君こそずいぶん立派になって』

再会を祝うお店でワインを沢山飲まなければ、私の運命は違っていたかも知れない。

『星の話をするタイヨークンってス・テ・キ。ワラシホントのコト言うともカシからアナタのコトダーーーーーイスキなの。ずっとずとずーっと片想いなヨ』

『そう、僕も宇宙に行って気がついた……僕が本当に好きなのは、茉莉沙……君だったんだよ』

思いがけない言葉に、そのときもな美は大変な事になっているの

も知らず舞い上がっていた。誘われるままに出かけた北の湖で、私はまたも驚いたのだ。

『茉莉沙、結婚しよう』

『……………！』

驚いたのは、私だけではなかった。

『もな美！』

『パトラちゃん待つてえー！お願い話を聞いて』

『来ないで！…………私の足はもう踊りには堪えられないのよ…………骨
肉腫と診断されたの。このままだと足を切断よ…………アハハハハ！
…………ねえ、さっき言った言葉、あれ嘘でしょう？冗談よね？ねえ、
そう言つてよ…………』

『さっき言つたのは本当だ。僕は茉莉沙にプロポーズしたんだ』

そしてもな美は湖へ向かつて跳んでしまったが、その後どんなに
搜索しても彼女は見つからず、その行方は長い間霧の中へ姿を眩ま
したままでいた。

しかし今こうして元気そうに生きているの見て私は嬉しくなつて
きた。

万一もな美が死んでいたら私のせいだと自責していたが、胸の奥
に食い込んだ重い十字架が、いま取り外される思いがする。

「お久しぶりですわね。昔あなた方の前で随分醜態を晒してしま
いましたけど、私はこうして元気に、そして立派に立ち直っていま
す。さあ、そんな所に立つていないでもう少しこちらへいらしたら
？」

もともとお嬢様のもな美はどこなく気品というものが漂ってい
たが、更に気高く凜としていて、私などとは月と鼈で、何だか近づ
くのも憚られる気がする。

私達はためらいがちに、ドレスの小さな飾り模様まで分かる距離
まで行くと、彼女は更に磨きがかけられていて、白い大輪の花が強
い芳香を放っているかのようだ。

「ところで、あなた方は恐らくまだ訳が分からない事でしょう。私は全てを知っています。お話しようとは思いますが、長くなってしまうので一緒に午餐などいかが？ここに來てからまだ何も召し上がっていないでしょうから……これ、セバスチャン、セバスチャン！」

「失礼致します。モナミ様、お呼びでございましたか？」

現れたのは先程私達をこの城まで半強制的に連れて來た、悪い言葉で言うところの腸の煮えくり返るような糞爺いだ。

この手のタイプは上の者に対してコメツキバツタになる癖に、私達をゴミのように思っている。

そのたるんだ皮の下で何を考えているか分からない面は見てるだけで虫唾が走るので、思わずソッポを向いてしまった。

「私は今からこの方たちと食事を摂ります。ブランカの間ですぐ用意をさせるように。ではあなた達、参りましょう」

玉座から立ち歩くもな美を見て、私は不思議に思った。

確か足が良くない筈なのに、びっこも引かず優雅に歩を運んでいる。

そんな疑問を察したのか、もな美は振り返り笑った。

「もう踊れないとあれだけ大騒ぎだったのに、普通に歩いてるなんておかしいと思うでしょう？それもゆっくりお話しますわ」

ゾクッ。

一瞬肌に戦慄が駆けぬけてゆく。

顔は満面の笑みを湛えているのに、この人は笑っていない……

いいえ、楽しいとか面白いとかの感情とは全く別のものを仮面の裏に隠しているという方が正解かも知れない。

私はやがて知る正体不明の魔物の存在を感じて、真昼なのに肌寒さに身を縮ませていた。

信じられない話

「さ、とりあえず乾杯でもしましょう……………そうね、私達がまた三人揃って再会できた事に乾杯」

「乾杯」

私達はバルコニーのある白い部屋に通され、アペリティブを口にしてみた。

「……………美味しい」

芳醇な美酒は私が今迄飲んだ事の無い円やかさと薰り高さで、混乱と緊張と疲れをいっぺんに吹き飛ばして私を和やかな気持ちにさせてくれた。

「オードブルはルヴァンのサルトバマリーノでございます。どうぞ」

「これはルヴァンという植物の実をサルトバという調味料に漬け込んだものよ。ルヴァンは高山の荒涼とした岩場に生えていて、採れる量はとても少ない貴重なものの。味わってお召し上がり遊ばせ」

何だかよく分からないが、私達は今とんでもない贅沢をしているようだ。そのルヴァンとかいう黄色い物体を一口舌に転がせてみると…………

「……………ん！」

見た目によらずとても柔らかい。口の中でシュワ〜ツと溶けて気持ちまで蕩けそう。このようなものをいつも食べられるなんて、もな美が少し羨ましく思えた。

「いかが？この星の食べ物はお気に召して？あ、そうだったわ。あなた達はまだ知らないのね。では申し上げますけど、落ち着いて聞いてね」

さつきからもな美は変な事を言っているが、一体どういう意味なのだろう？

その口ぶりからは普通の事ではないと窺えるが何があるのか？私は何を聞いても驚かないように覚悟を決め、グラスのお酒をグツと

飲み干した。

「実は、幸か不幸か分からないけどあなた方は、もう地球にはいないのよ」

「え?!」

危うくもう少してテーブルのナイフフォークを派手にガシャン!とぶちまけてしまうところだった。もな美の言っている意味が、まだ私にはよく理解できない。

「ここは、ロワンドテériaという地球からそれはそれは遠いところにある星です。まあ俄かには信じられないでしょうね。私もそうだったもの」

「そんな遠くの星に一瞬でテレポーションしたのか?!馬鹿な、あり得ない!」

「それが起きてしまったのよ。この星の科学者から聞いたけど、時空にはたまに歪みというのが発生するんですって。で、それだけなら何事も無いけれど、そこに何かの弾みで強い力が加わると、歪みのはじけて人が亜空間というところへ巻き込まれてしまうんだそうよ」

「そんな、オカルト映画じゃあるまいし。じゃあナニか?異次元の亜空間を通って普通では行けないような宇宙の彼方の星へ来てしまったというのか?」

「難しい事はよく解らないけど、科学者の人は理論上起こり得ない奇跡を、人は時々起こす事があるって言っていたわ。亜空間に入った人はごく限られた人たちで選ばれた人と言えるそうよ。昔から行方知れずになってしまった人を“神隠しに遭った”というでしょう?この星はその、地球で“神隠しに遭った”と言われる“選ばれた人たち”が暮らしているの。だからここロワンドテériaは…あ、因みにロワンドテériaの言葉の意味は“遠く離れた地球”というのよ。ロワンドテériaでは、科学も医学も地球より数段すぐれたものとなっているわ。私が湖で消えてしまう前にあなた達に言ったでしょう?」

『私の足は、もう踊りには堪えられないのよ……骨肉腫と診断されたの。このままでは足を切断よ!』

「もう先程ご覧になったわね。今はこの通り自由に歩けるし、踊りだつてできるわ」

もな美は席を立つとクルリと回つて足を上げたり、腰を落としてのけぞったりして昔と変わらない優美なパ・デュンヌを演じてみせた。

湖で見た、もう踊れないバレリーナの悲愴さはどこにも漂つてはいない。

「ふう、流石にこの服と靴じゃ踊りづらいわね。あ、グリサンドをもう一杯頂戴、この方たちにもね……でもこれでよく分かったでしょう? もう絶望的だったこの足がすっかり良くなったのよ! 地球上では不治の病といわれる病気だつてここでは回復が可能になっているわ。素晴らしいでしょう?」

踊ったあとシタリ顔でグリサンドルという酒で喉を潤しているもな美と、白鳥に変えられたオデット姫より悲惨だった湖畔のバレリーナはまるで別人だ。

お酒が効いてきているのかも知れない。もな美の話も踊りも、白^{ドリーム}日夢の中のクルクル変化を魅せる万華鏡の世界にしか思えない私なのだ。

「ところで貴女、私の事こんな高尚な身分になれて随分幸せなオンナだと思いでしょ」

その瞳の奥深く、水面下に氷の海を隠している視線をまた私に向けてきた。突然矛先を振られて、ビクツと怯えた私はさっきのようにまたフォークを落としかけてしまった。

「今日までたどり着くのに、血の滲む思いをしてきたわ。人は誰も私の栄光を羨むでしょうけど、私の人生、決して甘くはなかったわ」

彼女の瞳には、ふたつの違うものが宿っているのが私には見えた。ひとつは荒れ狂う吹雪の冷たさ、もうひとつは燦ぶる炎。それらがやがて巨大なものとなって私を襲うのではないかと、穏やかではない予感に胸の中には戦慄が走っているのだった。

ちいさな胸の痛み

「私、小さい頃イギリスにいたのは知ってるでしょう？実はそのときイジメられたりしていたわ」

「え、そうだったの？！」

そんな事いま初めて耳にした。

てつきりもな美はどこでも人気者だったと思い込んでいたからいささか心外である。

「あの頃、本当に早く日本に帰りたいかった。父が海外で仕事をしていたのを恨めしく思ったりしたものだったわ……」

白いカーテンを揺らす風を見つめる眼が、遠い日々を追いかけて空の青さに染まっている。私にはきれいに映ったが、その奥に秘められているものを今ヴェールを解き放ち露わになろうとしているのが少し恐い気がする。

そんな私をよそに、もな美は遠い記憶を辿り始めてゆく。

『やーい、サルだー。サルが来たぞー、逃げろー』

『わたしサルじゃないもん！ヒドいわ、エーン……』

『モウ、男の子たちってしょうがないわネ。モナミちゃんだいじょうぶ？ホラ元気だして、さあ帰りましょう』

『ありがとう、わたしもうへいきよ……アッ！痛っ』

「……なぐさめてくれた女の子は靴を履き替えるときなんとなく笑ってたのを今でも憶えているわ。下履きの靴にいつの間にか画鋏

が仕込まれていたのよ。それだけじゃないわ。体操の授業のあと、私のノートに落書きがしてあったり破られていたり、鉛筆もよくなくなっていたの。或る時上履きの靴がいくら捜しても見つからなくて、あったのはゴミ箱の中だったわ。

ひどかったのは、鞆の中がランチの残飯でいっぱいになってたの！ ショックだった……けど一番信じられなかった事件はね、『遠足のお金がなくなつた！』って大騒ぎした子がいて、結局その子のカン違いだったけど私が盗んだ犯人に仕立て上げられたの。

一体私が何をしたっていうのかしら？ 今と違って当時は大人しかつたから、ついイジメたくなつたんでしょね」

私だって幼い頃は大人しい子だったけれど、そんな虐めには遭つてはいなかった。

やはり整つた顔立ちに艶やかな美しい髪、それに開花しはじめたバレエの才能が周りを羨望と嫉妬の渦に巻き込んだのだろうか。

私は平気だったけれど、彼女を取り巻く飛び抜けて輝いた非凡なオーラが子供の心のマグマを刺激したのだと思う。

「このままではいけないって事で、私は母と一緒に日本に帰つたの。肩の荷がスーッと下りたようで嬉しかったわ。そしてあなた達と邂逅であつたの。運命の逢い合ひってやつかしら？ ほんと、昨日の事のように鮮やかに思い出すわ……」

私も瞼の裏にシネマを見るように甦よみがってくる。

思えばあれは、私達三人の人生の千里の道の第一歩だったかも知れない。

そう、もな美との邂逅であが私達の数奇な紆余曲折の道を決定づけてしまつたのだ。

運命というものの性格がもう少し素直だったら、きっと私達三人は今頃ここにはいない筈だったのに――

夢と苦悩

『今日は皆さんに転校生を紹介します。一ノ原もな美さんです、皆さん仲良くして下さい』

『一ノ原もな美です。ワタシ外国にずっといたから早く日本に慣れて、クラスの人達とお友達になりたいです。よろしくお願いします』

『わー、お人形さんみたい』

『カワイー。タイプだなあ』

『はい、静かに。一ノ原さん、席は福本さんの隣に座ってね』

『福本サン、よろしくネ。いろいろ教えてちょうだい』

『あ、こ、こちらこそ……』

「…………あの時のあなた、男の子みたいに髪が短くて、確かデニムのオーバーオールか何か着てて、気取りの無い素直な人だって直感ですぐに分かったわ。」

“あ、この人なら絶対私の味方になってくれる——” ってね。案の定、あなた達は私と仲良くしてくれた。…………いつだったか三人で、星を観た事があったじゃない？冬だから寒かったけど、東京の空とは思えないほどスッキリ晴れわたって、ほんと奇跡みたいだった。あんなに星が沢山夜空に輝いてるなんて、それまで考えた事なかったの。うつむいてばかりだったから…………あの星空、今でも忘れないじいーつと見てると、深い深い夜の海が空全体に広がっているみたいに见えてきて、漣がキラキラ光っているようだったわ」

もな美の細めた遠い眼は、あの夜の星空を眺めているのだろう。私だって忘れられない。恐らく太陽も同じだと思う。

『いつか、三人で遠い星へ行きたいね』

『うん、ゼツタイ行こう！あの星へこの三人で』

子供同士の天真爛漫な約束……それがまさか、現実のものになってしまふなんて――

私は実感の持てないままにこのとんでもない奇跡に感謝しつつグリスンドルを揺らしながら、もな美の眼が急に蒼く翳り始めたのを見逃しはしなかった。

「日本に帰って、やっと安楽の日々が迎えられると思ったのも束の間だったわ。或る放課後、忘れ物に気づいて教室に引き返したときだったの」

『ねえねえ、パトラってどう思う？』

『アタシあんまし好きじゃないなア。だってお高く留まってそうジャン』

『でしょー！なんかムカつくのよねーアイツ。この間だってさア、家庭科の時間にエプロン持ってくるのうっかり忘れちゃったのよ。んで、同じ班のパトラが“アラ、エプロンなくてお困り？ワタシ汚れてもいいように余分に持ってきたから貸してあげるわ。ホラ、こちのカワイイほうがいいでしょ？アナタに似合うわよ”だって。アツツイフライパン顔に押しつけてやろうかと思ったわよ。あんな趣味の悪いエプロン誰が着けるかつーの。ムカついたからわざとシミつけといてやったわ』

『ワカル、ウザいよね。ほんとにあの顔ジューツとやってやればよかったのよ！あんなカワイイ顔しててもきつと腹中ドドメ色よ。ついでにアレもドドメ色だったりして。今度プールの着替えのとき見てやろうかしら。ホントにドドメ色なら笑っちゃう』（^^）』

『やだ〜キャハハハハ（^^）』

教室に残っていた女子の会話を偶然立ち聞きしてしまい、もな美は忘れ物どころかその日のバレエのレッスンも休んで、次の日も学校では席がひとつポツンと寂しそうに空いていた。

『パトラ今日はどうしたんだろっね？』

『さーあ？コドモでも墮ろしに行っただんじやないのオ？』

質の悪い冗談を言う奴がいるものだとその時はあまり気にも留めなかったが、言われてみればクラスの数人は確かもな美と口を利く事が少なかったように思う。

私が人間関係に無頓着な方だったから、裏でそんな事になっていたとはずっと後になった今初めて知らされたのだ。

私と太陽はそうとも知らず体調が優れないと信じて彼女を見舞ったが、私達に向けられた微笑は弱々しく蒼ざめ、元氣と自信が泉のように溢れていたもな美が別の少女に見えたのには驚いてしまった。暫くしてまた薔薇色の頬をして学校にやって来たいいつもと変わらないもな美を見て、私は元氣になったとひと安心だったが、その後にもな美は私に打ち明けた事があった。

『茉莉沙ちゃん、ワタシ中学は私立を受ける事にしたの。志望校はフューゲンドリツヒよ。ちょっと難しいといわれてるけど、ガンバレに入れるかも知れないと思うの。ううん、ゼツタイ入りたい！』

芸術全般の登竜門といわれるフューゲンドリツヒ学園は私も憧れていた。

けれど限りなく普通の私が通える学校ではないと半ば諦めかけていたが、もな美の天まで焦がしてしまいそうな熱情に背中を押されて私も一念発起を決めた。

一流の舞踏家を目指して、彼女はやがてウイニングロードへのパスポートを手にするが、進学の理由は夢への真っ直ぐな気持ちだけではない事を今はっきりと知らされたのだ。

「そうよ。フューゲンドリツヒに入学したかったのは本格的なバレエを学んで世界へと羽ばたきたいのもあったけど、もう絶対公立の学校には通わないと決心したからよ。下賤で野蛮で厭らしい人達と同じ教室に詰め込まれるなんて、虫唾が走るわ！」

私はもな美を羨ましいとよく思ったものだった。

一等地のお屋敷の娘で、美人で、優雅で華があり、私にないものを全て持っていたのに、心にはいつも真冬の嵐が吹き荒れていたとは、私は陽射しの降り注ぐひまわり畑にいたので想像もつかない事だったのだ。

お今晩は

「失礼致します。お夕食をお持ち致しました」

クロディーネを見たフレードは口を閉じるのをすっかり忘れてしまい、読書していたデймもモバイルコンピューターを落として危うくフリーズさせてしまうところだった。

「只今お運び致しますので、どうぞそのままでお待ち下さいませ」
正座で三つ指。

先程とはガラリと雰囲気の違いクロディーネは、頂のあたりで髪をキリリと結び、淡い藍色の着物に着替えていた。

「デйм、今の見たか？」

「ウン、すごいキレイだった」

楚々とした風情が薫りたつのに魅せられて、二人は料理が運ばれる間もずっと眼を泳がせ骨の無いクラゲのような顔をしていた。男とはほんに仕様の無い生物である。

そうこうしているうちお膳の上には贅を尽くした料理で犇めきあっている。

珍しい海草の酢の物やさっくりした衣の天麩羅、船盛りの活造りに五徳で焼く大きな貝……

新鮮な海産物を存分に味わえるとは、惑星ルミエールでは色々あったが生きていてよかったと二人は実感していた。

「さ、おひとつどうぞ。この“ワシヨク”というお料理にはビールが意外と合いますのよ。“ニホンシュ”というお酒も美味しゅう

「ございますが、いかがかしら？」

「あ、ああそれもお願ひしマス」

「パパ、すつごくオイシイよ！ムシャムシャ……あゝヒアワへ」

「こ、こらもちよつと行儀良くしなさい！本当にどうしようもない息子で困っていますよ」

「ほほほ、可愛らしいお坊ちゃまですわね……あ、おサケお願ひね。さ、どうぞお飲みになって。旅の疲れを癒してくださいませね」

「は、はあどうも……」

「ご馳走と美酒にはすつかりご満悦のフレードだが、美女を前にして少々緊張気味のような。後から抱きしめて色っぽい項に頬を寄せたい衝動とたたかいながら、別の部分も固くなり始めごまかすのにひと苦労だ。」

「あらどうかなさいまして？お料理お口に合いませんでしたかしら」

「い、いえとても美味しいです、はい」

（俺もまだまだ現役なんだな。ハハ……）

「楽しく美味しく、そしてムラムラと夕餉の時はゆったりと流れていった。」

「すつかりお召し上がりになって、とても嬉しゅうございますわ。あちらのお部屋にお布団をご用意致しましたので、いつでもどうぞお休み下さいませ。では私どもはこれにて……お邪魔を致しました」

「どうもご馳走様でした」

「おねえさん、おいしかったよー」

「まあ（^^）どうもお粗末様でした。うふふ……失礼致します」
「さて……」

「腹も満たされ、気持ちが和やかになったところでフレードは星降る浜辺を歩いてみたくなった。」

「デyim、ちよつと散歩に出てみないか？」

「え、今日はちよつと……」

「なんだ、何かあるのか？」

「ここのホテルのお兄さんが遊びに連れて行ってくれるんだよ」

「何？そんな約束いつの間に……まあせいぜい迷惑のないようにな、私はちよつとその辺を歩いてくるから。お前もあんまり遅くならないようにな」

フレードは部屋を出るとデームは待つてましたとばかりに電話を架けはじめた。

「もしもし、あ、お兄さん？お仕事終わったの？ウンもうちよつとしたら行くから。はい、あとでネ……さあ、急いでシャワー浴びよつと」

窓の下にはホテルの前から階段を下つて海岸へ向かう白い影がひとつあった。

薄暮の闇は淡く、月のような衛星の光がほんのり照つているので足元はランプを燈したほど明るい。

ザザザ……ザザザ……

砂浜に碎ける波頭が薄闇に浮かび、水平線の上には流れ星がひとつ弧を描いていった。

夜の海は昼と違った趣があるとは聞くが、旅の途中の星の知らない海でさえ懐かしい感じがして、遠い昔子守唄を聴いたときのように癒されてゆく気がする。

フレードは微やかな潮風に撫でられ砂の上で空を仰いだ。

星空のスクリーンに映る亡き妻カメリアの姿、そして妻に生き写しの女クロディーネ――

二つの顔が重なつて夜空にグルグル回っている。フレードは頭を振つて悪戯な幻を追ひ払おうとした。

（いかな、さつきの酒でまだ酔っているのか？）

アルコールを醒ます為に風に吹かれ少し歩いてみる。

眼が夜に慣れてくると浜辺のあちこちにふたつの人影がセツトになつて座っているのが確認できた。

「お待たせーっ！ねえドコにいくの？まあおまかせだけいいトコに案内してね。アハハハハ……」

（あれはデイムの声だな。あんなに楽しそうに、よっぽどあのベルボーイが気に入ったようだ。ま、せいぜい羽目を外し過ぎんよう気をつけろよ……）

「それにしても、ここは本当に“恋のアイランド”だな。どこに行っても誰かと誰かがくつついて、これがこの星の成せる技なのだな」

寄り添うカップルたちを横目に微笑み、向こうの岬の灯台に向かってさらに歩いていくと段々心に重い荷物がぶら下がっているのを感じていた。

（クロディーネの事を自分は本当はどう想っているのだろう、ただ単に妻に瓜二つな彼女が気になっているだけにすぎないのでは？これが恋だとしたら、少し遅いこの恋をどう受け止めればいいのかろう？）

若き日と違って恋に億劫になっている自分に戸惑いながら、それでもクロディーネを想うと若いハートに戻ってしまう心をかかえて夜のビーチを彷徨うフレードがいた。

可憐な花の裏側

「まあそんな恨み事はもうどうでもいいわ。そういえばあなた達いつか私が出た発表会に来てくれた事があったわね。あの時は嬉しかった。客席であなた達を見かけたら急に心強くなって何にも恐くなくなつたのよ。それまでは注射を打たれる前の子供みたいだったのに、おかしいでしょう？」

私のピアノ発表会のあと位に、もな美のバレエの発表会を観覧し

たのはよく憶えている。

舞台では咲き誇る白百合のように堂々と華麗に舞っていたもな美は他の子よりも際立っていて、誰かが天才少女だと囁いていた。

そんなもな美が私と同じように緊張していたとは信じ難い。

「ステージの上できちんと踊れるか心配だったのよ。レッスンの時の私って、叱られてばかりだったから……」

『アン、ドウ、トワ、キャトル。もな美ちゃん、そこ違う。パッセのあとはアティチュードでしょ！はい、続けて。サンク、シス、セット。はいルルベ、ピルエットでアラベスク。遅い！はいそのまま、ウィット、ヌフそこでソテ。はい、やめ！……もな美ちゃん、いつも言ってるけど、あなた流れが悪すぎるのよ。バレエはとってつけたようにぎこちなく踊っては駄目！優雅な動きができるまであなただけ違うレッスンをします。さあこっちへ来なさい！』

「厳しい先生だったのよ。跳んだりはねたり同じ動きの繰り返しを何百回もさせられたの、それも毎日。この人Sかしらと子供ながらに思ったわ。おかげでなんとか人並みにできるようになって、そろそろ発表会に出てみましょうという運びになったけど、やっぱり不安は拭いきれなかったわ」

私にも分かる。

十分に練習はした筈なのに本番では間違えはしまいかと始まるまでその恐怖は続くのだ。

しかもやり直しがきかないので失敗したら大勢の前で恥をかくというプレッシャーが鉛の塊を背負わされたようにずっしりのしかかって来るので、その苦しみは並大抵のものではない。

「当日、楽屋でメイクをしてもらってる間も、ずーっと膝が笑いつぱなしかったわ」

もな美はまた空を眩しげに見つめ、かつて震えていた少女を見て微笑んだ。

『もな美ちゃん、ちょっとだけじつとしてて。アイラインが失敗するから』

『はい、ごめんなさい』

鏡越しに目が合った女の子達が口を押さえているのが見えた。

周りの子達は声を殺してゐるつもりだが、クスクスと息が洩れているのが聞こえてきたのでもな美の目が潤み始め、とうとう堪らずせつかくの化粧を崩してしまった。

『どうしたの？痛かった？』

『ウウン、大丈夫』

出来の悪い自分を見る仲間達の冷たい視線を前から感じていたが、今はただ情けなくてもう家に帰りたいと思っていた。

しかし今更出場を棄権するのは勇氣もいるしプライドも許さないので、彼女は氣丈に辛抱する事にした。

『すぐ直さないとね、さ、このハンカチで涙拭いて。あなたの出番、あともう少しよ』

そんなもな美の気持ちも露知らず、私と太陽は会場で可愛らしい踊り子たちの演技に拍手を贈っていた。

『相田瑠璃子さんのソロ演技で、“海賊”より“メドゥーラ”でした。続きましてプログラムナンバー9番、志賀光博さんと山口さやかさんのデュエットで、“眠りの森の美女”より“オーロラ姫とフローリムント王子のグラン・パ・ド・ドウ”です』

『パトラちゃん、この次の次ね。なんか私までドキドキしてきちゃった』

『パトラが出てきたら、手を振って応援しようよ』
『エーッ、やだぁ恥ずかしい』

その頃もな美は、もう涙は止まったものの、気持ちはまだ晴れてはいなかった。

『さ、出来たわ。ほらキレイでしょう？もな美ちゃんにとってはカワイイから、きつとみんな見とれるわよ』

化粧をしてくれたバレエスクールの手伝いのお姉さんの言葉も虚ろに聞こえ、溜息をひとつ洩らした。

『一ノ原さん、間もなくです。舞台のほうまで来て下さい』

『さ、もな美ちゃんしつかりね。私も応援してるから、行つてらっしゃい』

『はい……………』

引きずるような、バレリーナらしくない足取りでもな美は舞台の袖へと向かつていった。あの時私が思ったように出来る事ならこのまま踵を返して、このホールを後にしたいとそう思いながら……………パチパチパチパチパチ

『杉岡卓也さんと伊藤玲香さんのデュエットの演技で“コッペリア”より“スワニルダ”でした。続きましてプログラムナンバー1番、一ノ原もな美さんのソロ演技で、“くるみ割り人形”より“金平糖の踊り”です——』

《うっ！気持ち悪る——》

クラスの女生徒やバレエ仲間の眼はつららのよう。

もな美の胸は無数の穴と凍傷だらけでズキズキ疼いている。

沢山並ぶ冷たい眼、会場から浴びせかけられる凍てつく雪嵐。

もう踊れずに行き場の無い自分を想像して胃の中のもものが逆流しそうな感覚に襲われてしまい、やはり出場を辞退しようと思っていた。

そのとき、“ポン”と肩に置かれた手の温かな感触が彼女を急速に解凍してゆくようだった。

『もな美ちゃん、どうしたの？緊張してるの？大丈夫よ、バレエあんなに上手になったじゃない。時々レッスン見てたけど、あなたの踊りを見てハツとする事があるのよ』

「…………その手はメイクをしてもらった手だったわ。その女の人もバレエをやっていたから、踊りの事は知っているの。彼女は私にほんの気休めを言っただけかも知れないけど、そのときその優しい手

が私の中に火を灯してくれたのだわ」

遠く旅していたもな美の目は、私達のもとへ一旦帰ってきて、またすぐに旅立っていった。

私はその目を追いかけながら、ステージであんなに光を放っていたもな美が、裏では私と同じように発表会など放り出してしまいかけたのが不思議に思っていた。

『お姉さん、ほんと？』

『ええ、草花を育ててると暖かい季節には成長するのが早くて驚く時があるでしょう？ああいう感じなのよ。誰でもはじめは芽が出たばかりの双葉だわ。双葉のまま枯れちゃう人もいるけど、あなたはもう双葉じゃない、成長してるの。あとは花を咲かせるだけよ。さあ観客の人達も待っているわ、大きな花を咲かせていらっしやい！』

『ハイ』

渡る世間に鬼はなしという。

陰険で性悪な人間もいるが、心の清いひとだって確かに存在しているのを実感しながら、もな美は背筋をピンと伸ばしエールを贈ってくれた女性に感謝の微笑みを投げかけて、舞台へと躍り出た。

パチパチパチパチパチ

迎える拍手に少々物怖じしながらも客席を見返してみると、彼女は最前列から5〜6番目ほどの席にいる私達にすぐ気づいて笑いかけてくれた。

『パトラちゃん、ガンバッテ〜！あ……』

私は思わず大声援を贈ってしまったて急に顔から火が出そうになったが、もな美は嫌がる素振りも無く手を振って応えてくれた。

自分ひとり浮いてなくてよかったとホッとしたが、問題はそれと。

もな美の視線が微妙に隣あたりに移って、何か感慨深げな空気を纏っていた気がしていた。

そのときは彼女の踊りに釘付けになってすっかり気にもとめなかつたが……

「そう、実はあなたが発表会でピアノを弾く前、私も“アレツ？”って思つたの。でも演奏が始まると思つたより上手でビックリ！感動しちゃつたからもうそんな事どうでもよくなつてたわ……アラ、少し冷えるかしら？窓を閉めましょうか？」

「いいえ、大丈夫」

もな美と私の体験がこんなに酷似しているとは……

何か不思議な因縁めいたものを感じて、デコルテラインを晒しても過ごせる季節に、私はうすら寒さを覚えているのであった。

薰り高く

『もな美——っ、しつかりやれよ——』

《太陽クン……ありがとう。さっきまでダメだと思つたけど、私きつとできる。見てて、ちゃんと踊ってみせるわ！》

《そうだよ、君は最高のバレリーナだ。さあ、すばらしい踊りを見せておくれよ》

《ええ、今までで一番の踊り、見せてあげる》

♪ ♪ # ♪ ———

『おお、このコなかなかいいじゃないか』

『ええ、素晴らしいわね。何かこう、バレエを味方につけて楽しんでる感じがするわ』

『まだちよつと幼さはあるけど、ステキー』

『大人顔負けの存在感ね。このままいくとひょっとして、とんでもない踊り手になるかも』

皆がもな美を観てヒソヒソ噂をしている。

私みたいな子供の視点からでも一味違うように見えるのに、周りの大人にはどんなにかショックでエキセントリックに映った事だろう。

私ももう一度、現在の眼で、当時の天才少女の踊りを生で観てみたいものだ。

《すごい、すごいわ！レッスンの時とは全然違う。手足が鳥の羽根になったみたい。あんなに痛かったポワントだって、ほらっ、この通り。ジユテの足もこんなに上がるワ。私の体から、体重がなくなっちゃったようだわ！》

もな美は夢中になってバレエの世界を浮遊していた。

観客の眼を恐れて舞台に立つのも躊躇っていたもな美とは別の少女が、この板の上で蕾から大輪の花へと変身して見せたのだ。

その一番美しい瞬間に誰もが驚き、感嘆し、深い吐息を洩らした。
ワアアアアー……ッ！！

何と、スタンディングオベーションが湧き起こった！

私達も立ち上がり彼女のエモーション豊かなダンスに高揚して敬意の熱い拍手を贈った。

『パトラちゃん、すばらしかったわ！感動よ。ステキ！』

『あ、ありがと……ありがと！』

私と太陽から花束を渡され、メイクと衣装もそのまま彼女はボロボロと号泣していた。

こんなに反響がすごいとは予想もつかずに、今迄の苦労が全て報われた想いで胸が一杯になって、言葉も途切れがちだった。

「……あのときの感激がなかったら、私はバレエをやめていたかも知れないわ。壊れそうだった私を支えてくれたバレエスクールのお姉さんと、あなた達には今でも感謝しているわ。でもね……」

もな美は急に私を見つめて言った。

「私本当は、あなたの事をずっと羨ましく思っていたの」

「え……?!」

羨ましかったのは私の方だと思っていたのに、彼女の意外な心情を聞かされて私はスープの行き場を一瞬失い、ソーサーの上にひと雫の花びらを散らしてしまった。

～ 第二部 第二章へつづく ～

ご覧いただきありがとうございます。この小説は私のブログ「宝のかんづめ」

<http://blog.sonet.ne.jp/kohakunotoki/archive/c5374599>

でも掲載しております

#第二部 第二章（前書き）

今までのお話

ロワンドテリーヤから地球へ向けて旅立ったフレードとディム。コスモ・エクスプレスの途中停車駅“トロピカル・プラネット”でフレードは亡き妻カメリアにそっくりなクロディーネに心奪われ、気持ち揺らいでいる。

ディムが読んでいる本「星の漣のむこうには」の著者茉莉沙は太陽に恋するが、太陽はもな美とつきあう事に。

やがて茉莉沙はピアニスト、もな美はバレリーナ、太陽は宇宙飛行士にと三人は夢を叶えてゆく。茉莉沙は酒の勢いで太陽に想いを告げ、太陽も本当は茉莉沙を好きだと言うが、旅先の湖畔でプロポーズしているところをもな美が目撃してそのまま湖へ身を投じてしまい、もな美は行方不明になってしまった。

茉莉沙はショックで太陽を忘れようとするが、太陽の熱意と周りの後押しに考え直し、二人はついに結婚へ。

アメリカで二人の子供に囲まれ幸せに暮らしていたが、ある日太陽から「エルディック彗星が墜落」という耳を疑う事実を知らされてしまう。

茉莉沙は子供と共に一時帰国するが、太陽は宇宙開発局“WASA”に監禁され、どうしても連れ戻さんと再び単身でアメリカへ。

WASAで太陽に再会できたはいいが、Xデーを前にエルディック彗星が頭上に……

茉莉沙たちはもうおしまいだと思ったが、気がつくとは何故か見知らぬところにいた。

するとあやしい男たちに「お妃が逢いたがつてるから迎えに来た」と言われ、城へと連れて行かれる。

その逢いたがつていたお妃とは、湖で消えたあのもな美だった！

三人で午餐をとりながらも美の話をしていると、自分達は亜空間から時空を越え地球から遠く離れたロワンドテériaという星に一瞬でやってきたという。

そしてもな美は自分の事を語り始めた。

明朗快活、優雅で美人のもな美はイメージの華やかさとは裏腹に、イギリスの学校で、そして帰国してからもいじめに遭っていたという。

私立のフューゲンドリツヒ学園を志望したのも、公立の学校に嫌気がさしたからだった。

バレエの発表会で、初めて全力で踊れる自信をつけたと目を輝かせて言うもな美は、本当は茉莉沙の事が羨ましかったと言い、意外な言葉に茉莉沙は戸惑っていた……

登場人物

モナミ・グレイス・デ・ヤポナーリア 数々のせつない体験を経て、そしてお妃に。

夏沢太陽 茉莉沙と九死に一生を得、遠きロワンドテériaへ……

フレード・ナツザワ 年の離れたクロディーネに惹かれてゆく

ディム・ナツザワ 恋の星トロピカル・プラネットで父に負けずに恋してる？

トピー・ミールズ コスモ・エクスプレスの乗務員でチーフパーサー

ジル・アンドローザ 茉莉沙ともな美に、過酷な運命を告げる占い師

エンドラ クロディーネのホテル従業員

アデル もな美が所属するル・グランシエルバレエ団支配人
エレーヌ フューゲンドリツヒ学園パリ校でのもな美の級友

シャンティエ パリの病院の医師

クロディーネ・パデュウ フレードたちが泊まるホテルの
社長の娘

夏沢茉莉沙 もな美の知られざる生き様を知って愕然とし
てしまう

*この物語はフィクションであり、登場人物や団体・建物・一部の
天体などは架空のものであります。また文中に不適切な表現がある
かも知れませんが、登場人物の心情やストーリーを盛り上げる為で
すのでご了承ください。

#第二部 第二章

ボサノヴァの調べ

「少し冷えてきたな……やはり夜風に当たり過ぎたか」
灯台のあかりは夜の陽射し。遠い沖を、逆側の険しい山を露わにする。

潮風がさつきよりも強くなってきたので、風邪などひいて旅に支障が出ないようフレードは ホテルへ戻ろうと蒼い浜辺を引き返した。

眠気を誘う唄を歌ってる波と、海に降り注ぎそうな無数の星のコーボレーション。

一人で観^みていても、心が溶けてしまいそうな気がする。

（君達もムードに酔いしれるのもいいけど、熱など出したりしないようにな）

愛を囁くカップル達が相変わらずいくつも寄り添うので、フレードは心で注意を促し、軽く笑っていた。

やがてホテルへ帰り着くと少し体を温めたいと思い、一階のロビーにバーがある事をふと思い出した。

（冷えた体を芯から温めるには、やはりアルコールが一番だな）

Bar de étoile（バー エトワール）

そう書かれたドアを押してみた。

「いらつしやいませ。あら！」

「あ……」

カウンターの中のホステス嬢は、なんとクロディーネだった。

いくら社長の娘とはいえ、ここまでこき使うとは何て人遣いひとづかの荒いホテルなんだと、フレードは感嘆の溜息をついた。

「うふふ……驚いたでしょう？まるで私が休む間もなくアゴで使われているとお思いでしょうね」

（ドキッ！）

図星をさされて、思わずフレードは自分の左胸を押さえてしまった。

「今夜はこのバーで一人欠員が出てしまったので、私がヘルプにかり出されたのですわ。さあ、おしほりをどうぞ。お飲み物は何がよろしいですかしら？」

「こ、コニヤツクを……」

「かしこまりましたわ」

クロディーネはなんと不思議な女性だろう。

初めて逢ったときは髪に花を挿し、ムームーを着た南国娘風で、夕餉ゆうげの刻には着物を纏った艶姿あですがた。そして今、黒いドレスの謎を秘めたバーのマダムだ。

次々と変化する彼女は、その時々合った微笑ひしやうを投げかけ、フレードの気持ちを悪魔のように攪乱かくらんしてゆく。

そんな彼女に惑わされて、底なし沼にズブズブはまっていったとしても万更まんむらでもない、フレードは頭の隅でちらりと思った。

エチルアルコールを含んだ琥珀色こはくしきの液体は高く響かおって、そんな気持ち喉元まで運んでしまいそうになる。

「クロディーネさん、明日も忙しいのですか？」

「いいえ、朝食の支度が済んだらあとは手がすきますわ」

「そうですか、あの……」

「何ですか？」

「あの……私、実を言うと初めて貴女を見たとき……」

「シッ……」

クロディーネの紅いマニキュアの人差し指が言いかけた唇に蓋ふたをして、そのあとの言葉を遮さへぎってしまった。

「いけませんわ、ナツザワ様。お酔いになってるのね。もうおしまいになさった方が宜よろしいのではなくて？」

禁じられた言葉は、薄暗いバーの空間に躍り出しそうになりながらも喉に渦を巻いたままで、フレードはやり切れない気分になってきてしまった。

「ふふっ、意地悪な女だとも思いかしら？でも続きは明日、伺うかがいますわ」

悪女？魔性の女？男の扱いを知っている？

彼女がますます分からなくなってきたが、ただひとつ分かっているのは、クロディーネという流れの速い河で、フレードが今まさに溺おぼれそうになっているのだ。

紫の煙がランプのシェイドのあたりにゆらめき、ボサノヴァの甘い調べが彼女の妖あやしげなアトモスフェアを揺らして、フレードの視界がだんだん、段々ぼんやりとして行つた。

I l o v e y o u……

（昨夜はちよつと飲み過ぎたかな？気がつけばいつの間にか部屋で寝ていたし、デームが帰って来たのも知らないし……）

『お早うございます。朝食のお時間でございますわ』

クロディーネの声で目覚め、脳内が淀んでいるまま食卓の膳ぜんについたものの、食事は二日酔い気味のフレードの喉をろくに通らなかった。

代わりに食べ盛りのディムが、焼き魚だの、出し巻き玉子だの、納豆だの、味噌汁だの『うまい、うまい』とフレードの分まで平らげてしまったのだ。

『お粗末様でございました。私はもうすぐ仕事が始めますので、宜よろしかったらこのホテルの前のビーチにありますパームツリーの木こ陰かげでお待ちくださいませ』

『あれえ？パパどーしたの、デート？』

『コ、コラッ、大人をからかうんじゃない！』

『キャハハッごめんごめん、邪魔しないからねー』

悪戯坊主いたずらぼうずに冷やかされながら、年甲斐としがひもなくドギマギして、フレードは砂浜への階段を降りて行った。

常夏の星を気紛きまぐれに渡る甘い風が、フレードの髪を乱してゆく。パラソルの花に色とりどりの水着。

熱帯のビーチでは色彩も熱い。

フレードがもう少し若ければ真っ直ぐ海に向かっていただろうが、今はこの木陰こかげのベンチで涼んでいる方が快適だと思う。

沖を漂うヨットを見ていると、不意に目の前が真っ暗になってしまった。

「うふふ、だーれだ？」

柔らかく響く声に、悪戯いたずらの主がすぐに分かった。

「クロディーネさん」

「当たり前（^^）うふふつ、見破られてしまいましたわね。ごめんなさい、こんな子供みたいな事をして」

こういう少女みたいな一面もあるのは意外だったが、クロディーネがさらに愛おしく思えてくるフレードがいた。

「ねえ、せっかくですから少し泳ぎませんか？私も今は非番ですの
で楽しみたいですわ」

「でも水着が」

「あら、それでしたらこの先にヌーディスト・ビーチもあります
のよ」

「え……」

「うふふ、冗談ですわ。波打ち際を歩くだけでも気持ちよろしく
てよ。さ、行きましよう」

クロディーネはフレードの手をごく自然につないで歩き始めた。
しっとり落ち着いた女性かと思っていたら、このようなジョーク
も飛び出すし、積極的に手もつないでくる。

クロディーネの意外性に戸惑いながら、フレードの胸はときめい
ているだけ――

（どうしたんだろう、こんなに年下の女の人にリードされて、し
かも年甲斐もなく胸が疼く。まるで若かった日々が甦ってくるよう
だ……）

トロピカル・プラネットの魔力は、男が及び腰なら女を小悪魔に
変えてしまうのだろうか。

クロディーネに連れられて渚を歩くフレードは、まるで散歩をさ
せられる犬のようだ。

しかし少しも恥ずかしいなどと思ってはいない。

こうしていると、新婚旅行に出かけたあの日のようだ――

『フレード、キャア待ってえ』

『ほら見て、パール貝よ』

『フレード、愛しているわ……』

胸の中には甘いラヴ・バラードが流れている。

白い砂のビーチ、透明な水、遠くの珊瑚礁^{さんごしょう}があざやかに色変えて、波寄せる汀^{みぎわ}にカメラアが振り返る。

『フレード、愛しているわ……』

カメラアに生き写しのこの女性は、同じ科白^{せりふ}を囁^{ささや}いてくれるだろうか？

フレードの胸の中に、二人の女性がぐるぐると渦潮^{うずしお}を巻いている。

「どうかなさったの？」

「あ、いや……」

「あの……昨夜ホテルのバーで言おうとなさった事、大体分かってましたわ。でもね、女はお酒の勢いで殿方に口説かれるのを意外と好まないものですのよ。だから今日お誘いしたの。ここなら誰も見てないし聞いてないから、宜^{よろ}しかったら続きを聞かせて……」

辺^{あた}りを見てみると、いつしか人も疎^{まば}らな所まで来ていた。

トロピカル・プラネットではみんな自分の愛を囁^{ささや}くの忙しくて、他人の「アイラヴユー」など聞く耳を持っていないが、フレードの口を開きやすい場所をクロディーネはわざわざ選んだようだ。

フレードは呼吸を整えて、クロディーネの瞳をまっすぐ見つめた。

「は、初めて逢ったあの時から、この胸の高鳴りを抑^{おさ}えられなかった……」

潮騒が急に高まって、白い海鳥の群れが啼^なきながら通り過ぎてゆく。

「貴女のこと……好きです」

「私も、私も……」

胸の中のラヴ・バラードが、更に音高く鳴り響いている。

これは想い出ではなく、紛れもない現実。

フレードと、天から舞い降りたように現れたクロディーネはいつしか抱き合い、こうなる事は時間の問題だったように、今熱き口づけを交し合う。

打ち寄せる波は足元を濡らし、海鳥たちはまた、祝福するように歌っている。

長いあいだ息と息が纏れ、熱い感触に気が遠くなりそうになる。背中にまわす紅い爪の指が、背筋を愛しげに撫でている。

「ああ、ずっと前から貴方に逢いたかった、そんな気がするわ……」

クロディーネのこの一言は、一瞬フレードを混乱の境地へと突き落としてしまった。

フレードは息を感じる程近くにある女の顔が、誰なのか見分けられなくなっていた。

そして言うてはいけない言葉を発してしまったのだ。

「私もだ。愛してるよ、カメリア……」

「……………！」

パシン！

フレードの頬に痛みが走った。

それは痛みではなく哀しみだとクロディーネの瞳が言っている。そこから海の水より塩辛い涙の洪水が溢れ出していた。

（ハッ、しまった！何て事を言っただんだ）

言の葉は大気へと飛び出してしまえば時は遅し。
栗色の巻き髪は、陽を浴びて束の間輝きながら翻り、そのまま風のように揺れながら遠くなつてゆく。

「待つて！クロディーネさん、待つ……」

追いかけてようとしても、フレードは砂に足をとられて腹這いになつてしまった。

「待つて、違うんだ！」

後悔に打ちひしがれて、起き上がる事もできない。

フレードは、青いサマードレスの裾がヒラヒラとあおられて遠ざかるのを、ただ見送っていた――

ジェラス・ヴァレンタイン

「時に――」

もな美の双眸が、私を真つ直ぐに見つめた。

「私が湖で姿を消してからというもの、貴女は幸せそうでは何よりですこと」

「いえ、私はそんな……」

幸せになる前に、長い苦しみを抱えてた事を言おうとも、とても言葉では言い表せない。

「貴女の言わんとする事は分かっています。私には全てが見えていました。先程も申した通り、このロワンドテリヤ星は地球の数倍も科学が発達しています。貴女達の行動など手に取るようにお見通しですよ」

私の上半身に、サアーツと木枯らしが駆け抜ける感じがする。

少女の頃より、どこかミステリアスな雰囲気を持つてはいたが、この時のもな美は一瞬、人間の仮面をつけた魔女のように私の瞳に

映りこんだ。

「あれから貴女は、足を患^{わづ}った私が絶望^{ふち}の淵に追い込まれたのは“自分のせい”だと良心の呵責^{かしやくさいな}に苛^{さい}まれていたのも知っています。しかし、周りの人や太陽^{このひと}の温かさに後押しをされて輝くばかりの幸福へと嫁いでいった——それはそれで良い事です」

「……………」

もな美の口調や態度は、暖炉の炎のようにあたたかで穏やかなのに、私を責めている気がするのは何故なのだろう？単なる気のせいだといいのだが……

「でも私にも貴女に負けぬ程^{このよきくせつ}の紆余曲折があつたのですよ」

「ええ、私は気づかなかつたけど、周りの人々に冷たくされてきたのでしょうか？」

「いいえ、それだけじゃないわ」

もな美は、再び窓の外を遠く旅しはじめた。

『あら太陽君、思ったより元気そうじゃない。ヨカッタ』

『星座の観察もいいケド、夜風は体に毒ヨ』

『この間もらったお年玉が意外に多くて、天体望遠鏡買ったんだ。ついうれしくてつい時間忘れて見てたらこうなっちゃった。デモ、星^{ほし}ってホントキレイだなー』

『私も見たーい。今度見せてえ』

『抜け駆けはダメよ。ワタシだって見たいわ』

『じゃ僕が元気になったら、ネ』

『ヤッターうれしいー（^^）』

『……………』

小学生の頃、私ともな美で風邪で寝込んだ太陽を見舞った時に太陽の顔を見てホッとしたと同時に、臃^{おぼろ}げだが私は太陽の事が好きなんだと実感した。

しかし、その時一瞬流れた微妙な空気が何なのかは、まだ分か

らずにいたのだ。

「私がもつと鈍感で恋する事に疎い少女だったら、運命は今と大幅に違っていたでしょう。でも私は気づいてしまった。自分の気持ちにも、貴女が誰を見ていたのか、も……」

やはり、彼女は私と同じ気持ちだった。

私がうすうす感じていたように、もな美も私の初恋を見抜いていた。

よりによって私ともな美の視線の焦点は、太陽だったなんて……

「私は焦ったわ。貴女達を見てみると、まるでカルメンとドン・ホセのよう……寄り添うべくしてそこに存在しているように見えたのです。でも、カルメンは悲劇のヒロイン。私は脇役のミカエラでいいから、貴女にはヒロインになってもらおうと思ったわ」

『もうすぐバレンタインねえ、マリサちゃん、チョコレート誰かにあげるの?』

『私は別に、パトラちゃんこそどうなの?』

『まあネ。義理チョコだけど』

そう言いながらも、私は内心ときめきを抑えきれずにいた。

密かにチョコレートを買って、寒い夕暮れのプラタナスの並木道で太陽を待ち伏せし、彼を見つけて声をかけようとしたところまでは良かったが……

『た……』

『太陽クーン!良かったーっ今日会えなかったらどうしようかと思っちゃった。はいコレ、プレゼントよー』

『ありがとう、パトラ』

『どういたしまして。受け取ってもらえて嬉しいワ、ふふ。ねえ、腕組もうか』

『よせよ、ハハハ……』

「あの時、私には分かっていた。貴女が彼にチヨコレートを渡し
てしまえば、彼はもう私に振り向く事はないと——私は一世一代
の賭けに出るつもりで、プラタナスの陰に隠れて待っていたわ。そ
して、恋の勝利者となった。本当はどうしよう、どうしようってず
ーっとドキドキしてたけど、私の中の気弱な天使が小悪魔に打ち負
かされる瞬間だったわ。貴女には気の毒な事をしたけれど、恋の戦
いは真剣勝負だから……」

もな美は明るくて、積極的で、飄々（ひょうひょう）とした女性
だと思っていた。

しかし彼女には私以上に複雑な心の襞（ひだ）がかくされていたのだ。

“ライオンはウサギを倒す時も全力を尽くす”

私が気弱で、もな美に負けてしまったのではない。

この言葉の意味が今更ながらに分かったと、そんな気がする。

私は Ballerina

「失礼致します、レスモデラー・ブーフのソテー、デルビョーニ
添えでございます」

「これは地球でいうところの、最高級牛フィレ肉ステーキに匹敵
するメインディッシュよ。冷めないうちに召し上がれ」

もな美に勧められるままナイフを入れてみると、断面にはジュー
ッ（あふ）と溢れんばかりの肉汁で潤（うる）っている。口に運んでみると、舌の

上で淡雪^{あわゆき}が解けて小さくなっていくような感じが堪^{たま}らない。

「おい…しい！」

「でしよう。お気に召^めして頂いて結構だわ」

もな美も微笑みながら舌鼓^{したつづみ}を打っている。

さつきまで少し重かった空気が、霧の晴れ間に日が差す様に和みはじめた。

しかし、もな美が目^めを伏せもの想^{おも}う仕草を見せると、あたりは再び深い海へと沈んでゆく。

「幼い頃の周りの冷たい態度があつたせいか、私の野心はとどまる所を知らなかったの。恋の成就^{じゆうじゆ}に飽^あき足らず、夢と栄光^{えいこう}を掴^{つか}むためにそれからの私は必死になつたわ……」

『エ・アン、エ・ドウ…違います！もな美さん、そこはもつと羽根のように！』

『はあ、はあ……申し訳ありません、もう一度お願いします』

『エ・トワ、パッセ、ピルエット…はいジユテ！そう、流れるように…エ・キャトル、エ・サンク……』

足のマメがつぶれて血が流れても、もな美は泣きながら何度も立ち上がった。

世界の大舞台に立つまでは絶対に負けないと、そう信じて。

そして私と同じように、彼女にもチャンスは巡^{めぐ}ってきたのだ……

『31番、一ノ原もな美さん』

『はい』

私がフューゲンドリツヒ学園の姉妹校留学の試験に勝負を賭けていた頃、もな美もまた、賽^{さい}を投げようとしていたのだ。

《必ず、このチャンスを掴^{つか}むのよ！》

《いいえ、もしかしてダメかも……》

彼女は名前を呼ばれると、矛盾したふたつの思いが紛争を勃発し始めた。

しかし、この戦いは他ならぬもな美のため。

ネガティブな自分には絶対に勝つという気持ちを維持しようと懸命に努めた。

……すると、不思議な事がもな美に起こったのだ！

緊張で張り裂けそうな講堂のステージに立つと、もな美の目には麗らかな春の情景が映り込んだ。

咲き綻ぶ花のあいだを遊ぶ蝶々

やわらかな馨りに包まれて 蝶を追いかける若い姫君

“蝶々さん、どこへ行くの？ 私と一緒に遊んで 私も楽

しいところへ連れてって”

ドレスの裾も気にしないで駆けまわる姫

あたたかな陽差しが喜びを連れてくる

“待つて 待つて そんなに急がないで”

足もと危うく バランスは傾いて 花の中へ

“きゃああ！”

“危ない！”

“お嬢さん 大丈夫ですか？”

“ハッ 貴方はどなた？”

倒れ込んだのは どこかの王子と見受けられる 腕の中

陽炎のゆらめきのなかで 姫君の胸は全力で走る馬車のよう
どうしたの私？ 走りすぎたのかしら？ すぐくあついわ

顔が紅くないかしら？ ああ 恥ずかしい！

生まれて初めて感じる気持ち これは何？ これが恋なの？
陽の光は やさしく微笑んでいるだけ……

『はい、結構です』

気がつけばそこは、試験管たちのいる講堂こうどうのステージ。

夢醒さめやらぬままいっしかテストは済んでいた。

『あ、どうもありがとうございます』

どんな風に踊ったか憶えていないけれど、精一杯ベストを尽くした充実感がもな美の胸を満たしていて、「あとは野となれ山となれ」——そんな言葉がよぎっていった。

彼女はやはり……

「気がつけばそこは、試験管たちのいる講堂こうどうのステージ。

夢醒さめやらぬままいっしか……」

「ちよつと静かにできないか？本を読むなら黙読しなさい」

「はあゝい。チツ、機嫌悪いでやんの。どーせあの女の人にフラれたんじゃないのかい」

「何か言ったか！？」

「あゝうわあゝナンでも」

身から出た錆さびとはいえ、フレードがご機嫌斜めなのは無理もない。せつかくクロディーネと睦むつまじくなれたというのに、口が滑すべつて余計な一言を発したお陰で、すっかり彼女に嫌われてしまったらしい。

（あゝ馬鹿馬鹿馬鹿！あんな事さえ言わなかったら、あの人も傷つかなかったのに。うう、思い出すのも情けない……）

フレードの胸には後悔のハリケーンが渦を巻いていて、自己嫌悪の嵐になす術もなくうなだれている。

一言謝りたいのは山々だが、きつと傷が深いであろうクロディー

ネにどんな顔をして会えばいいのかも分からない。

（いい年をして自分でも呆^{あき}れてしまうよ。これじゃディムと変わらないな）

そんな事を悶々（もんもん）と考えていると、不意に声がした。

「失礼致します、お夕食の準備が整いました。ご用意^{ようぎ}して宜^{よろ}しいでしょうか？」

（ドキッ！ク、クロディーネさんだ。ああどうしよう、気まずいな……）

フレードは慌^{あわ}てふためきテラスに飛び出して、海を眺^{なが}める振りを始めた。

「ハイ、どーぞ」

「失礼致します……」

（ウワツ、入ってきた！）

「アレッ？あの女の人どーしたんデスか？」

（え？）

フレードが振り向くと、窓ガラスの向こうには知らない女性^{おんな}がいた。

「あの女の人？ああ、お嬢様でございますね。お嬢……あの、クロディーネは体調が冴^さえないとかで、私エンドラが代わりにお世話致しますので宜^{よろ}しくお願い申し上げます。では只今こちらにお料理をお持ち致します、少々お待ち下さいませ」

クロディーネが体調を崩^{くずれ}してるなんて、見え透^すいた言い訳なのは火を見るより明らかである。

悔^{かい}恨^{こん}のストームで荒れていたフレードの胸にはポツカリ空洞が開いてしまい、隙^{すき}間^ま風^{かぜ}がヒュルルと空しく響いている。

「お客様ちよつと陽に焼けたようでございますね。頬とか鼻がいい色になってますよ。海は楽しかったですか？この星は“恋のアイランド”とも申しますので、黙^{もく}つてもアバンチュールのバカンス

をお楽しみになれますでしょ？さあ、おひとつどうぞ。今夜もまたお楽しみでございますでしょうね、オホホホ……」

お喋りなエンドラという仲居なかいの話もフレードの耳には右から左へと抜けて行き、ビールに口をつけても飲んでいる気がしないし、料理の味も判別不能だ。当然食欲だって湧いては来ない。

そんなおかしなフレードを尻目にディムは持前の食欲を發揮して、どこへ入るのかと言いたくなる四次元的胃袋が活躍している。

「パパ食べないのオ？じゃあチョーダイね」

「あ？ああ……」

「まあお客様、お口に合わないでしょうか？それともどこか具合でも？」

「あ？あ、いえちよつと疲れてるだけで」

「まあお気をつけて下さいね。油断して夏風邪をひかれる方も多うございますから。でもそんな時はパームツリーの木の实、これを煎じたものを飲みますとですね、たちどころにシャキーンと元氣が出て風邪が飛んで行っちゃってしまうのですよ。しかも、このお薬はアツチの方にも効果絶大で、別のトコロもシャキーン！なんて事になっちゃうのでございますよ、オホホ……ではさっそく後でお持ちしましょうか？ホラ今宵ももうひと頑張り、なーんてお思いでしょう？殿方の強い味方ですよ。オホホ」

立て板に水。オバサンと呼ばれる生物はお喋りをとったら何が残るのだろう？

二人ともついていけずに、少々ウンザリ気味のようだ。

「パパ、訊きもしないのにこのヒトずーっとしやべってるね」

「あ？ああそうだな」

本当ならこの後ひと頑張りする筈だったのにと、フレードの胸の風穴が泣いている。

この星に降り立ち、クロディーネに逢ったのは神の悪戯。しかしその後悪魔に弄ばれて、フレードは運命の残酷さを呪うしかなかった。

「坊ちゃん美味しいでしょう？豊かな海の幸が新鮮なまま召し上がって頂けるのが自慢ですよ、ホホホ——」

「パパ、いい加減ウルサくない？」

「あ？ああ……」

さがしもの

「憶^{おぼ}えてるかしら？いつかジル・アンドローザの占いの館に行つたわね」

「ええ、よく憶^{おぼ}えてる」

私ともな美がヨーロッパに発^たつ前、ジル・アンドローザという占い師にみてもらった事があつた。ジルは驚異の的中率^{ほこ}を誇り、マスコミでも引つ張りだこの人気ぶりで、私達も待合の行列に並んでいたのが昨日の事のようにだ。

そんなジルが、もな美と私と太陽の三人の数奇な運命を今から思えばピタリと言い当てたのだ。

『ハッ、これは——』

『ジル先生、どうしたんですか？』

『未来のあなた方は、他の誰よりも数奇な道を行くのが私には見えます。或^ある時は花園^{たわむ}で戯れ、また或^ある時は茨^{いばら}の棘^{とげ}に傷ついたりする……これは何かの因縁^{いんねん}のよう。 “葛藤^{かつとう}” という言葉^{ことば}の如^{ごと}く葛^くと藤^{ふじ}の蔓^{つる}がもつれ合い、絡^{から}みあい、望むと望まざるとに関わらず、愛^{あい}憎^{そっけき}劇^{げき}の舞台へ立たされる事になるのです。あなた方は現実を超えた謎のベールに包まれた事件に巻き込まれてしまします。それはあま

りに神秘的で、あまりに抽象的な為、私の理解が及ばないので説明は出来かねますが、“運命の竜巻”と呼ばせて頂きましょう。その運命の竜巻は否応なしにあなた方を襲い、その身を翻弄しますが、決してそこで絶望してはなりません。嫉妬と憎悪を捨て、お互いを愛するのです。さもないとそれぞれ相手の刃に倒れる事になってしまいます……あなた方は二人とも、やがて選ばれた人となるでしょう。それはこのクリスタルがはっきりと語りかけています。ですから、何が起きても自暴自棄にならずにご自分を信じて下さい。希望の光とは必ず、何よりの味方になってくれるものですわ」

「運命の竜巻……彼女はそう表現していた。正に私達三人は竜巻にさらわれ、この星へ導かれてしまった。きつとそれは逆らえない“さだめ”だったのでしょうね……」

もな美は目を閉じて感慨深げに溜息をつく。そして目を開き、鋭い目力をもって続けた。

「宇宙の星の軌道が変わらず規則正しいように、私達もそれぞれの星のもと、巡り巡っている……これを真理だと受けとめるしかないのよ」

気のせいだろうか？もな美の強気な瞳が潤み始めたように私には見えてしまった。

「はじめはね、留学先はロンドンの予定だったの。でも私、トラウマがあるからイギリスには行きたくなかったのよ。それで無理にお願いして、フューゲンドリツヒのパリ校へ留学させてもらったわ」
潤んだものが流れ落ちないようにしてるのか、もな美はグッと顔を上げている。

このあと恐らく繰りひろげられるであろう切ない話のやり切れないさが私の胸にも伝わって、いたたまれずに俯いてしまった。

『ねえねえ、ちよつと知ってる？あのル・グランシエルバレエ団、今度入団オーディションをやるそうよ！！』

『え、何ですって！？』

『……………！！』

パリの級友たちの噂を聞いて、もな美は絶句した。

ル・グランシエルバレエ団は世界でも有数の大バレエ団で、当然ながら人気も高く、入団しようものなら数千倍というとてもない競争率の超難関をくぐらねばならない。これには流石に二の足を踏んでいたが、もな美の志はどうしても現実を超えたかった。

《ル・グランシエル……絶対に入りたい！私のすべてを引き換えにしても。だけど……》

マリー・アントワネットのように誇り高い彼女も、揺らいでしまふ時だつてある。もな美はそんな気持ち、時々友達に打ち明けていた。

『ねえエレヌ、私のバレエって何が必要？何が足りないと思う？』

『そうねえ……モナミは優雅で気品もあるから、悪いとは思わないけど……でもどこかに影があるような感じがするのよ』

『影？』

『そう、影。たとえば悪魔の娘オデイルを演じるなら、その影を存分に生かせると思うけど、オデット姫の場合は……確かに呪いをかけられた哀しさを表現しなければいけない。でもその内側には希望の光で満ちてなければならぬと思うの』

『希望の光？……それはつまり、例えばどんな役回りだろうとプリマ・ドンナには必要不可欠な要素だつて事？！』

『え、ええ。私はそう思うわ』

『そっか。エレヌありがと』

『あつモナミ、どこ行くの？』

『ちよつと寄宿舎に帰るわ』

もな美は寄宿舎にある書斎にこもつて、ある書物を探していた。

『l'espoir…希望…：えーっと、あ、これかしら？』
もな美の目に留まったのは、“泥が真珠に変わるとき　ドウ
ポール・アルロー著”

少し古びたにおいのする頁をめぐってみた――

あなたがどんな傷を負っていても、必ず治癒はされるもの
です。

その治癒力はあなた自身に備わっているものなのですから。
もしもあなたの心が砂漠のように乾いて、何もない不毛の
荒野でも

薔薇の花が咲き乱れる園にする事もできるのです。
勇氣を持ちましょう、そして叶えたい希望を心に映し出し
ましょう。

きつとあなたはいつの間にか、鏡を覗いてみると、
なりたかった自分をそこに見出す事が出来る筈です。

《あ、これだわ！》
もな美は五百頁以上もあるその厚い本を借りると、登校やレッ
スン、食事や入浴以外の時は部屋にこもってその本を読みふけて
いた。

そして、いよいよル・グランシエルバレエ団のオーディション
の当日――

『それでは皆さんには、今から踊ります創作ダンスの振り付け
を憶えていただきます。この踊りの役柄ですが、物事の分別が全く
つかない何の認識も持たない、いわゆる生まれのままの子供と同じ
知性の少女が自分に目覚め、人の心・人の愛を理解してゆくという
表現をして頂きます』

『えーっ何それー』

『むずかしいー』

『Oh, mon Dieu!』

『静かに！ではダンサーに注目して下さい。何度も踊らないので集中して憶えるように』

第一次、二次、三次審査と、もな美は次々にパスして見せ、最終審査の100名の中に見事残る事が出来た。しかし難しいどころではないこのテストには、流石に戸惑い気味だ。

♪ # ♪ ♪ ♪ ———

『大丈夫、私はできる。必ずやり遂げて見事合格して見せるわ！』

順番待ちの間もな美は何度も何度も心で呟いて、自分の中にこの言葉を刻みつけていった。

そして——

『次、マドモアゼル・モナミ・イチノアラ』

『はいっ！』

もな美は目を閉じて呼吸を整えた。一瞬、全ての思いを瞑じてしまつて、もな美は限りなく零に近いところへと心のレベルを下げてゆく。

『光が、見えた——！』

開かれた双眸には、いつもそこにある強い意志の色は宿つてはいなかった。

審査員達が俄かにざわめき始めてゆく。

ピアノのメロディーに乗って、もな美が動き出した……

水のように雪のように

「あの本にはとてもいい事が書いてあったわ。“あなたの輝きは、あなた自身の中にある——”とね。私は、自分の中に眠る輝きを見出そうとしたのよ……」

テーブルには色鮮やかなフルーツと、彫刻のように見事なお菓子が並んでいる。カップに温かい飲み物が注がれると、お茶の薫りが部屋中に漂い始める。

もな美はその薫りを深く吸い込んで目を閉じた。

「私が立つ場所は、巨大な劇場の舞台。そのステージで、プリマ・ドンナとして舞うイメージが心の中から消えてしまわないよう努めたわ。そして何度も自分にこう言い聞かせたの。私は風、私は翼、私は光——それをやってから、私の身体は不思議なほど軽くなっていたのよ……」

♪ ♪ ———

オーディションの会場でピアノが鳴り始めると、もな美の顔つきはすっかり別人のようになり、審査員達を動揺させた。緊張で神妙に強張っていた顔が、そこだけ朝陽が射しているような清々（すがすが）しさを呈しはじめたのだ。

純真と無垢—— たった今この世に生を受けて現れたように道も方向も持たず、360度無限大の空間がもな美の周りに広がっているように感じる。

何という存在感、何という圧倒！

審査員はうならせられ、受験生たちは蒼ざめて言葉もない。

もな美はそんな周りを気にもしないで、ただ何も想わず青い空や陽の光、咲き誇る花やそよ風の心地よさ、そういったものを愛しむように笑いつづけている。

しかしそんな笑っている少女も、ある日突然気づきはじめた。

“私って何のために生まれてきたの？”

“私どうしてここににいるのかしら？”

いくら考えても分からない。

何故なら、たとえどんなに頭が良くてもしはじき出せない答えだから。

少女は祈ります。“神様、私の疑問を教えてください”と。
そして、天からの回答はやって来た。

怒りや悲しみは 喜びの為にある

愚かな争いは 平和を想う為

挫折は 繁栄する為に

失敗は 成功の為に

貧しさは 豊かさを目指す為に

それぞれ存在するものと 声が聞こえる

さあ、恐がらないで 顔を上げて立ち上がり 前を向

きなさい

汝の行く方はどちらでもいい

天上でも地獄でも どこでも自由に選ぶ事ができる

さあ、選択しなさい 自分の心の命ずる方向を――

少女は、今度は頭で考えようとせずに自分に問いかけてみた。

“私の好きなものは 一体なんだろう？”

美しい自然 星空 楽しい莓狩り 褒められたとき

お祭り 美味しいご馳走 となりの男の子……？

少女の頬は薔薇色に……

ありがとう、わかりました 私信じます 豊かな心を

どんな意地悪な人も 微笑かければむこうも笑う

詐欺師だって悪人だって 愛すれば後悔の涙を流す筈

私は祈ります すべての人々の為に

そうすれば 愛はとめどもなく溢れ出して

激流のごとく留まるところを知らず 世界を浸してゆく

ピアノが止まった。

『はい、よろしい』

『……ありがとうございました』

もな美が見せたものは、単なる踊りではなかった。

それは、心の躍動。

もな美は心で上演された芝居を見事に演じて見せたのだ。

胸の中は充実感でいっぱいに満たされ、頬に熱い血潮が走って

いる。もな美の表情はいつも以上に輝きながら、オーディションの

会場を去って行った。

もう合否など、どうでもよくなっていた。渾身の演技の素晴ら

しさを知る事のほうが、よっぽど大切な事だとわかったから……

《汗をかくのが、こんなに心地いいなんて今まで思わなかった

わ。このすばらしい汗を、これからもたくさん流そう》

ヨーロッパへのウイニング・ダンスを踊ったときと同じく、或

いはそれ以上に晴々とした気持ちになっていた。そして口について

出てきた一言は……

「あとは野となれ、山となれ——」

言葉よ、届け

「1番線に停車中のトレインは、17時発急行地球行きでございます……」

「パパどーしたの？乗り場そっちじゃないよ」

「え？ああ、すまんすまん」

「モウ、大丈夫？ボーっとしちゃって」

「めんぼく面目ない……」

あのビーチの事件以来、フレードはクロディーネに会ってはいない。

せつかく彼女が好意を持ってくれたというのに、彼女の気持ちを踏みにじる事になってしまった。

カメラアに瓜うり二つの女性にふらりと傾いたのは間違いだったのだろうか？

浮気なりゾート惑星で、束の間つか眩まがしい夢を見たと思って忘れた方がいいのだろうと、フレードは無理矢理自分を納得させるしかないようだ。

ただ、ほろ苦い気持ちを抱いたまま、このトロピカル・プラネットを旅立つのが切なく心残りだ……

列車のステップに乗り込むとき、ターミナル・エントランスの方を振り向いてみた。

やはり、あの優雅ゆうがな佇たたずまいは見受けられない。

「ふ……」

小さな溜息をひとつつき、振り切るようにフレードは列車へと乗り込んだ。

「お帰りなさいませ、いかがでした？この星で存分にお楽しみに

なりましたでしょうか？」

「あ？ああ。自然豊かでない所だったよ」

「それは宜しゅうございました」

にこやかに笑うトピーは何も知らない。それに合わせるかのよう
にフレードはつくり笑みを浮かべて、周りの誰にも心配をかけぬよ
う、哀しい想いは自分の箱の中へ人知れずしまいこんだ。

（早くトレインが発車しないかなあ……）

もう、一秒でもすぐにトロピカル・プラネットを発ってしまった
い。

とつと次の星に向かって、恋の痛みなど思い出さないのが一番
だと時計ばかり気にしているが、こんな時に限ってトピーはさつさ
と業務に戻ってしまい、デймも黙って本ばかり読んでいる。発車
までの僅かな待ち時間が永遠のように思えてきてしまう。

（よし、何か読んで気を紛らそう）

「デйм、ちよつと図書室車に行ってくる」

フレードはコンパートメントを出てライブラリーに向かい、本を
物色し始めた。

（なるべくなら恋愛とは関係ない書物にしよう……）

頭を使って余計な事を考えないような難しい内容の書物を選んで
いると、ふと目についた物があった。

“宇宙の哲学と真理について”

（あ、これが良さそうだ。よし、これにしよう）

フレードはその書物を借りて自分のコンパートメントへと向かお
うとした時、車内アナウンスが流れた。

『皆様、大変お待たせ致しました。間もなく発車致します……』

（あ、いけない。すぐ戻らないとな）

ライブラリーは3号車、フレードたちのコンパートメントは最後
部なので、小急ぎに移動しなければならない。

靴音をバタバタと立て客車間のデッキを渡っていると、ふとデッ
キの窓に鮮やかな黄色いものが映り込んだので、フレードは思わず
持っていた書物をカシヤンと床に落としてしまった。

「！」

鮮やかな黄色……それはムームードレスで、胸元にレイを飾り、
栗色の巻き髪にも黄色い花を挿した姿が映っている。

「クロ……ディーネ？」

彼女は淋しげな表情で、躊躇いがちに立ち尽くしていたが、その
うち口を開き始めた。

「……………」

ガラス越しでは声が届かない。

フレードはドアの所へと回った。

「フレードさん！」

「クロディーネさん！……悪かった、本当にすまない。君の気持
ちを傷つけて、私は取り返しのない事をしてしまった」

「フレードさん、いいの。もういいの。あなたの心にいるひとに
嫉妬した私も悪いのです。愚かな私を許して下さい」

「クロディーネさん……」

二人はもう一度抱き合った。あのビーチでの続きのように……
さっきまでは少しでも早く発車して欲しいと思っていたくせに、
今は事故か車両トラブルでも起きて出発できないようにならないか
と願ってしまう。

そんな思いも聞き入れられる事なく、無情にも発車メロディーが
鳴り出した。

♪ ♪ ♪ ♪

「あつ！」

二人を引き裂くドアが閉められてしまった。

「……………」

クロディーネの唇が動いている。

《フレードさん、あなたを……愛してる》

列車は動き出した。

フレードはなりふり構わずに走り出す。

「クロディーネ……クロディーネ。私も君を……愛してる！」

他の乗客たちの怪訝な視線も気にならない。フレードは車両から車両へと駆けながら、窓越しに何度も叫んだ。

「クロディーネ、愛してる！」

《なあに？分からない》

クロディーネは耳を澄ます仕草で、フレードの言葉が読み取れないと言っている。

伝わらないもどかしさと、加速するスピードがフレードにダメージを与えてゆく。

段々息も切れて体が言う事を聞かなくなるが、どうしても伝えたい。伝えなければ、フレードの体は次の星に運ばれても、心はずっとこの星から旅立てないような気がする。

そうこうしてるうちコンパートメント車両に入ってしまったい、窓が見えなくなってしまった。

（クソッ！あとは最後部のデッキからしか見えないか。せめて姿だけ見ておきたい……）

フレードは全速力で列車の一番後ろのデッキへと向かった。

「ハッ、そうだ！声が届かなくても……」

人は、もうあとがない時などに前触れもなく妙案が浮かんでくるものである。それは、今フレードにも電光石火の如く訪れた。

最後部デッキに出ると、ホームの端まで走ってきた黄色いムームーに再び逢えた。

フレードは高く手を挙げると、最初に人差し指を立て、次に親指も立て、最後に小指も立てた。

（I・LOVE・YOU……）

クロディーネには見えただろうか？

アルファベットのI・L・Yを指で示した、地球をはじめあらゆる星で共通の“私はあなたを愛してます”という意味の手話だ。

これがフレードに出来る最後の精一杯の言葉だった。

（やはり通じてないのか？）

もう、プラットホームが遠くなってしまふ。

クロディーネも遠くなると思った瞬間、黄色いムームーから伸びた手が高く拳がった。

『I・L・Y……』

確かにその手もそう言っている！

「やった。通じた、通じたぞ！」

フレードも、同じ仕草を何度も何度も繰り返している。クロディーネのドレスが黄色い点になって、やがて見えなくなるまで……

その言葉は亡き妻でもその幻影でもなく、生きた体を持つれつきとした人に贈られたものだった。

（クロディーネ……カメラアじゃない君を、愛しているよ……）

フレードはもう一度トロピカル・プラネットに降り立って、今度は自分の口から彼女に直接言おうと、密かに心に誓うのだった――

奈落へのプレリユード

「そして私はオーディションに合格して、ル・グランシエルバレエ団に入団できたの。そのあとはもう、寝てもさめても死に物狂い。ふふふつ、もう夢中だったわね。あまりに夢中で、動画の早送りみたいな毎日だったわ。気がつけばプリマになってたって感じ。そう、貴女とともにヨーロッパで“日出^ひずる国の二人の美女”なんて言われたわね。少女の頃に描いた夢が現実のものとなり、私も栄華を極めて至福のときに酔いしれていたの……」

もな美は、天才日本人バレリーナとして世界の舞台で活躍をした。遠いあの日の「将来の夢」の作文の言葉どおり、絶賛の拍手を一身に浴びていたのだ。

しかし残酷にも、幸福の絶頂にいた彼女に魔の影が容赦なく忍び寄って行った……

「私のはじめに違和感を感じたのは、“金色の靴”という創作バレエを演じたときだったの……」

舞台は第三場、ヒロインは奇跡の靴を探し求めてさまようというソロの場面。

もな美はいつものように片足のポワント（爪先立ち）を決めようとした。

《……！？》

観客は何も気づかずに喝采かつさいを浴びせかけてきたけれど、どうも自分では納得がいかない。

《何？どうしたというの……？！！！》

重心がずれたというか、バランスを崩くずしたというか、ほんの一瞬だかもな美の足はいうことを聞かずに、すんでのところで踊りが台無しになってしまふところを必死で持ちこたえたのだ。

『モナミ、あれは何です！』

『申し訳ありません……』

バレエ団支配人のアデルにはやはり気づかれて、叱咤しったを受けてしまった。

『あなた最近レッスンに身が入ってないとの噂うわさだけど、うちのバレエ団始まって以来の東洋人プリマだと騒がれて、少しばかりいい気になってない？このまま天狗てんぐになって踊りに精進しんじんできないようなら、いつでもバックダンサーに戻しますよ！』

アデルの厳しい言葉きびに打ちひしがれながら、もな美はもう一度基本から強化べんたつすべく自分を鞭撻べんたつし続けた。

《このままプリマを降りるなんてイヤ！私は踊れる限り舞台で大輪の花を咲かせるのよ！！》

奮起^{ふんき}の甲斐^{かい}あつてその次の舞台では堂々と大胆に、苦しいほどの麗^{れい}しさで観覧席のオーディエンス達を魅了した。

『モナミ、ブラボオ!』

『Une belle femme De l'est! (東洋の美しいひとよ)』

しかし……

『あつ……!』

緞帳^{どんちやう}が下りてふつと息を抜いた途端、左足に激痛が走り、もな美は冷たい板の上へと崩れ落ちてしまったのだ。

愛はシューティングスター

「そのときの舞台の床のなんと冷たかったことか。その後運ばれた病院で、私は死の砂漠に放り出されたような宣告を受けてしまったのよ。できる事なら聞きたくはなかった……」

ティーカップが僅^{わず}かに震えている。

伏せた長い睫毛^{まつげ}が濡れているのが、私にはわかる。

私もできればその先を聞きたくないけれど、「やめて」とも言えなくて、キリキリと疼^{うず}く胸を押さえながら黙^うつて俯^{うつむ}くより他はなかった。

「担当医のシャンティエ先生は、いいお医者様だったわ。私を氣遣^{づか}つて下さって、いつも微笑^{ほほえ}みかけ、“痛いのは今だけで、苦しみなどきつとすぐに消えてしまいますよ”と私を励^{はげ}ましたの」

目を閉じたまま上を向いたもな美の頬に、薔薇色の光明が差した。それを見つけた私の胸の痛疼がいくらかおさまってゆく。

残酷な不幸せばかりではないのだと安堵の念に押さえられ、私はお茶の湯気に睫毛を潤わせて、また目を閉じた。

『主は汝を狩人の罾と、恐ろしい疫病から助け出されるからである。主はその羽をもって汝を覆われる。汝はその翼の下に避け所を得るであらう。その誠は大盾、また小盾である。』

汝は夜の恐ろしいものをも、昼に飛んでくる矢をも恐れることはない。また暗闇に歩き回る疫病をも真昼に荒らす滅びをも恐れることはない。たとえ千人が汝の傍らに倒れ、万人が汝の右に倒れても、その災いは汝に近づくことはない……わかりますか？マドモワゼル・モナミ』

『いえ、どういった意味ですか？シャンティエ先生』

『信じよ、さすれば汝に奇跡が起きよう——いいですか、検査の結果がどうであれ回復を信じるのです。もう一度舞台に立って踊るという希望を持ち続ける限り、あなたの足は完全を取り戻すでしょう』

シャンティエの言葉は、独りで横たわるもな美のベッドの寒さを暖めていた。もうバレエをやめなければいけないかも知れない——そんな失望感と戦っている時に、彼はもな美に勇気を薬のように与えつづけていった。

もっと早くシャンティエに邂逅していたなら、もな美の人生は別の方向に向かったかも知れない。彼女は恐らく、シャンティエに何か慕情めいた想いを抱いていて、それが育つと多分恋へと発展していたのだらう。私だって手に何らかの怪我を負って、シャンティエ医師に逢ったとしたら、間違いなく敬愛していたと思う。

しかし、もな美の左足は想像以上に気の毒な状態へと進行していたのだ。

『マドモワゼル・モナミ。検査の結果が出ましたが、これから私の言う事に対して恐れたり、取り乱したり、絶望したりなどの感情を捨てられると誓えますか？』

『はい。私は先生を信じているので大丈夫です。何を聞いても動揺はしません』

『そうですか、安心しました。では隠さずにお話致します。バレリーナのあなたにこんな残酷な事を言うのは非常に心が痛みます。しかし、悪魔だと罵られても告知しなければなりません。実は、あなたの足はOsteosarkom……つまり、骨肉腫にかかっています。病状はかなり進行していて、このまま放っておくと左足切断という事態が避けられなくなってしまうです。しかし……』

バン！

持っていた聖書が手から滑り落ちて、診察室に派手な音が響きわたってしまった。

流石にもな美も動揺の色は隠せなかったようだ。

シャンティエはもな美をフォローして宥めるように続けた。

『しかし、ここでひとつ約束して下さい。治るかどうかはあなたの意志ただひとつにかかっています。バレリーナとして復活する希望があるなら、舞台に立ったときの足の感触や踊りの振り付け、そしてオーディエンスの絶賛の嵐を思い浮かべ、そのヴィジョンを失わないで下さい。病気はあなたの強い意志に勝る事はできません。私と一緒に戦って頂けますね？』

『はい……私、決して負けたりしません。必ず克服してみせます！』

もな美は驚くほど素直に宣告を聞き、シャンティエの言う通りに病室でいつも心でバレエを踊っていた。目を閉じれば何千もの観客がいて、その拍手を感じながら諦めずに治療を続けた。

するとどうだろう、段々と痛みがひいてきて、車椅子を降りて

少しばかり歩けるようになってきたのだ！

もな美は喜び、とても感謝した。

そして彼女に奇跡が起きて足がすっかり自由になったら、彼女を救ったシャンティエ医師に一生を捧げてもいいと思い始めていた。太陽とつき合っていたのは自分勝手な嫉妬しとからくるものだと思ひづきだしたもな美は、その不遇ふぐうな恋に終わりを告げよう、そして新しい幸せに生きようと考えた。

けれど愛の女神は意地悪で、フランスで見つけた愛を結ぼうとしても、せっかく鎮しずまったもな美の心を弄もてあそんでしまうのだ。

『先生、足の具合がだいぶ良くなってきているようなので、少しばかり外出許可をいただけますか？日本へ帰ってする事がありますので』

『そうですね、長期間でなければいいでしょう。但し、無理はしないように』

『はい、せいぜい生きて戻れるようにしますわ』

『困った人だ、ははは……』

『うふふふ……』

入院先のサン・ピエール病院を後にする日、シャンティエはわざわざ休みをとってもな美を空港まで送ってくれた。もな美を氣遣きづかって優しくエスコートするシャンティエ。パツと見、誰の目にもこの二人はいい夫婦に見える事だろう。

『先生、本日はどうもありがとうございました。パリにはすぐ戻ってきますね。……あの、先生。もし私の足が元通りにすっきりよくなったら、その時は……その、ときは……』

『その時は……何ですか？』

『ゲールフランス航空537便・東京行きは、間もなく出発致します。ご利用のお客様はお急ぎ下さいませ……』

『いいえ、何でもありません。もう飛行機が出てしまうので行きますね。私きつと元気に踊れるようになって見せますので、それ

まで見守っていて下さいね。では、行って参ります』

ゲートの中からもな美は手を挙げ、千切れそうな程振っていた。シャンティエもそれに応えている。

暫くの間、二人は温かい感情をもって短い別れを惜しんでいた、

筈だった。

新しい愛を育てる為に太陽に“さよなら”と告げる旅だったのに、これが短い恋の終わりであると同時に、運命が掌を返そうとしているのを、もな美はまだ気づかずになっていた――

『先生、行ってきました。先生――!!』

～第三章へつづく～

#第二部 第二章（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。この小説は私のブログ「
宝のかんづめ」

<http://blog.sonet.ne.jp/kohakunotoki/archive/c5378073>

でも掲載しております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0352b/>

星の漣のむこうには

2010年10月10日02時26分発行